

県営築城跡地建替事業関係埋蔵文化財調査報告

築城千代遺跡

築城千代遺跡

-福岡県築上郡築上町所在遺跡の調査-

福岡県文化財調査報告書 第234集

福岡県文化財調査報告書

第一三四四集

二〇一二

九州歴史資料館

2012

九州歴史資料館

県営築城団地建替事業関係埋蔵文化財調査報告

築城千代遺跡

-福岡県築上郡築上町所在遺跡の調査-

福岡県文化財調査報告書 第234集

卷頭図版



染城千代遺跡遠景



第2次調査 1号溝

序

福岡県教育委員会では、県営築城団地建替事業に伴い、平成 16 年から平成 22 年にかけて 4 次に亘り、築上郡築上町築城に所在する築城千代遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその成果をまとめたものです。

築上町は周防灘に面した肥沃な地にあり、地味を生かした豊かな産物が特色です。古来からその恩恵のもと、様々な特色ある文化を育んでまいりました。築城千代遺跡の発掘調査では、古墳時代や古代の生活跡が見つかり、当時の人々の暮らしを知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 24 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 西谷 正

例　言

1. 本書は、県営住宅築城団地建替事業に伴い、平成 16・18・20・22 年度に福岡県教育委員会が実施した、築城千代（ついきちよ）遺跡 第1次～第4次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。各調査区の調査期間及び調査担当者は次の通りである。

第1次調査	平成 16 年 7 月 5 日～平成 16 年 10 月 28 日	吉田 東明
第2次調査	平成 18 年 10 月 23 日～平成 19 年 3 月 5 日	下原 幸裕
第3次調査	平成 20 年 9 月 9 日～平成 20 年 11 月 25 日	岸本 圭
第4次調査	平成 22 年 9 月 9 日～平成 20 年 10 月 19 日	木下 修
2. 発掘調査及び報告書作成は、福岡県土木部住宅管理課（現在は建築都市部県営住宅課）の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真は九州航空株式会社がラジコンヘリによる撮影、有限会社空中写真企画が気球による撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は、石川光一、横山智保子、内野陽子、城戸富士子、森潤アツ子、吉岡淳子の協力を得て調査担当者が行った。
5. 出土遺物の水洗、復元、実測、淨書作業は、調査担当者及び九州歴史資料館・福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所で行った。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「糸島」を改変したものである。本書で使用する座標は世界測地系による座標を使用し方位は座標北を使用する。
8. 平成 23 年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改変のため九州歴史資料館に移管された。
9. 本書の執筆は各調査担当者が行い、編集は吉田が行った。

目 次

I	はじめに	1
1	調査の経緯	1
2	調査・整理関係者	5
II	位置と環境	7
1	遺跡の地理的環境	7
2	遺跡の歴史的環境	7
III	調査の内容	15
1	築城千代遺跡 第1次調査	15
1)	調査の概要	15
2)	基本層序	15
3)	遺構と遺物	15
4)	小結	69
2	築城千代遺跡 第2次調査	73
1)	調査の概要	73
2)	基本層序	73
3)	遺構と遺物	74
4)	小結	96
3	築城千代遺跡 第3次調査	97
1)	調査の概要	97
2)	遺構と遺物	98
3)	小結	101
4	築城千代遺跡 第4次調査	103
1)	調査の概要	103
2)	遺構と遺物	103
3)	小結	108
IV	おわりに	109

図版目次

- 卷頭図版 上 藟城千代遺跡遠景
下 第2次調査 1号溝
- 図版1 1. 第1次調査区遠景（南上空から）
2. 第1次調査区遠景（東上空から）
- 図版2 1. 北半部全景（上空から）
2. 南半部全景（上空から）
- 図版3 1. 南半部近景（上空から）
2. 1号竪穴建物（東から）
3. 2号竪穴建物（南から）
- 図版4 1. 2号竪穴建物カマド（南から）
2. 2号竪穴建物下層（南から）
3. 2号竪穴建物完掘状態（南から）
- 図版5 1. 3号竪穴建物（南東から）
2. 4号竪穴建物（南東から）
3. 5～8・22～24号竪穴建物周辺（上空から）
- 図版6 1. 5～8号竪穴建物（南から）
2. 5～7号竪穴建物完掘状態（南から）
3. 10号竪穴建物（南から）
- 図版7 1. 11号竪穴建物、9号掘立柱建物（南から）
2. 12号竪穴建物（北東から）
3. 12号竪穴建物カマド（北東から）
- 図版8 1. 12～14号竪穴建物（東から）
2. 13号竪穴建物カマド（東から）
3. 15・16号竪穴建物（南東から）
- 図版9 1. 15号竪穴建物カマド（南から）
2. 16号竪穴建物カマド（南から）
3. 17号竪穴建物（南から）
- 図版10 1. 20号竪穴建物（南から）
2. 22号竪穴建物（南から）
3. 22号竪穴建物カマド（南から）
- 図版11 1. 22号竪穴建物完掘状態（南から）
2. 23号竪穴建物（南から）
3. 23号竪穴建物カマド（南から）
- 図版12 1. 24号竪穴建物（南から）
2. 1号掘立柱建物（西から）
3. 2号掘立柱建物（西から）

- 図版13 1. 3号掘立柱建物（東から）
2. 4号掘立柱建物（南から）
3. 5号掘立柱建物（南から）
- 図版14 1. 6号掘立柱建物（西から）
2. 7号掘立柱建物（南西から）
3. 8号掘立柱建物（南西から）
- 図版15 1. 10・11号掘立柱建物（西から）
2. 12号掘立柱建物（南から）
3. 9号竪穴（西から）
- 図版16 1. 18・19号竪穴（北から）
2. 21号竪穴（北から）
3. 1号土坑（北から）
- 図版17 1. 2号土坑（南から）
2. 3号土坑（北から）
3. ピット列（上空から）
- 図版18 1. ピット列（北から）
2. 南側段落ち（東から）
3. ピット遺物出土状態（西から）
- 図版19 第1次調査区出土遺物
- 図版20 1. 第2次調査区遠景（北東上空から）
2. 第2次調査区A区全景（上空から）
- 図版21 1. 第2次調査区B区全景（上空から）
2. 第2次調査区B区北半全景（上空から）
- 図版22 1. 第2次調査区C区全景（東から）
2. 第1トレーニ（南東から）
3. 第2トレーニ（北東から）
- 図版23 1. 1号土坑（南東から）
2. 1号溝北壁土層（南から）
3. 1号溝南壁土層（北から）
- 図版24 1. 1号溝中央部土層（北から）
2. 1号溝突出部土層（東から）
3. 1号溝突出部完掘状態（南から）
- 図版25 1. 1号溝南半部（南から）
2. 2号溝（南から）
- 図版26 1. 1・3～6号溝（北東から）
2. 3～5号溝（北西から）
3. 3～5号溝土層（北から）
- 図版27 1. 5号溝、道路状遺構土層（北から）

- 2. ピット1（東から）
- 3. ピット3（東から）
- 図版28 第2次調査区出土遺物①
- 図版29 第2次調査区出土遺物②
- 図版30 第2次調査区出土遺物③
- 図版31
 - 1. 第3次調査区遠景（南西上空から）
 - 2. 第3次調査区全景（北西上空から）
- 図版32
 - 1. 1区全景（上空から）
 - 2. 2区全景（上空から）
- 図版33
 - 1. 1号溝、道路状遺構（南から）
 - 2. 2区南壁、1号溝土層（北東から）
 - 3. 1号溝土層（北から）
- 図版34
 - 1. 2号溝（南西から）
 - 2. 2号溝北端断面土層（西から）
 - 3. 1号土坑断面土層（東から）
- 図版35
 - 1. 第4次調査区東半部（西から）
 - 2. 第4次調査区東半部（北から）
- 図版36
 - 1. 1号溝（南から）
 - 2. 2・5号溝（北から）
 - 3. 2号溝南端部（北から）
- 図版37
 - 1. 1号溝断面土層（南から）
 - 2. 3号溝断面土層（北から）
 - 3. 1号溝断面土層（北から）
- 図版38
 - 1. 第3次調査区出土遺物
 - 2. 第4次調査区出土遺物

挿 図 目 次

第1図	築城千代遺跡 第1次～第4次調査区位置図 (1/2,500)	2
第2図	築上町の位置	7
第3図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	8
第4図	築城千代遺跡 周辺地形図 (1/10,000)	11
第5図	築城千代遺跡 第1次～第4次調査区配置図 (1/1,000)	12
第6図	第1次調査区 遺構配置図 (1/300)	13・14
第7図	第1次調査区 基本土層図 (1/40)	16
第8図	1号竪穴建物実測図 (1/60)	17
第9図	1・2号竪穴建物出土遺物実測図 (1/3)	18
第10図	2号竪穴建物実測図 (1/60)	19

第11図	2号竪穴建物カマド実測図(1/30)	20
第12図	2号下層竪穴建物実測図(1/60)	21
第13図	3・4号竪穴建物実測図(1/60)	22
第14図	5号竪穴建物実測図(1/60)	23
第15図	5号竪穴建物カマド実測図(1/30)	24
第16図	5・6号竪穴建物出土遺物実測図(1/3)	25
第17図	6・7号竪穴建物実測図(1/60)	27
第18図	7号竪穴建物カマド実測図(1/30)	28
第19図	7・8・10号竪穴建物出土遺物実測図(1/3)	29
第20図	8・10号竪穴建物実測図(1/60)	30
第21図	10号竪穴建物カマド実測図(1/30)	31
第22図	11号竪穴建物、カマド実測図(1/60、1/30)	32
第23図	12・13号竪穴建物、カマド実測図(1/60、1/30)	33
第24図	12～15号竪穴建物出土遺物実測図(1/3)	35
第25図	14号竪穴建物実測図(1/60)	36
第26図	14号竪穴建物カマド実測図(1/30)	37
第27図	15・16号竪穴建物実測図(1/60)	38
第28図	15号竪穴建物カマド実測図(1/30)	39
第29図	16号竪穴建物カマド実測図(1/30)	40
第30図	16・22～24号竪穴建物出土遺物実測図(1/3)	41
第31図	17・20・22号竪穴建物、22号竪穴建物カマド実測図(1/60、1/30)	42
第32図	23・24号竪穴建物実測図(1/60)	44
第33図	23号竪穴建物カマド実測図(1/30)	45
第34図	1・2号掘立柱建物実測図(1/60)	47
第35図	掘立柱建物出土遺物実測図(1/3)	48
第36図	3・4号掘立柱建物実測図(1/60)	49
第37図	5・6号掘立柱建物実測図(1/60)	50
第38図	7・8号掘立柱建物実測図(1/60)	51
第39図	9・10号掘立柱建物実測図(1/60)	53
第40図	11・12号掘立柱建物実測図(1/60)	54
第41図	13号掘立柱建物実測図(1/60)	55
第42図	9・18号竪穴実測図(1/60)	56
第43図	竪穴出土遺物実測図(1/3)	57
第44図	19・21号竪穴実測図(1/60)	58
第45図	土坑実測図(2:1/30、他:1/60)	59
第46図	土坑出土遺物実測図(1/3)	60
第47図	柵列実測図(1/40)	60
第48図	ピット列実測図①(1/60)	61

第49図	ピット列実測図② (1/60)	62
第50図	南側段落ち断面土層図 (1/40)	63
第51図	ピット出土遺物実測図① (1/3)	65
第52図	ピット出土遺物実測図② (1/3)	66
第53図	石製品実測図 (1/2)	68
第54図	土製品・金属製品実測図 (1/2)	69
第55図	遺構群の群構造想定図 (1/750)	71
第56図	第2次調査区 位置図 (1/1,000)	73
第57図	第2次調査区 遺構配置図 (1/300)	75・76
第58図	第2次調査区 基本土層図 (1/60)	77
第59図	1号土坑実測図 (1/30)	78
第60図	溝実測図① (1/120)	79
第61図	溝実測図② (1/120)	80
第62図	1号溝土層図① (1/60)	81
第63図	1号溝土層図② (1/60)	82
第64図	1号溝上層・中層出土遺物実測図 (1/3)	83
第65図	1号溝下層出土遺物実測図① (1/3)	85
第66図	1号溝下層出土遺物実測図② (1/3)	86
第67図	2～5号溝、道路状遺構出土遺物実測図 (52:1/4、他:1/3)	88
第68図	6号溝実測図 (1/30)	90
第69図	道路状遺構実測図 (1/60)	91
第70図	ピット1・3実測図 (1/20)	92
第71図	ピット、その他出土遺物実測図 (1/3)	93
第72図	その他の出土遺物実測図 (2～5:1/1、1・6～9:1/2)	94
第73図	第3次調査区 遺構配置図 (1/300)	97
第74図	2区南壁・1号溝土層図 (1/60)	98
第75図	2号溝、1号土坑土層図 (1/60)	99
第76図	第3次調査区出土遺物実測図 (10・11・13:2/3、他:1/3)	100
第77図	第4次調査区 遺構配置図 (1/200)	102
第78図	1～3号溝土層図 (1/60)	103
第79図	1・2号土坑、1・3号溝土層図 (1/60)	104
第80図	石敷遺構、2号溝南壁土層図 (1/60)	105
第81図	石敷遺構実測図 (1/60)	106
第82図	溝出土遺物実測図 (4:2/3、他:1/3)	107
第83図	土坑、ピット出土遺物実測図 (1/3)	108

I はじめに

1 調査の経緯

福岡県営住宅築城団地は福岡県築上郡築上町（旧築城町）大字築城 50 番地にあり、福岡県建築都市部住宅管理課が管理する県営住宅である。旧団地の老朽化に伴い同課では平成 16 年から計 4 期に及ぶ建替事業を計画、事前に埋蔵文化財の有無について照会が行われた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが遺跡が存在する可能性もあったため、事前に試掘調査が必要である旨、築城町教育委員会から福岡県京築教育事務所、福岡県総務部文化財保護課を通じて住宅管理課に回答を行った。その後、平成 16 年 6 月 2 日に、福岡県教育庁京築教育事務所が第 1 期工事予定地の試掘調査を実施、遺構・遺物が確認されたため事業着工前に本調査が必要である旨建築都市部住宅管理課に回答を行った。その結果、工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施することとなり、建築都市部住宅管理課と教育庁総務部文化財保護課とで執行委任の手続きを行い、事務手続き終了後の 7 月から発掘調査を開始することとなった。なお、調査担当には京築教育事務所の文化財担当職員が当たることとなった。これが第 1 次調査である。

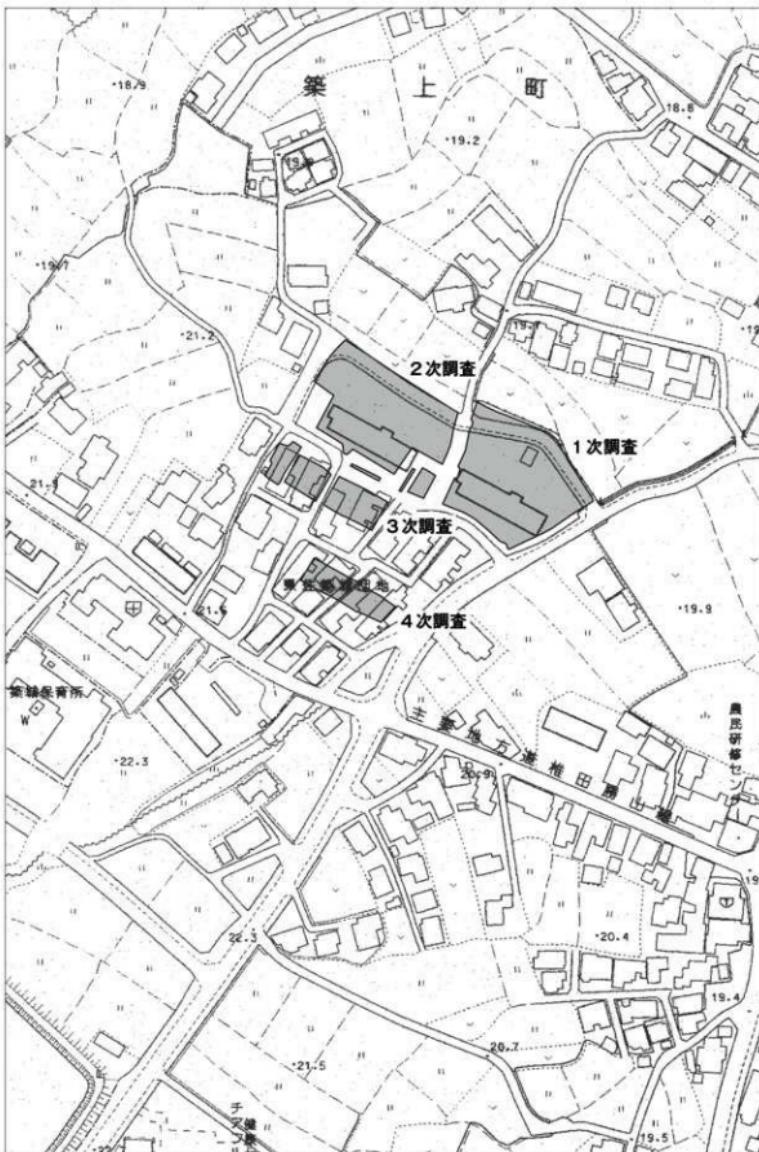


試掘調査の様子

第 1 次調査は平成 16 年 7 月 5 日から実施することとなり、調査期間を 4 ヶ月間と見込み、10 月末で発掘調査を終了、11 月から工事着工の予定で住宅管理課と協議を整えた。7 月 5 日に重機を投入、表土掘削から進めていった。表土掘削については調査区内で排土を処理する必要があったため、調査区を北半部と南半部とに区分し、北半部から表土掘削を行って南半部に排土を仮置きし、北半部調査終了後に南半部の排土を反転する作業方法を探すことになった。表土掘削と併行して調査区周辺の環境整備や地元区長、住民への説明、作業員の募集、築城町教育委員会との調整等も行った。7 月 13 日にユニットハウスを設置、リース機材の搬入を行い、14 日には発掘器財の搬入、同日午後に発掘作業員を集めて事業説明や安全衛生講習等を実施した。

7 月 16 日からは作業員による遺構検出作業を開始した。当初から堅穴建物や掘立柱建物等、目立った遺構が検出されたが、同時にかなり削平されて遺存状態が良くない事も判明した。また炎天下の作業であるため健康状態に配慮しつつ、地表面が乾燥すると遺構検出作業が著しく困難になるため、散水やシート被覆を行って極力乾燥を防ぐ措置を講じながら作業を進めていった。8 月 5 日からは掘削・写真撮影が終了した遺構から順次図化作業を進めていった。8 月 25 日には北半部の遺構掘削作業をほぼ終了し、翌 26 日に 1 回目の空中写真撮影を行った。空中写真撮影後、2 号堅穴建物の下層にもう一つ堅穴建物が存在する事が判ったため急ぎ調査を行い、9 月 2 日に北半部の全ての作業を完了した。

翌 9 月 3 日からは重機を使用して排土を反転し、南半部の表土掘削作業を進めた。8 月後半から



第1図 梁城千代遺跡 第1次～第4次調査区位置図（1/2,500）

9月前半は度重なる台風の襲来によって作業も遅延気味であったが、9月14日には再び作業員による人力掘削作業に入ることになった。北半部は遺構密度もかなり少い状況であったが、南半部は予想に反して遺構が極端に多く確認されたため、予定していた調査期間内に作業を終了させるために可能な限り迅速で効率的な作業手順に努めた。南半部調査時は台風による作業休止や著しい遺構の重複によって予想以上に手間取ることもあったが、10月22日に空中写真の撮影を実施、その後完掘や図化作業を進め、10月27日に全ての作業を完了、翌28日に器財を撤収し、予定期間に調査を完了することができた。

第2次調査は、平成18年10月23日に開始した。工事工程上、調査対象地の北側に工事用道路を設置することが急がれたため、まず調査区北半分（A区）を調査することになった。そこで南東角付近から重機（バックホー0.7）による表土掘削をはじめ、地山に至るまでの堆積状況を確認した。その結果、第1次調査区の堆積状況とはほぼ同じであることが判ったため、掘削範囲を拡大していった。なお、本来であれば黄褐色粘質地山土の直上にある黒色土が旧表土で、その上面が遺構面となるが、この黒色土と遺構埋土がほぼ同質で遺構検出が容易ではないため黄褐色地山土がみえつつある標高まで掘削した。25日からは重機による表土剥ぎと平行して、作業員によるブルーシート張りや土囊づくり、調査区周辺のロープ張りなどの基礎作業を開始した。

11月2日には発掘機材の搬入と、ハウス・トイレの設置を行った。7日から作業員による遺構検出を開始し、遺構の掘削を行った。また、8日にレベルと座標の移動を行い、16日に光波を用いて座標杭の打設を行った。17日には1号溝を確認し、22日から溝の掘削を始めた。なお、表土から遺構検出面までの深さが1.2m以上と非常に深いことから、掘削土量が極めて多く表土掘削と排土の移動に期間を費やし、表土掘削作業が終了したのは28日である。

12月中は雨天に悩まされ、水汲み作業と掘削作業・図面作製作業の繰り返しとなったが、12月27日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

その後、掘り残し部分の掘削と図面作製を行い、年が明けた平成19年1月9日から埋め戻し作業を開始した。埋め戻し作業は土量を勘案して重機2台で進め、11日からは調査区南半分（B区）の表土掘削に移った。ただ、工事期間との兼ね合いからB区については建物の建設範囲に限定して行い調査の進捗あるいは遺構の出土状況と合わせて適宜調査区の設定や拡張を行うこととした。

表土掘削が進むと、1号溝とは別に3・4号溝の存在が明らかになり、19日から溝が存在する部分については調査区一杯まで拡張をはじめた。また、期間に少し余裕があることから、23日に集落跡が発見された第1次調査区に近い南東側に調査区（C区）を新たに設け、平面的に遺構の有無の確認を行った。その結果、ピット以外の遺構は確認できなかった。また、25日には溝等の分布を重ねて確認するため、第1トレンチを調査南西端に設定し、26日には第2トレンチをB区とC区との間に設定し、遺構の確認を行った。その結果、第1・2トレンチではピットしか確認できず、即日測量と写真撮影を行い埋め戻した。

B区では溝の重複が激しく、上位の遺構の掘削、図面・写真撮影、下位の遺構掘削の順序で作業を進めた。そして、2月7日にはB区の空中写真撮影を行った。

撮影後、3・4・5号溝の延長部を調査区端まで一部拡張して掘削し、図面と写真的追加を行った。そして21日から空中写真撮影に向けて清掃を開始し、22日に撮影を行った。その後、図面の作成を継続し、27日には調査を終了し、28日から埋め戻しを開始した。

3月1日にはハウス・トイレなどの建機類を返却し、発掘機材等を事務所に引き上げた。埋め戻しは5日に完了し、即日現地を事業課へ引き渡した。

第3次調査地点は、築城団地改築工事の第3期工事に先立つものであり、第2期工区（平成18年度に実施した第2次調査地）の南側隣接地にあたる。第2次調査にて溝が今回の事業対象地に延びていることがほぼ確実であったこともあり、既に住宅建設課において工事工程中に文化財調査が組み込まれており、調査に至る協議も円滑に行われた。

まず平成20年5月1日に第1回の協議を実施した。既存建物解体は7月から着手し、建設工事は11月中旬からとの工程が提示され、その間が文化財調査とされた。既存建物は平屋建ての簡易な構造のものであり、建物基礎はごく浅いものであるとされ、かつ第2次調査における遺構検出面のレベルを勘案して、解体に伴う文化財への影響は少ないものと判断されたが、念のため解体工事の際に立会を実施することとした。また、工事対象地のほぼ中央に南北に走る排水路は、雨天時には機能するとのことであり、残すこととなった。調査対象は住宅建設地の約500m²としたが、表土層が比較的厚いものと想定されたため排土置場の確保が不安であり、調査区の反転が必要かどうか判断できず、それにより調査期間が左右されるとの協議を行った。

既存建物の解体に伴う立会は7月10日に実施し、建物基礎の深度がほぼ客土層に収まることと、客土層の下層には黒褐色の堆積土があり遺構面は検出されないことを確認した。また解体工事終了が予定よりも遅れしており、文化財調査は11月中旬には終了してほしいとの要望が出された。そして9月9日より発掘調査を開始することとなった。

調査は既存建物解体後の9月9日より重機による表土除去作業を開始した。約65cmの比較的厚い造成時の客土層の下位には、黒褐色の遺物包含層が堆積する。この遺物包含層に含まれる遺物はごく小片であり、量も極めて少ないとから、表土除去作業に併せて観察しつつ重機により掘削することとした。この客土層と遺物包含層は併せて約110cmの堆積となることから排土置場が確保できるかどうか不安であったが、何とか敷地内で収めることができ、発掘調査地を反転する作業を省略することができた。9月19日に重機による作業を終了させたが、伊良原ダム建設に係る発掘調査との関連もあり、作業員による遺構掘削作業は10月に入りながら本格的に動くことになった。調査区は水路を挟んだ2区画からなるが、西側を1区、東側を2区と定めた。検出された遺構が溝及びピットのみであったこともあり作業は順調に進んだ。掘削作業終了後の11月1日に気球による空中写真撮影を実施し、その後図面記録の作成等を実施した。住宅地内であることから安全対策の埋め戻しを11月12日から実施したが、それに併せて、調査区西側の広い空き地に今後の開発に備えて確認調査を実施してみたところ、溝と土坑を検出したことから遺構の平面確認と図化作業を急速実施したが、11月25日には全ての作業を終了することができた。第3次調査で検出された溝は、さらに南東方向へ延びることがほぼ確実視されたため、築城団地第4期工区においても事前の



現在の県営住宅築城団地

文化財調査が必要となること、また文化財調査報告書は最終年度の発掘調査の翌年度に刊行することと協議を済ませた。図面記録は全体図・土層図を1/20で作成した。

第4次調査区は築城団地改築工事の第4期工事に先立つものであり、第1期工区（平成16年度に実施した第1次調査地）の西側、第3期工区（平成20年度に実施した第3次調査地）の南側隣接地にあたる。調査に先立ち、県営住宅課との現地協議をもったのは平成22年8月18日である。調査対象を工事により影響を受ける範囲としたが、敷地は広いために工事掘削範囲を確定する必要があるとされた。これを受けて、9月3日に掘削位置の測量を行ったが、その結果調査面積は648m²となった。9月9日より重機による表土除去作業を開始し、9月14日から作業員とともに遺構掘削作業を開始した。

10月6日に全景写真を撮影。その後、10月7日より石敷遺構の掘り下げ、南側7層掘り下げ。10月15日に掘削作業を終了。18日から安全対策の埋め戻しを重機を用いて実施し、10月19日に全ての作業を終了した。

2 調査・整理関係者

平成16～22年度の発掘調査関係者、及び平成23年度の整理作業関係者は次のとおりである。

築城千代遺跡 第1次～3次調査（平成16～20年度）

福岡県教育委員会

	平成16年度	平成18年度	平成20年度
総括			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	橘崎 洋二郎	橘崎 洋二郎
総務部長	中原 一憲	大島 和寛	荒巻 俊彦
文化財保護課			
副理事長兼課長		磯村 幸男	磯村 幸男
課長	井上 祐弘		
副課長		佐々木隆彦	池邊 元明
参事	新原 正典	新原 正典	新原 正典
参事兼			
課長技術補佐	川述 昭人	池邊 元明 木下 修	小池 史哲
課長補佐	安川 正郷	安川 正郷	前原 俊史
庶務			
管理係長	稻尾 茂	井手 優二	富永 育夫
主任主事	末竹 元	潤上 大輔	小宮 辰之
調査・整理			
参事補佐兼			
調査第一係長	小池 史哲		
調査第一係長		小田 和利	小田 和利

主任技師 吉田 東明（京築教育事務所） 岸本 主
技師 下原 幸裕

築城千代遺跡 第4次調査・整理報告書作成（平成22・23年度）

福岡県教育委員会

平成22年度

平成23年度

総括

教育長 杉光 誠

杉光 誠

教育次長 荒巻 俊彦

荒巻 俊彦

総務部長 今田 義雄

今田 義雄

文化財保護課

課長 平川 昌弘

伊崎 俊秋

副課長 伊崎 俊秋

参事兼

課長技術補佐 小池 史哲

課長補佐 日高 公徳

甲木 浩

庶務

管理係長 富永 育夫

主任主事 仲野 洋輔

九州歴史資料館

館長 西谷 正

副館長 南里 正美

総務室長 圓城寺紀子

主任主事 近藤 一崇

調査・整理

調査第一係

参事補佐 木下 修

技術主査 岸本 主

文化財保護係

技術主査 吉田 東明

企画係 岸本 主

九州歴史資料館

学芸調査室

主任技師 下原 幸裕

文化財調査室 参事補佐 木下 修

なお、発掘調査及び整理作業にあたり、御理解・御協力いただきました関係各位に厚く感謝申し上げます。

II 位置と環境

1 遺跡の地理的環境

築上町は福岡県の東部、周防灘に面して位置し、北は行橋市、西はみやこ町、東は豊前市、南は大分県中津市に接している。平成18年1月10日に築城町と椎田町の二町が合併して誕生した新しい町である。人口は約20,000人、海浜部は遠浅の海が続き、春の潮干狩りの他、牡蠣やガザミも町の特産品として有名である。農産物では種々の野菜の他にイチジクやナシなどの果樹栽培も盛んである。航空自衛隊築城基地が置かれている事でも知られており、秋の航空祭は多くの人にぎわう。総面積は119.34km²で地形は南北に長く、南部はほとんどが山林で占められており、そこから流れ出る多くの河川が北部の平野を潤し周防灘へと注いでいる。町の南端には福岡県の主峰英彦山から続く山稜の一端である、標高1,124mの「一の岳」が頂点として聳え、東側の山脈には求菩提山や国見山、西側の山脈には鉢立山や猿尾山が連なる。山奥に端を発する城井川をはじめ、小山田川や岩丸川、極楽寺川、真如寺川など他の多くの河川が向きを揃えて山麓を開析し八つ手状の地形を生み出している。地質構造は基盤である花崗岩類の上に、第三期以降の耶馬溪層と呼ばれる凝灰角礫岩を主とした火山噴出物で覆われる、緩やかな丘陵地帯と山地を形成し、求菩提山付近より南の急峻な山岳地帯は、筑紫溶岩に属する溶岩流（輝石安山岩）が凝灰角礫岩や集塊岩の層の上にほぼ平行に重なっている。

今回報告する築城千代遺跡は、城井川下流域の左岸にある。この一帯は城井川の沖積作用によって広がった扇状地上に所在し、広大な平坦地を形成する。遺跡のある築城地区は旧町役場、駅、住宅、商店が集中し、旧町時代の政治、経済、文化の中心地であった。築城千代遺跡の周辺は市街地の周縁にあたりることもあり、宅地と耕地が入り交じった利用状況にある。

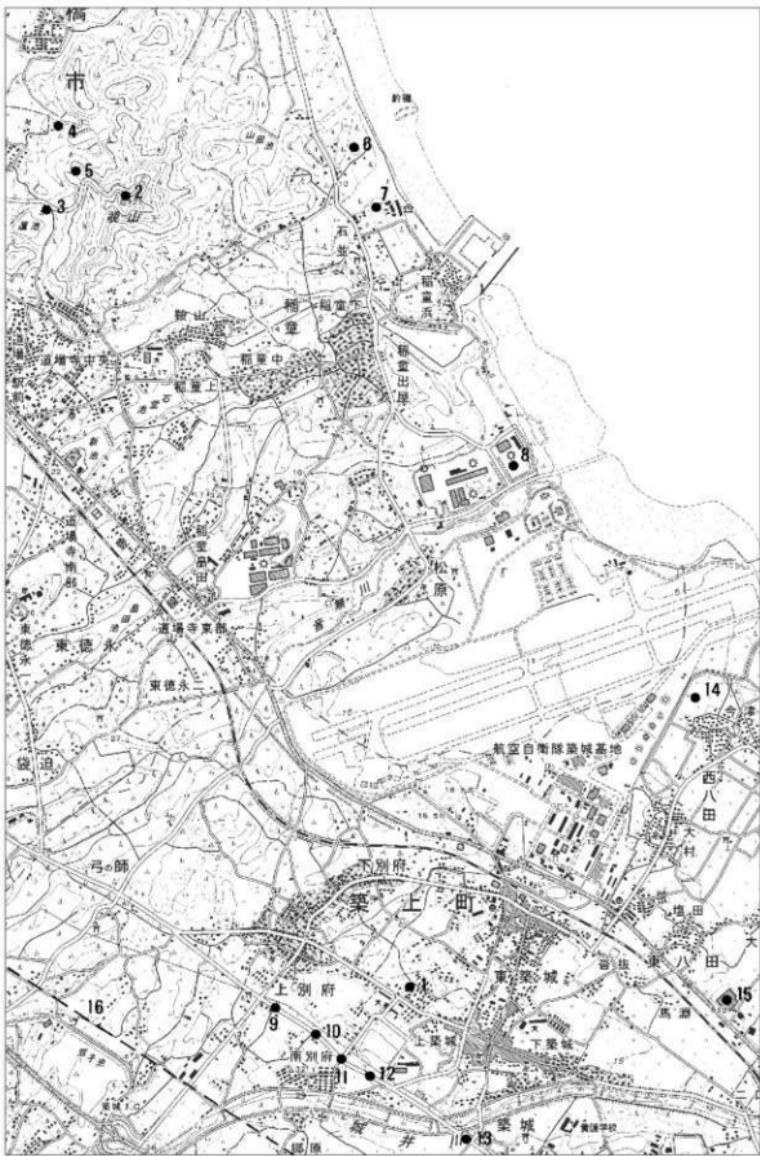
2 遺跡の歴史的環境

築上町内では現在、數カ所の遺跡で旧石器時代の遺物が確認されている。十日遺跡から出土した石槍をはじめ、越路貴船遺跡や越路六郎遺跡、越路長様遺跡、越路北ヶ崎遺跡で、旧石器に属すると思われる遺物が出土しているが、旧石器時代の遺跡として調査したものではなく、表探資料や後世の遺構の混入品として出土したものである。

縄文時代に入ると城井川上流域の段丘上に早期の遺跡が見られる。本庄大坪遺跡は平成5年に築城町教育委員会により発掘調査が実施され、早期初頭柏原式土器をはじめ、押型文土器やそれに伴う石器が多数出土している。他に松丸A遺跡や、平地部にある西八田平原遺跡などでも押型文土器が出土している。時期は不明確だが安武・土井ノ内遺跡や広末・安永遺跡ではこの頃のものと思われる落とし穴が発見されている。前期では、松丸D遺跡や西八田平原遺跡から轟B式土器が出土しているが、この時期の遺跡としては小原岩陰遺跡が著名である。平成4年に椎田町教育委員会



第2図 築上町の位置



- | | | | | | |
|-----------|-----------|------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 塔城千代道路 | 4. 馬場代古墳 | 7. 稲童古墳群 | 10. 上別府沖代道路 | 13. 塔城五反田道路 | 16. 古代官道推定線 |
| 2. 視山城跡 | 5. 小追谷古墳群 | 8. 渡墨紫道跡 | 11. 上別府西福寺道路 | 14. 西八田平原道路 | |
| 3. 穴田古墳群 | 6. 稲童石並古墳 | 9. 上別府園田道路 | 12. 塔城株木道路 | 15. 沖代道路 | |

第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

により発掘調査が行われ、早期から晩期の遺物や貝類、動物骨、人骨等も出土した。中期の遺跡としては、平地部の遺跡である東高塚弘法田遺跡が挙げられる。この地域では珍しく船元式土器が比較的まとまって出土している。

縄文時代後期になると豊前北部地域では遺跡数が大幅に増加する。築上町内では、椎田道路建設に先立ち昭和61・62年に福岡県教育委員会が発掘調査を行った山崎遺跡と、隣接する石町遺跡にて、鐘崎Ⅱ式期から北久根山式期の堅穴建物を伴う本格的な集落跡が見つかった。他に松丸D遺跡では北久根山式期から晩期末頃の遺構が見つかっている。晩期になると再び遺跡の数が減少する傾向にある。町内では十双遺跡や松丸D遺跡の他、杉ヶ丸遺跡や寒田櫻遺跡、真如寺野々丸遺跡、上深野・平越遺跡でこの頃の遺構、遺物が見つかっている。

弥生時代前期の遺構・遺物が見つかった遺跡として、松丸C・D・E遺跡など城井川中流域の遺跡があるが顕著な遺構群を形成している訳ではない。その中で、赤幡の下清水遺跡では前期末に比定される箱式石棺墓が見つかっている点は特筆される。

中期になると、広末・安永遺跡や広幡遺跡で堅穴建物の集落跡が見つかっており、生活の痕跡が顕著になる。安武・深田遺跡は弥生時代中期から後期に続く集落遺跡である。後期の遺跡には谷状遺構から大量の土器が出土した赤幡森ヶ坪遺跡、漢式土器が出土した十双遺跡をはじめ、築城五反田遺跡、上別府沖代遺跡など集落遺跡を中心に調査事例がある。

古墳時代の築上町は、生産遺跡に顕著な特徴がある。船追窓跡は6世紀後半から9世紀にかけて須恵器・瓦生産を行っており、工房跡である堂がへり遺跡とともに平成11年に国の史跡に指定された。また松丸F遺跡では7世紀代の製鉄炉と木炭窯が見つかっている。

集落遺跡では、椋本・西福寺遺跡で前期の堅穴建物、築城五反田遺跡、築城小迫遺跡で中期の堅穴建物、安武・深田遺跡、安武・土井の内遺跡、赤幡森ヶ坪遺跡で後期の堅穴建物が見つかっている。中期の堅穴建物にはL字形に煙道を長く伸ばしたカマドを付設する、いわゆるオンドル状カマドと呼ばれる形態のものも見られる。宇留津上角遺跡では中期の集落跡が見つかっており、土器類や木製品など豊富な出土品に恵まれた。

古墳は史跡船追窓跡の周辺に後期の円墳群があり、他に安永遺跡で4基の円墳の調査事例、石堂中後ヶ谷古墳群で16基の小型円墳の調査事例があるが、全体的に見て数はあまり多くなく、首長墳の形成も町域ではない。隣接する行橋市には稚童古墳群があり、特に5世紀代の古墳から出土した副葬品は武器や武具を中心構成され、当時の社会的情勢を如実に示す遺物として著名である。

古代、豊前国は八郡からなり、築上町は築城郡に属する。築城郡は『和名類聚抄』では綾幡、桑田、鶴木、大野の四郷とされる。今回調査を行った築城千代遺跡のある築上町築城の一帯は大野郷に比定される。築城郡の名称については「城を築く郡」「城の築かれた郡」と読めるが、その対象となる城については不明であり、あるいは城に関する名称と単純に捉えて良いのかも判らない。

豊前地域の古代官道はかなり正確な路線推定が行われており、数カ所で発掘調査による検証も行



国指定史跡 船追窓跡

われている。築上町内でも直線的な路線として位置の推定が行われている。築城郡内には築城駅が置かれたことが判っており築上町築城にあったのではないかと言われているが、詳しい事は判っていない。条里制については町内でも地割の推定がなされている地域が幾つかあるが、築城千代遺跡周辺は早くから市街地化が進んだこともあり明確な地割は残っていないようである。

古代の遺跡では、7世紀後半から8世紀頃の集落遺跡である越路貴船遺跡や越路長様遺跡、築城小追遺跡など、県道椎田勝山線の道路改良工事に伴って発見された事例が周辺にあり、今回報告する築城千代遺跡と時期的に重なる遺跡が多く見られる点は注目される。他に安武深田遺跡や山崎遺跡、日奈古・寺尾遺跡、赤幡森ヶ坪遺跡でも同時期の集落跡が見つかっており、付近に同時期の集落遺跡は多い。

9世紀以降の集落遺跡は少ないが、その中で10・11世紀の遺物が多く出土した越路六郎遺跡は重要である。また先述の船追窯跡では古代には瓦も生産されており、上坂庵寺や国分寺、国分尼寺に供給されたことが判っている。

古代末期、築城郡内はほとんどが宇佐神官領であったことが『宇佐大鏡』に記される。鎌倉時代になると鎌倉御家人である宇都宮信房が築城郡伝法寺庄に入部し、豊前国一带に勢力を拡大するに至る。鎌倉幕府滅亡後は宇都宮一族の城井氏が有力国人としての勢力を保ち続けたが、秀吉の九州征伐後に入封した黒田氏により滅亡する。

町内には城井氏に関連する山城が数多く知られる。宇都宮氏館跡をはじめ、発掘調査が行われた広輔城、本庄立屋敷遺跡で居館が確認され密接な関連が指摘される本庄城、小河内城、大平城、茶臼山城などがある。記録には「築城城」の記載があり現在の築上町築城字本丸、二ノ丸に比定されているが、遺跡としては確認されていない。

中世の集落遺跡も多く調査されている。上別府園田遺跡、小山田・寺ノ前遺跡、広末・松ヶ迫遺跡、伝法寺・杉ヶ丸遺跡、四反田遺跡、カヂヤ遺跡、本庄上ノ屋敷遺跡、山岳信仰の対象である飯盛山の麓で見つかった寒田櫻遺跡、小山田・スルメ田遺跡などがある。

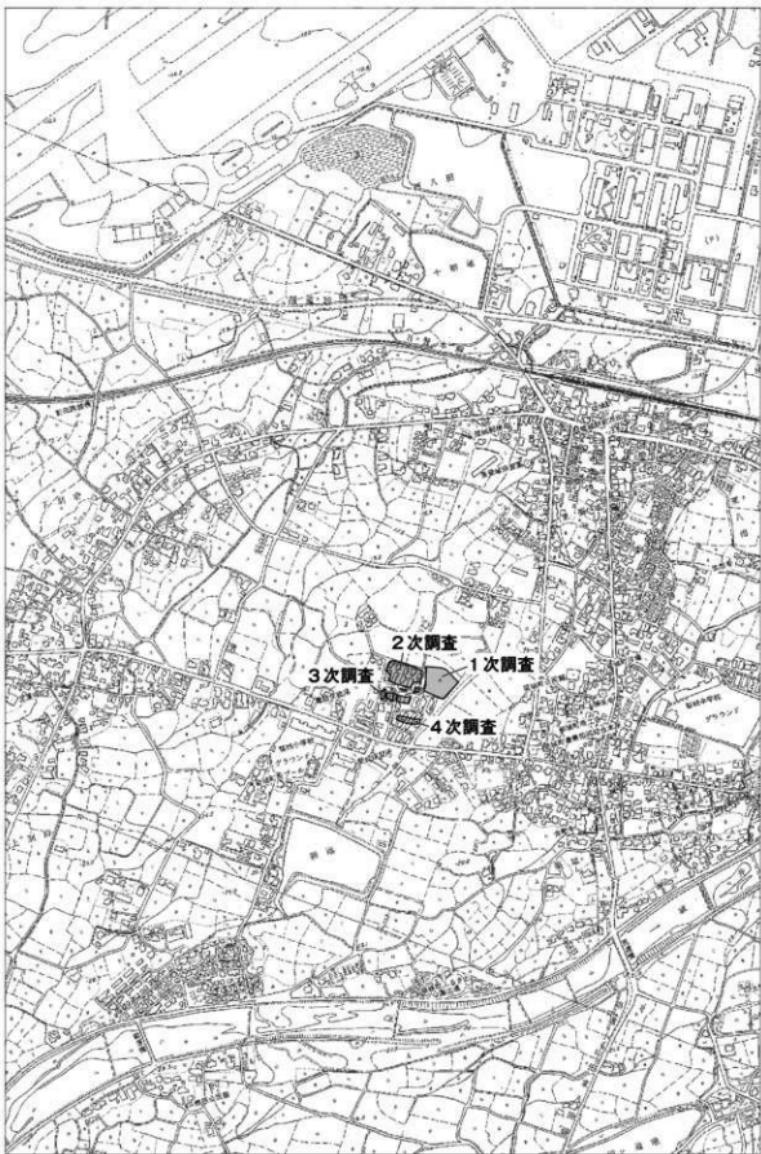
近世、豊前は細川氏の支配下に置かれ、その後細川氏の肥後転封とともに小笠原氏が新たな領主となる。築城郡は安武・椎田・角田・八田の手永に分けられ、遺跡のある一帯は八田手永の上築城村に区分され、小笠原藩政下でその支配機構に組み込まれた。近世遺跡の発掘調査事例として、近世墓の調査が行われた小山田・淨江谷遺跡、

良好な石疊が残る龍神の石疊、刀鍛冶の屋敷地
である長谷川邸遺跡などがある。

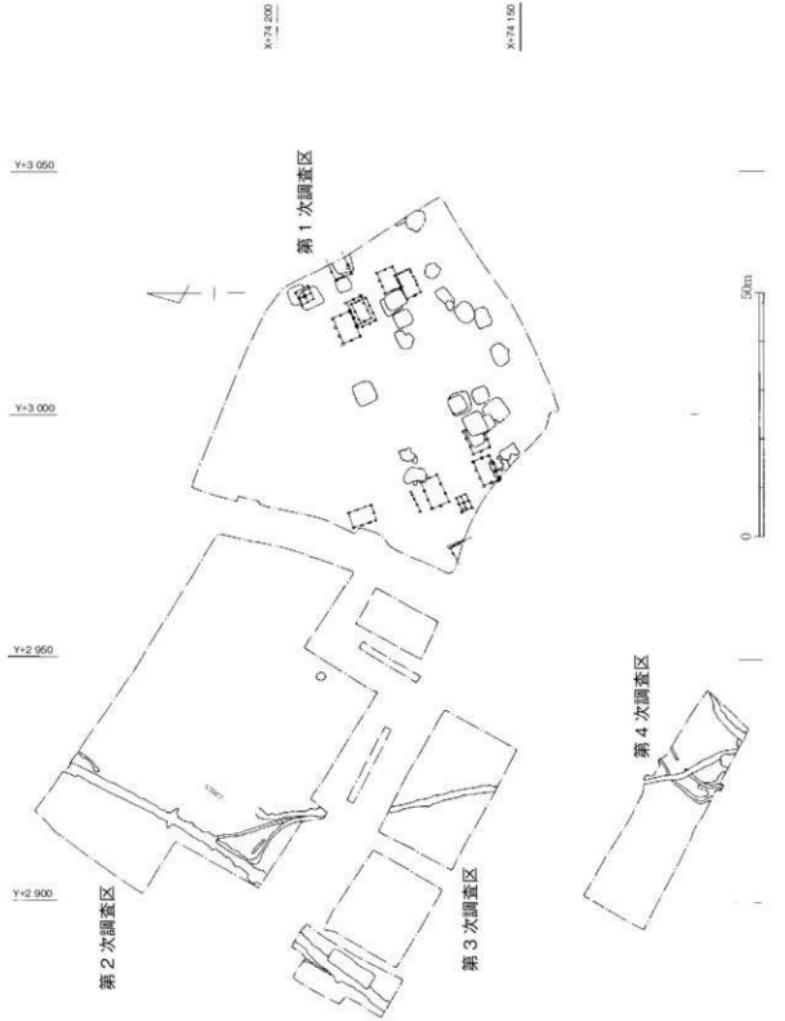
幕末の動乱の後に明治となり、廃藩置県を経て明治二十一年の市制町村制によって築城村が誕生、明治二十九年の郡制により築城郡・上毛郡を併せて築上郡が誕生した。太平洋戦争に際して町域に築城海軍航空隊が建設され、周辺には航空機の掩体壕や弾薬庫等も設置されたが、これらの一部は現在もなお現地に残されている。隣接する行橋市稻童には稻童1号掩体壕があり、市史跡に指定されている。



行橋市指定史跡 稲童1号掩体壕



第4図 鎌城千代遺跡 周辺地形図 (1/10,000)



第5図 茶城千代遺跡 第1次～第4次調査区配置図 (1/1,000)



第6図 第1次調査区 遺構配置図 (1/300)

III 調査の内容

1 築城千代遺跡 第1次調査

1) 調査の概要

第1次調査区は築城千代遺跡の南側に位置する。東西に77m、南北に74mの規模に及び、調査面積は約5,700m²を測る。遺構面の標高は、北側で19.5m、東側で19.4m、西側で19.6m、南側で19.6mを測り東側が他よりも少しだけ標高が低いが、ほぼ平坦な土地に遺跡が形成されていると考えて良い。遺構は調査区の全面で確認されたが、北側はピットが大半で顯著な遺構は無く、堅穴建物や掘立柱建物など遺跡を構成する主要な遺構は主に南半部に広がっている。更に細かく見ると、南半部でも西側、南西側、東側の三箇所に分かれて分布しており、中央付近は主要な遺構が存在しない空閑地が形成されている。

検出した主な遺構は、堅穴建物24棟、掘立柱建物13棟、堅穴4基、土坑4基、柵列1条、ピット列1条である。

2) 基本層序（第7図）

第7図A-A'は調査区北西側壁面の土層図である。調査以前は水田として利用されていたため、最上層には耕作土、その下には床土が見られる。その下には第4層黒褐色土が20~25cmの厚さで堆積する。その下層には第3層暗灰色土が10cm前後の厚さで堆積する。この第3・第4層は遺物包含層であるが、遺物の量は非常に少ない。第8層黄茶色土は無遺物層である。遺構はこの第8層に切り込まれているため、この層の上面を遺構面とした。第8層の下にある第5層は黄褐色土層である。

B-B'は調査区南西側壁面の土層図である。この付近はある段階で削平を受けていたらしく、第2層の床土の下層に第3層暗灰色土があり、第4層の堆積はほとんど見られない。しかしピット等の覆土は第4層と同質であることから、以前は第4層が堆積していたことが推察される。第5層黄褐色土は無遺物層で、この上面を遺構面とした。第5層が40cmほど堆積し、その下層は礫層になる。

C-C'は調査区北側壁面の土層図である。この一帯は既に耕作土が除去されていたため最上層に床土がある。床土の下層には第4層黒褐色土が堆積し、その間に一部床土と第4層とが混ざった薄い層が見られる。第4層の下に第3層暗灰色土、その下に無遺物層の第8層黄茶色土が見られ、この第8層上面を遺構面とした。

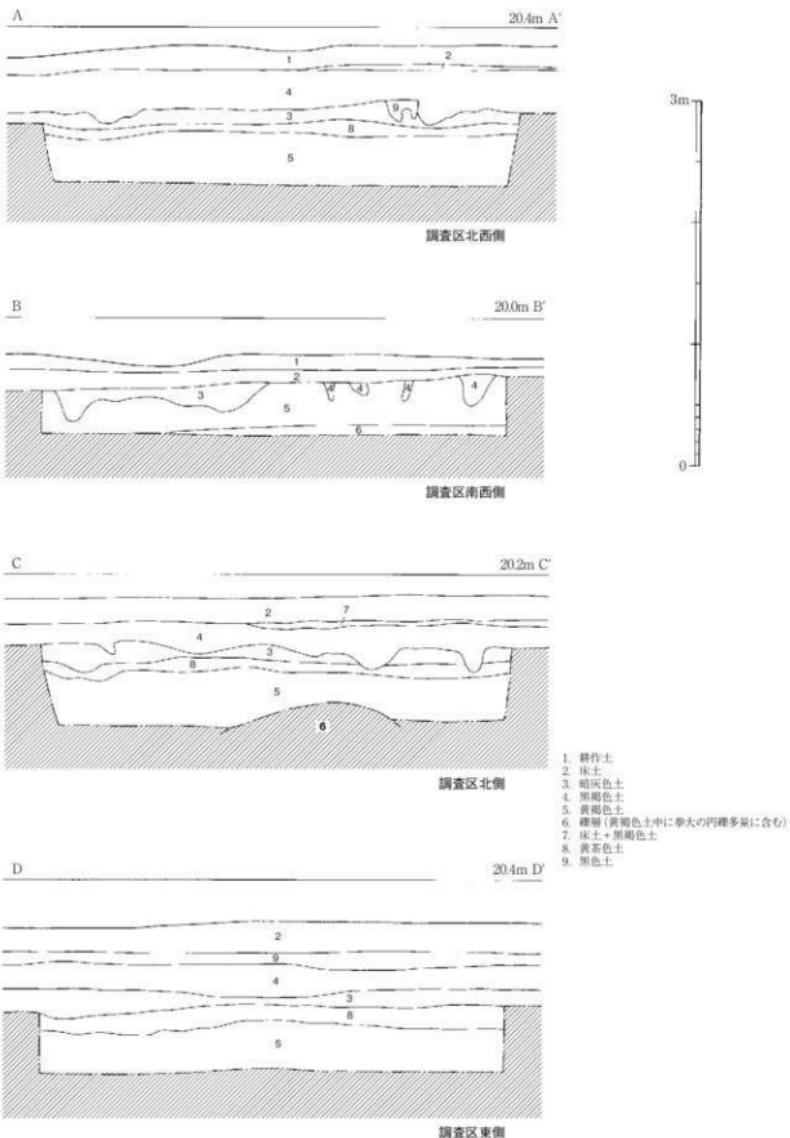
D-D'は調査区東側壁面の土層図である。ここでは床土の下層に第9層黒色土があり、その下層に第4層黒褐色土が堆積する。この二つの層は同類の層である。第4層以下は他の壁面の状況と変わらない。

3) 遺構と遺物

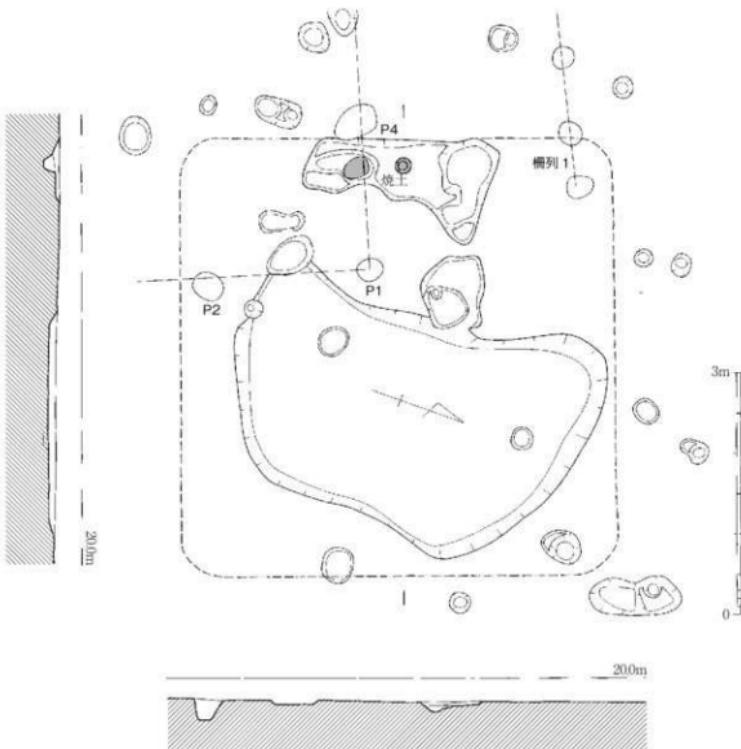
堅穴建物

1号堅穴建物（図版3、第8図）

調査区西側で検出した遺構である。2号掘立柱建物、1号柵列と重複する位置関係にあるが、遺構そのものが重複してはいないため重複関係からの先後関係の把握はできなかった。不整形の土坑



第7図 第1次調査区 基本土層図 (1/40)



第8図 1号堅穴建物実測図 (1/60)

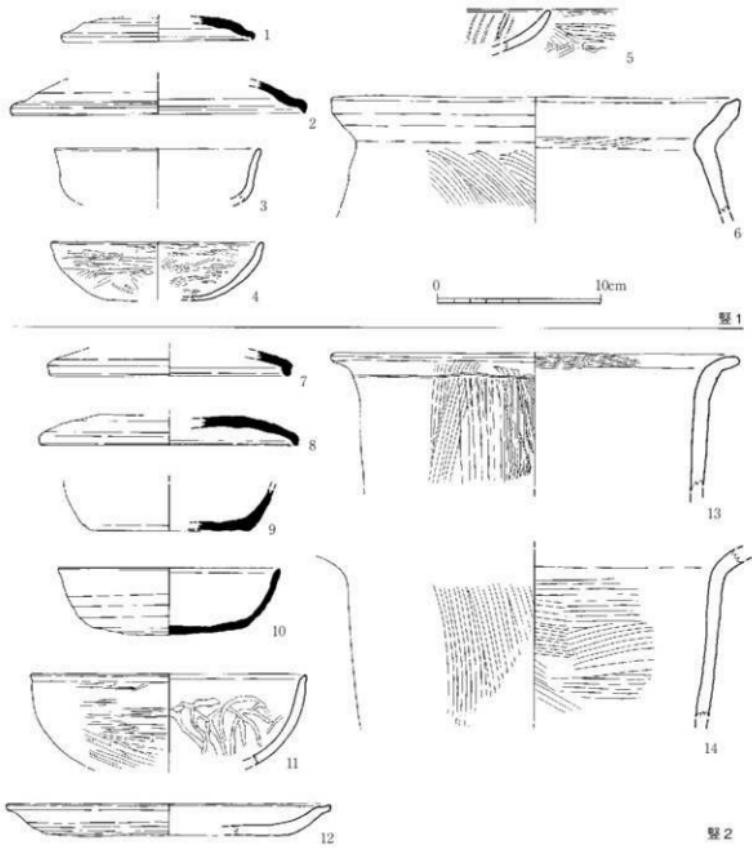
状の掘り込みしか遺存していないが、西側の掘り込みに焼土が見られることや、掘り込みの形状、周辺の遺構の削平具合から、堅穴建物が床面まで削平され下層の掘方しか残っていない遺構と判断するに至った。推定で一辺 5.5m 程度の隅丸方形プランになると考えられ、西側壁のほぼ中央にカマドを付設する構造になると思われる。主柱穴に比定されるピットはない。

西側の掘り込みは長軸 2.5m、短軸 1.3m、深さは 10 ~ 15cm 程度である。南側のピットの一部と中央付近の小ピットに焼土が確認された。中央のピットは直径 20cm、深さ 10cm。東側の掘り込みは長軸 4.5m、短軸 2.7m、深さ 10cm を測る。

出土遺物 (第9図)

須恵器 (1・2)

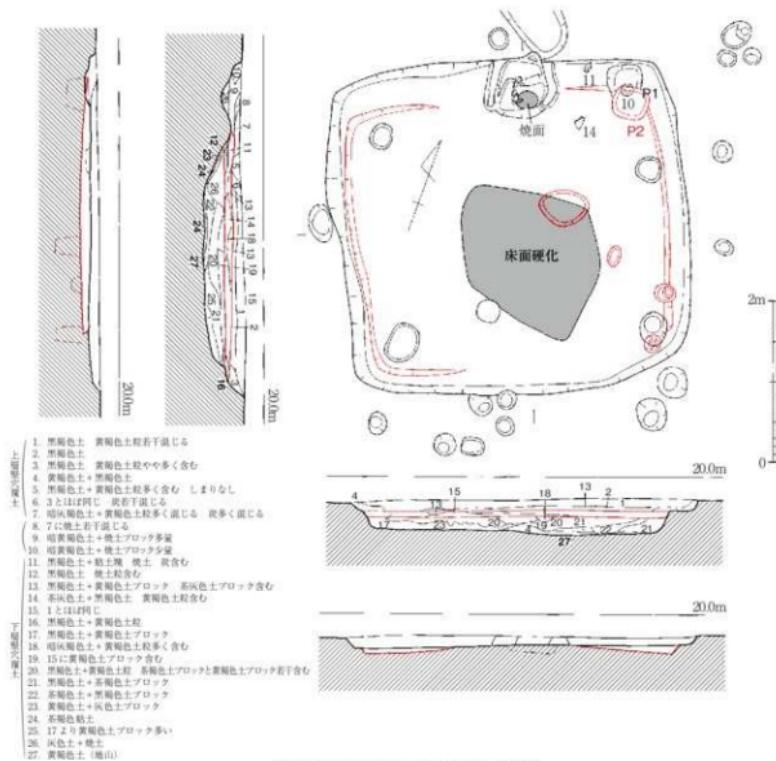
どちらも破片資料で天井部の形状は不明。1 は小型の蓋である。低平な器形で端部のみ小さく三角形に下を向く。口径 11.6cm。2 もやはり低平な器形で端部が嘴状に下を向く。



第9図 1・2号堅穴建物出土遺物実測図 (1/3)

土器器 (3~6)

3~5は壺である。3は口縁部付近の破片であり底部付近の形状は不明。体部は直立し、口縁部付近はわずかに外反する。外面は調整不明だが内面は横ナデを行う。胎土に角閃石を若干含む。口径12.6cm。4は丸味を帯びたやや浅い器形の壺である。内外面ともヘラミガキ調整を行う。胎土に砂粒をあまり含まない。口径13.0cm。5も丸味を帯びた浅い器形の壺。内面は放射状の暗文が見られる。外面は横方向のヘラミガキ。胎土に砂粒をあまり含まない。6は甕である。屈曲部が明瞭で口縁部は緩く内湾しながら開く。端部は強いナデのために三角状となる。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面はハケ後ナデ、外面はハケ目調整を行う。口径25.0cm。



第10図 2号竪穴建物実測図 (1/60)

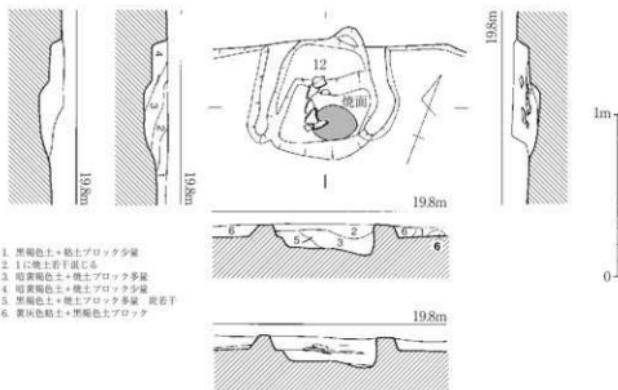
2号竪穴建物 (図版3、第10図)

調査区中央付近で検出した遺構である。周囲には他の竪穴建物や掘立柱建物は見られず単独で位置する。平面形は隅丸方形で、北壁の中央から少し東に寄った位置にカマドを付設しており、主軸方位はN - 20° - W にとる。東西4.1m、南北3.8mを測り、少し横に長い平面形となる。床面までの深さは15cm程度である。

床面の中央付近は、1.7m~2mの範囲で顯著に硬化した面が見られた。また床面上では幾つかのピットを検出したが、主柱穴になりそうな柱穴はなかった。北東隅にあるP1は径40cm、深さ5cm程度のピットだが、その中から10の須恵器壺が完形で出土した。他に11の土師器壺、14の甕または甌がカマド右脇から出土した。

2号竪穴建物カマド (図版4、第11図)

北壁の中央からやや東寄りに付設するカマドである。右袖長60cm、左袖長60cm、燃焼部は壁からの長さ70cm、袖間の幅は50cm。燃焼部は奥壁よりも手前側が一段低くなっている。奥壁か



第11図 2号堅穴建物カマド実測図 (1/30)

ら40cmほど手前の位置で20~30cmの範囲で焼面の広がりが確認でき、おおよその支脚の位置が推定される。壁際の中央から少し東に寄った位置には小さな煙道が見られる。カマド内からは土器が数点出土したが、12の土器器皿はここから出土したものである。

2号下層堅穴建物 (図版4、第12図)

2号堅穴建物の床面下層で確認した遺構である。2号堅穴建物の床面下層掘削中に顕著な硬化面と焼土の広がりを確認したため、もう一つの堅穴建物の存在が判明した。南北3.3m、東西4.0mを測り、2号堅穴建物よりも一回り小さい。深さは2号堅穴建物床面から10cm程度である。床面では、南北1.9m、東西1.1mの範囲で顕著な硬化面が確認された。また北側壁の中央からやや東寄りの位置で、壁際から40cmと70cm離れた内側で二つの焼面が検出され、既に削平されたカマドの痕跡であることが推察された。更に床面上では幾つかのピットを検出したが、その中でもP2は、深さは25cmと深いものの、2号堅穴建物P1とはほぼ同じ位置で同規模で検出された。これらの事から、2号堅穴建物下層の遺構は2号堅穴建物と類似する規模、構造で、2号堅穴建物に先行する建物であった事が判った。なお、この遺構の床面下層には深さ20~30cmの深さで更に掘り込みが検出された。

出土遺物のうち、7はP2から出土したものである。

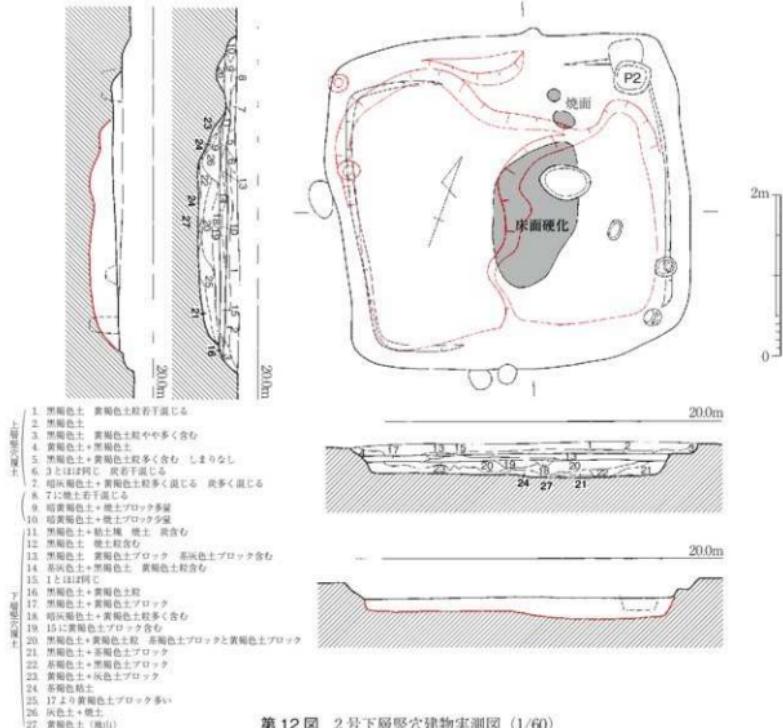
出土遺物 (図版19、第9図)

須恵器 (7~10)

7・8は蓋である。どちらも低平な器形で端部のみ下方に折り曲げており、その端部は丸くシャープに欠ける。口径14.8cm。8は覆土の最下層から出土。口径16.0cm。9・10は壺である。9は平坦な底部を有し体部との境も明瞭である。口縁部を欠失するため全体の器形は不明。焼成が悪く黄灰色を呈す。10は丸味を帯びた不安定な底部で体部との境もそれほど明瞭ではない。口径13.7cm、器高4.2cm。

土師器 (11~14)

11は丸く深みのある器形となる壺である。体部上半は直立し、口縁端部は外側に小さく外反す

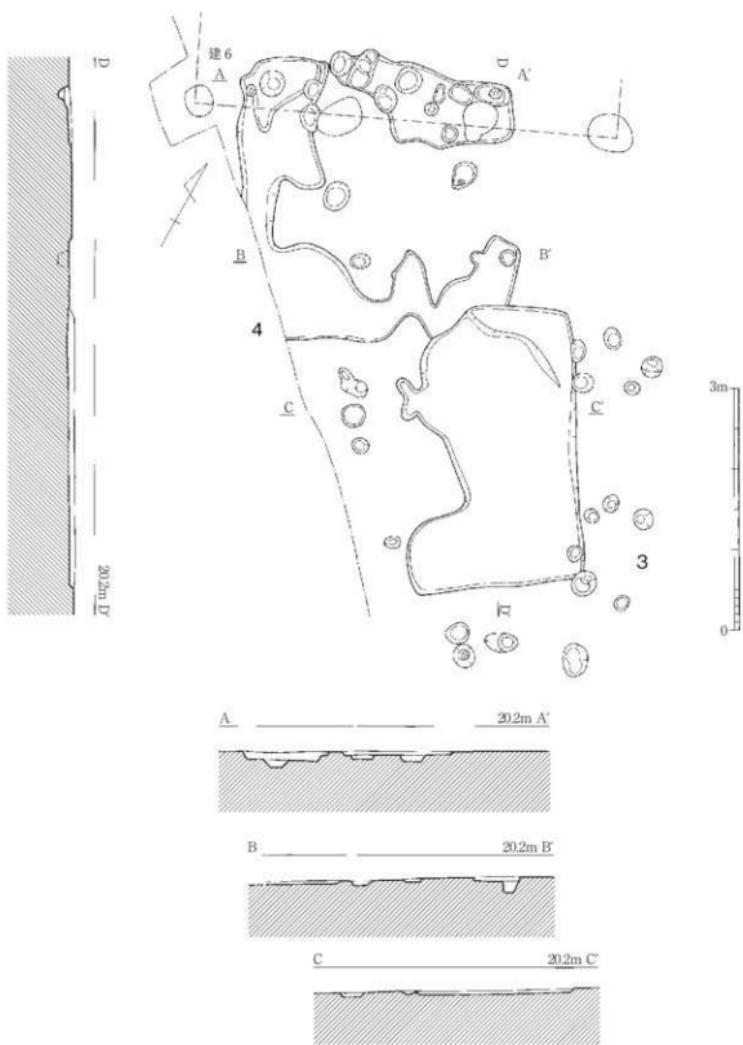


第12図 2号下層堅穴建物実測図 (1/60)

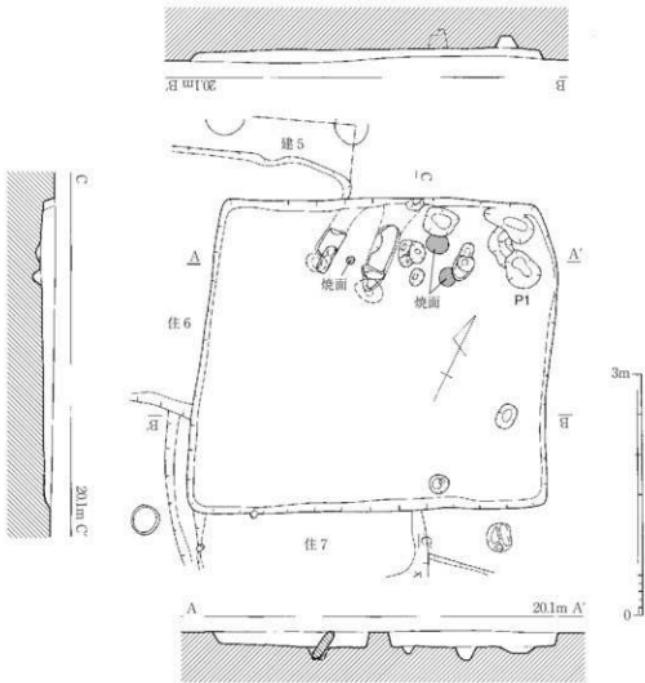
る。内面はナデの後に螺旋状のヘラミガキを行う。外面は横ヘラミガキ。胎土に石英、長石の粗砂が目立ち、色調は赤茶色を呈す。口径17.0cm。12は皿である。口縁端部が更に大きく開いた器形となる。口径20.0cm、器高1.9cm。13・14は甌または瓶である。13は胴部上半が直立し、口縁部が強く外反する器形となる。口縁部内面は横ハケ目、外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は継ハケ目調整。外面の口縁部下には段状の不明瞭な沈線が巡る。胎土に石英、長石、雲母の細砂を多く含む。口径25.0cm。14も胴部上半が締まらない器形となる。口縁部は外反しており、端部は欠失のため形狀不明。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面は横ハケ目、外面は継ハケ目調整。胎土に角閃石を多く含む。

3号堅穴建物 (図版5、第13図)

調査区南西端で検出した遺構である。4号堅穴建物と重複しており、これを切る位置にある。東壁の主軸方位は $N - 30^\circ - W$ を向く。かなり削平を受けており西半部が遺存していないが、残っている東側の壁は長さ3.3mを測り、およそその規模が推察される。床面までの深さは5cmに過ぎ



第13図 3・4号堅穴建物実測図 (1/60)



第14図 5号竪穴建物実測図(1/60)

ない。削平された床面の範囲も含めてピットはいくつか検出されたが主柱穴となるようなものはない。またカマドの痕跡等も検出することができなかった。

4号竪穴建物（図版5、第13図）

調査区南西端で検出した遺構である。3号竪穴建物と重複しており、これに切られる。南西側は調査区外へと続いている。また6号掘立柱建物と重複するが先後関係は判らなかった。かなり削平を受けており中央から東側壁にかけて遺存していないが、残る範囲から計測すると東西3.4m、南北3.5mのはば正方形の隅丸方形プランになる。西壁の主軸方位はN-34°-Wを向く。床面の深さは5cm程度に過ぎない。ピットは幾つか検出しておらず特に北壁付近ではピットが集中する傾向にあったが、明確に主柱穴と思われるようなものは無かった。またカマドの存在を想定させるような焼面等も検出されなかった。

5号竪穴建物（図版5・6、第14図）

調査区南西側で検出した遺構である。3・4号竪穴建物から10mほど東側に位置する。6・7号竪

穴建物、5号掘立柱建物と重複しており、先後関係ではこれらよりも新しい。平面形はややいびつな隅丸方形プランで、主軸を N - 20° - W に向け、北壁長3.9m、南壁長4.4m、東壁長3.7mを測る。床面までの深さは20cmを測る。北壁のほぼ中央にカマドを付設する。床面上では幾つかのピットを検出し、特にカマド右側から北東隅部にかけては複数のピットが集中するが、主柱穴と思われるものはなかった。P1は位置からは妥当と思われるが深さは10cmに過ぎない。カマド右側床面上では二箇所で焼面を検出した。床

面硬化については確認できなかった。

5号竪穴建物カマド（図版6、第15図）

北壁のほぼ中央に付設するカマドである。遺構確認段階で二個の立石と焼土の範囲からカマドの存在は想定していたが、粘土を使用せず固く叩き締めた構築法でもなかつたためカマド袖の形状を把握するのが困難であり、一般的に見られるように壁に対して直角に構築される構造を推定して掘削した結果、壁に接する部分を掘りすぎてしまった。カマド袖石の位置とカマド袖の構築土、及び壁際に残った構築土の位置から推察して、壁に対して主軸が直交せず斜め方向に付設されたカマドの構造を推定する結果となった。この推定によれば主軸方位は N - 0° -

W となる。カマド右袖は長さ1.3m、左袖は1.0m、燃焼部の幅は40cm。壁際から70cm離れた位置に10cm程の範囲で焼面が見られ、この付近に支脚があったと思われる。カマド焚口部には円礫を両側に立てて構造上の補強を行っている。

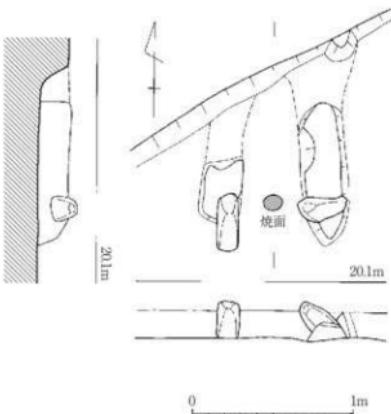
出土遺物のうち、1・5・7はカマド右側で出土、9・11はカマド内部出土、8はP1出土である。

出土遺物（図版19、第16図）

須恵器（1～7）

1・2は蓋である。1は低平な器形で端部のみ下方に短く折り曲げている。天井部には扁平なツマミを貼り付ける。口径14.6cm、器高3.2cm。カマド右側で出土。2もやはり低い器形で端部のみ短く下方に折り曲げている。端部は三角状に尖る。天井部のツマミ部は輪状を呈す。口径13.0cm、器高2.4cm。3～7は壺である。3は底部が平坦で体部が直線的に開く器形となる。口径13.0cm、器高3.1cm、底径8.8cm。4も3と同様体部が直線的に開く器形となる。口径15.0cm、器高4.2cm、底径9.6cm。5は屈曲部近くに高台を貼り付ける。体部の開きは直線的である。高台部径10.6cm。カマド右側で出土。6・7は口縁部片である。6は口径13.2cm、7は復元口径17.4cmとなるが、小片であり復元径に不安が残る。体部は直線的であまり開かない器形となるようである。カマド右側で出土。

土師器（8～14）



第15図 5号竪穴建物カマド実測図 (1/30)

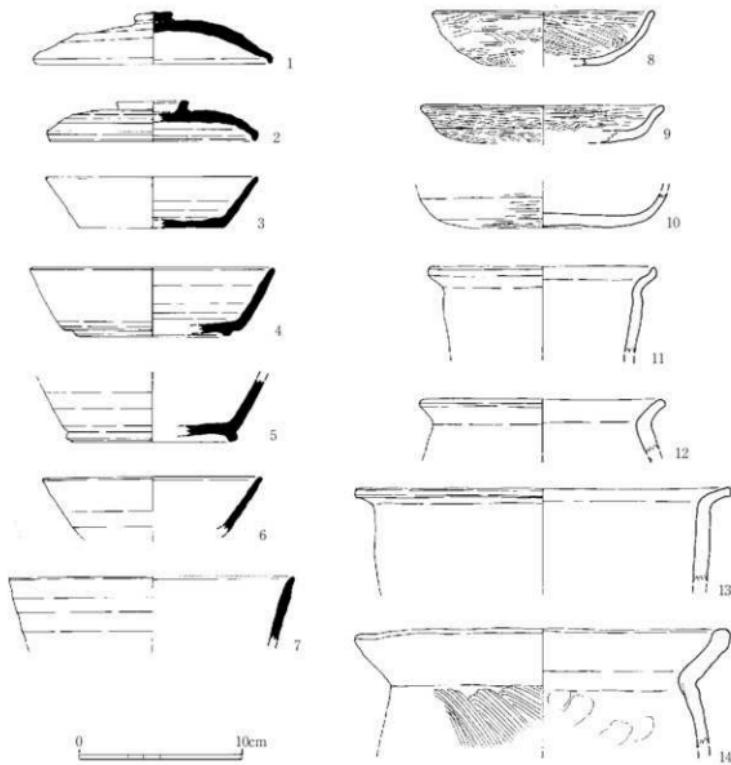


図 5

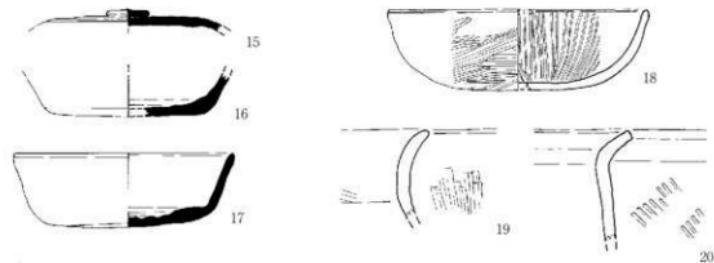


図 6

第16図 5・6号竖穴建物出土遺物実測図 (1/3)

8は土師器坏である。底部は平坦で体部は丸味を有して開き気味に立ち上がり、浅い器形となる。調整は内外面とも横ヘラミガキを行う。口径17.6cm、器高3.4cm。9は皿である。体部は外反気味に短く立ち上がる。調整は内外面とも横ヘラミガキ。口径15.0cm。カマド内出土。10も恐らく皿であろう。底部は平坦で底部と体部の境は丸く不明瞭である。内面の調整は風化が著しく不明だが、外面は横ヘラミガキを行う。11～14は甕である。11は小型の甕で、胴部上半は開き気味に立ち上がり、口縁部は内湾して開く。調整は内面ナデ、外面は風化が著しく不明。胎土に石英、長石、角閃石を含む。口径14cm。カマド内出土。12も小型の部類に含まれる。胴部上半は内傾し、口縁部は短く開く。胎土に石英や長石の粗砂を多く含む。口径15.0cm。13は胴部が直立し、口縁部は短く強く外反する。端部は面をなす。調整は内外面ともナデを行う。胎土に石英、長石、角閃石を含む。口径23cm。14は胴部上半が内傾し、口縁部は内湾しながら開く。端部は丸く、胴部に比べて器壁が厚くなる。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面はナデ、外面は斜ハケ目。胎土に石英、長石の粗砂をやや多く含む。口径23cm。

6号竪穴建物（図版5・6、第17図）

調査区南西側で検出した遺構である。5・7号竪穴建物、5号掘立柱建物と重複する位置にあり、先後関係では5・6号竪穴建物よりも古い。また5号掘立柱建物とは遺構そのものが直接切り合う箇所がないので重複による新古の判断はできない。南東側の壁面を失うが遺存した箇所で平面形の把握は可能である。平面形はややいびつな隅丸長方形プランで、北壁長4.1m、西壁長2.1mを測る。短軸をN-20°-Wに向かって、床面までの深さは20cmを測る。カマドは確認できず、また北壁際の中央から東に寄った位置に粘土塊を検出したが火を受けた様子ではなくこれがカマドに由来するものかどうか判断できなかった。床面上では二つのピットを検出したが主柱穴と思われるものではなかった。床面の下層で深さ5～10cmの掘方を検出しておらず、この掘方は北壁際でテラス状の段を有し南側の一部が外へ張り出した平面形となる。

出土遺物（図版19、第16図）

須恵器（15～17）

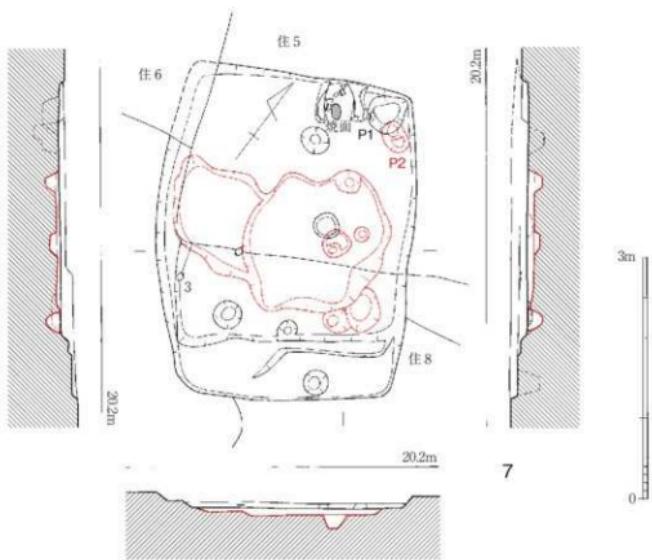
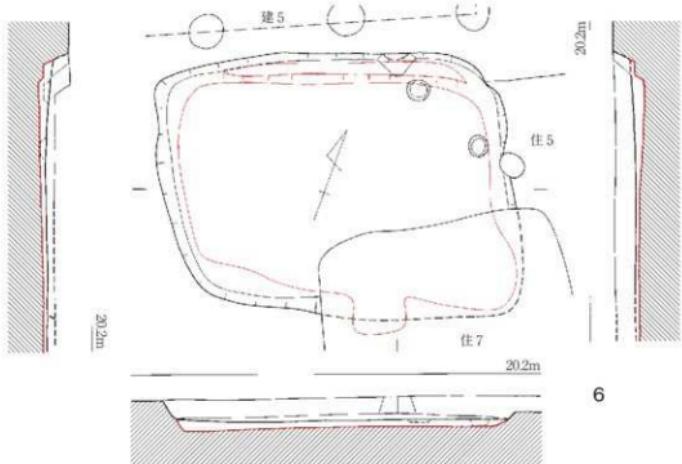
15は蓋である。天井部には低平な円盤状のツマミが貼り付けられる。16・17は平坦な底部となる坏である。どちらも焼成が悪く軟質で明灰色を呈す。16は底径10.4cm。17はやや深みのある器形となる。口径13.0cm、器高4.6cm。

土師器（18～20）

18は坏である。底部は平坦だが体部との境は丸く不明瞭である。口縁部はあまり開かずに立ち上がり、丸味を帯びた器形となる。内面は放射状のヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを行う。口径16cm、器高4.9cm。19・20は甕である。19は丸く緩やかに外反する口縁部片である。外面の口縁部下には幅8mm程度の工具によるハケ目状の擦痕が見られる。胎土には石英、長石の細砂を若干含む。20は胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。端部は面をなす。胴部内面はナデ、外面は平行タタキを行う。胎土に石英、長石、角閃石の細砂粒を含む。

7号竪穴建物（図版5・6、第17図）

調査区南西側で検出した遺構である。5・6・8号竪穴建物、5号掘立柱建物と重複しており、先



第17図 6・7号堅穴建物実測図 (1/60)

後関係では5号堅穴建物より古く6・8号堅穴建物よりも新しい。5号掘立柱建物との先後関係は遺構が直接重複する箇所がないため不明である。平面形は隅丸長方形プランで主軸をN-38°-Wに向け、南壁長2.7m、東壁長3.7mを測る。6号堅穴建物と重複する北西隅部は本来であれば壁の線を確認できたはずだが確認できないままで掘り下げを行ってしまった。床面までの深さは中央付近で20cm、南側はテラス状に浅くなってしまっておりこの箇所の深さは10cmを測る。北壁の中央から東に寄った位置にカマドを付設する。床面上では幾つかのピットを検出したが、明確に主柱穴と想定されるものはなかった。カマド右脇には径50cm、深さ25cmのP1を検出した。床面硬化については確認できなかった。また床面下層では中央に不整形の浅い落ち込みと幾つかのピットを検出した。中央の落ち込みは長軸2.8m、短軸1.6m、深さ10cmを測る。

7号堅穴建物カマド（図版5・6、第18図）

北壁の中央から70cmほど東寄りの壁際には付設するカマドである。右袖は長さ50cm、幅20cm、高さ10cm、左袖は長さ55cm、幅10cm、高さ10cmの規模で遺存していた。燃焼部の幅は35cmで、奥壁から30cmの位置に径10~25cmの範囲で焼面の広がりが確認された。

出土遺物のうち、1は床面直上で出土、2はカマド内とカマド右脇出土、3は西壁際床面直上で出土、4はカマド内出土、7はP2出土である。

出土遺物（第19図）

須恵器（1・2）

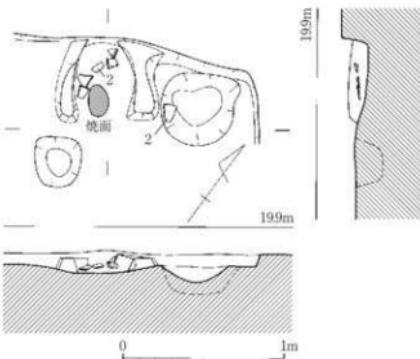
1は床面直上で出土した壺の底部片である。体部との境の屈曲部からやや

内側に入った位置に、低い断面四角形の高台を貼り付ける。高台部径10.6cm。2はカマド内や床面直上で出土した壺の胴部片である。内面は不明瞭な同心円当て具痕が残る。外側は格子タタキ。

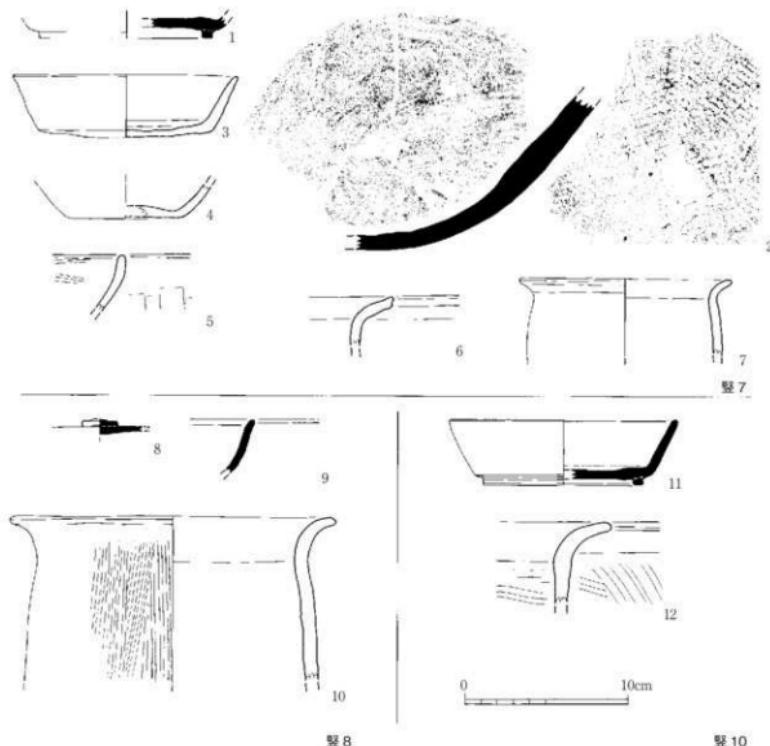
土師器（3~7）

3~5は土師器壺である。3は底部が平坦で体部との境は明瞭な屈曲を有し、体部は直線的に開いている。胎土に石英、長石の粗砂をやや多く含む。口径13.8cm、底径10.6cm、器高3.8cm。4はカマド内出土。底部は平坦で屈曲部は明瞭な棱をなす。底径7.0cm。5は丸く深いある器形となる壺で、口縁部は直立する。内面は横ヘラミガキ、外側の下半にはヘラナデが見られる。

6・7は壺である。6は胴部上半が締まらず、口縁部のみ外反する器形となる。端部は強い横ナデにより面をなす。胎土に角閃石を多く含む。7は小型の壺である。胴部上半がわずかに締まり、口縁部が丸く外反する。胴部内面と口縁部はナデ、胴部外側は剥離が著しく調整不良。口径13.0cm。



第18図 7号堅穴建物カマド実測図(1/30)



第19図 7・8・10号竪穴建物出土遺物実測図 (1/3)

8号竪穴建物 (図版5・6、第20図)

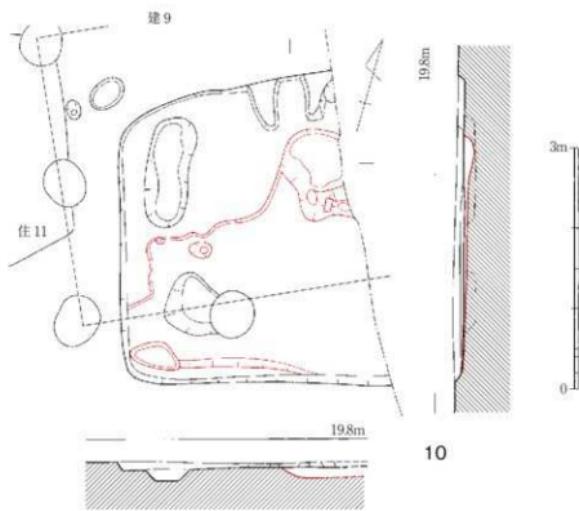
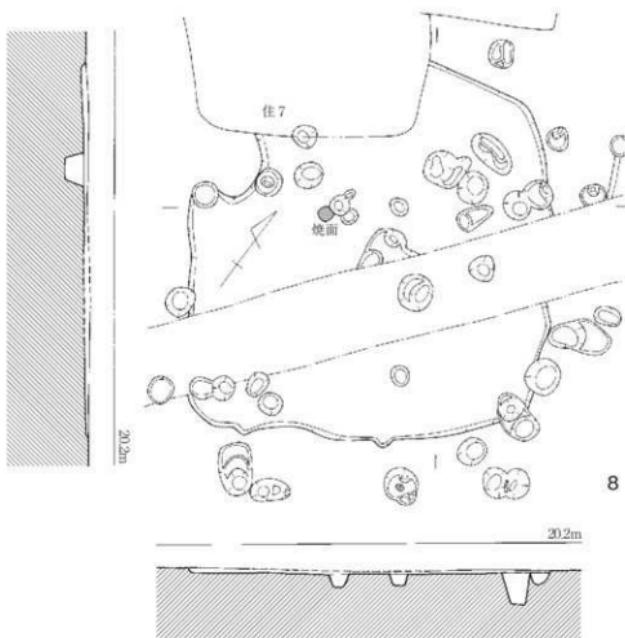
調査区南西側で検出した遺構である。7号竪穴建物と重複しており、これに切られる。遺存状態があまり良くなく、また試掘トレーナーで中央を大きく失っているため形状が不明瞭となるところもあるが、平面形はおおよそ東西4.1m、南北4.6mの隅丸方形プランが想定される。南東壁の方位はN-40°-Eを向く。床面までの深さは5cm程度に過ぎない。カマドは既に削平されていたためか、検出されなかった。

床面上では多数のピットを検出したが、明確に主柱穴と判断されるものはなかった。また床面の中央から西寄りの位置で焼面が一箇所確認された。

出土遺物 (第19図)

須恵器 (8・9)

8は蓋の天井部片である。扁平なツマミが付けられる。ツマミ部径2.2cm、高さ0.4cm。9は坏



第20図 8・10号堅穴建物実測図 (1/60)

の口縁部片である。開き気味に立ち上がる器形となる。

土師器（10）

10は土師器壺である。胴部はほとんど締まらず、わずかに内傾する程度である。口縁部は丸味を帯びて強く外反する。口縁端部は丸い。口縁部内外面とも横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目調整を行う。口径 20.0cm。

10号竪穴建物（図版6、第20図）

調査区東端で検出した遺構である。9号掘立柱建物と重複しておりこれに切られる。東側が調査区外へと続いているが、西壁は長さ 3.1m、南壁の検出できた長さは 3.3m を測り、恐らく東西にやや長い隅丸長方形プランになると思われる。西壁の方向は N - 15° - W を向く。床面までの深さは 10cm 程しかない。北壁際にはカマドを付設する。床面上では北西隅と南西隅に近い位置で二つの不整形ピットを検出したが、どちらも深さ 10cm 程度であり主柱穴とする根拠に欠ける。床面下層では不整形の落ち込みを確認しており、カマド手前付近がピット状に深くなっている。床面からの深さはこの部分で 10cm、他の所は 5cm 程度である。

10号竪穴建物カマド（第21図）

北壁際に付設されたカマドである。右袖は長さ 65cm、幅 22cm、高さ 10cm、左袖は長さ 60cm、幅 30cm、高さ 10cm を測る。燃焼部の幅は 35cm を測る。奥壁から 35cm のところに径 20cm の範囲で焼面が確認された。カマド構築土は黄灰色粘土からなり、燃焼部内の覆土下層には赤茶色の焼土が堆積していた。

出土遺物のうち、11はカマド左側で出土、12はカマド内部出土である。

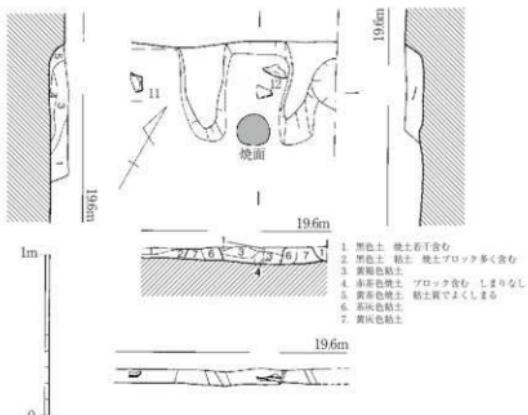
出土遺物（第19図）

須恵器（11）

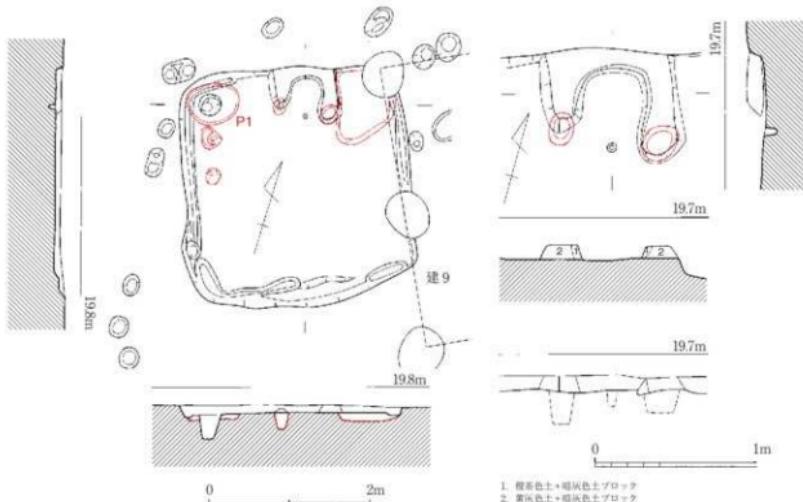
11は須恵器壺である。底部は平坦で、体部との境目は明瞭な棱をなして屈曲する。体部は直線的で開いている。高台は屈曲部のやや内側に付けられ、断面四角形をなす。口径 14.0cm、器高 4.1cm、高台径 9.8cm。

土師器（12）

12は土師器壺である。胴部上半は直立し、口縁部は強く外反する。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面は横ハケ目、外面は斜ハケ目。胎土に角閃石を多く含む。



第21図 10号竪穴建物カマド実測図 (1/30)



第22図 11号堅穴建物、カマド実測図 (1/60, 1/30)

11号堅穴建物（図版7、第22図）

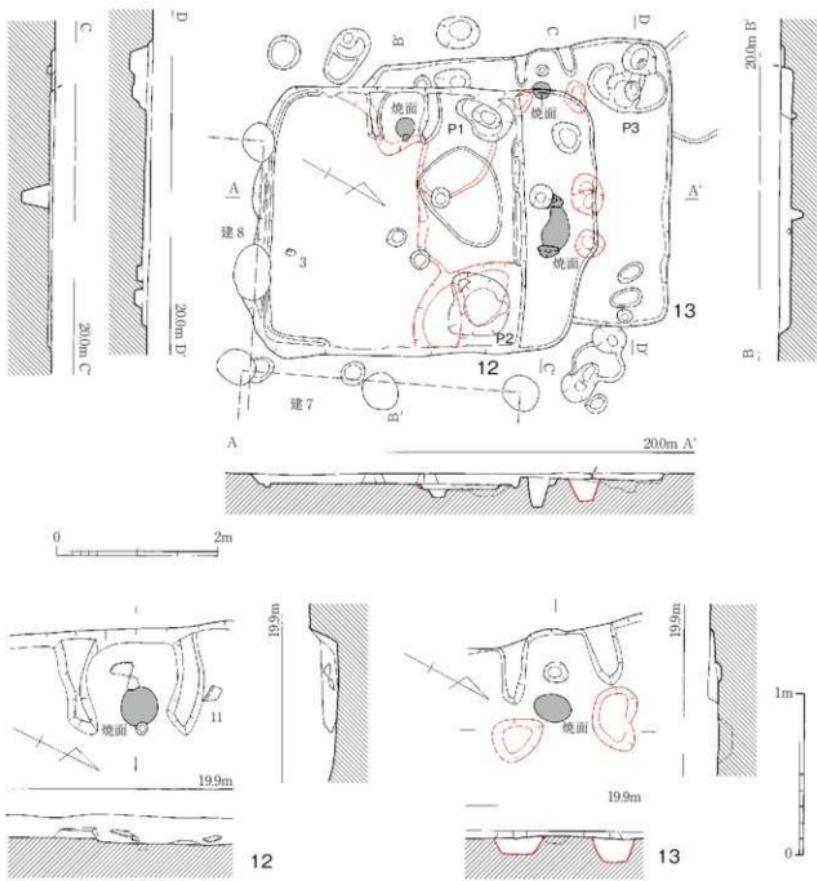
調査区東側で検出した遺構である。10号堅穴建物の1m西側に位置する。9号掘立柱建物と重複しておりこれに切られる。隅丸方形プランで、西壁長2.7m、南壁長2.7mとほぼ正方形になる。主軸方位はN-15°-Wを向き、10号堅穴建物と軸が揃っている。床面までの深さは10cm程しかなく、あまり遺存状態は良くない。

北壁際のはば中央にカマドを付設する。床面上では北西隅で直径25cm、深さ30cmのP1を検出した。また所々で途切れるところもあるが、壁際に沿って幅10cm、深さ5cm前後の壁溝を検出した。床面下層では北西隅と北東隅でそれぞれ大型のピットを、またその他にも小ピットを2基検出した。

11号堅穴建物カマド（図版7、第22図）

北壁際に付設されたカマドである。U字形に粘土を固めて構築されており、右袖は長さ68cm、幅30cm、高さ7cm、左袖は長さ52cm、幅27cm、高さ8cm、奥壁側で幅15cm、高さ13cmを測る。燃焼部の幅は35cm。カマド内面は顯著に熱を受け赤変していた。奥壁から45cmのところに径5cm、深さ8cmの小ピットがあり、支脚抜き取り穴と思われる。カマド構築土は暗灰色土ブロックを含む黄灰色粘土からなる。カマド袖の土を除去すると、その下層から両袖端にあたる位置でそれぞれピットを検出した。恐らく袖口に構築した袖石の抜き取り穴と思われる。当初は袖口に石を構築していたが、その後補修の際に除去して粘土だけで構築したものと推察される。

出土遺物は非常に少なく、図示できるものはなかった。



第23図 12・13号竪穴建物、カマド実測図 (1/60、1/30)

12号竪穴建物 (図版7、第23図)

調査区南東側で検出した遺構である。11号竪穴建物から15m南西に位置する。13号竪穴建物、8号掘立柱建物と重複しており、新旧関係では13号竪穴建物よりも新しく、8号掘立柱建物よりも古い。隅丸方形プランで、西壁長3.9m、南壁長3.4mと南北に長い長方形になる。カマドを西壁に付設しており、主軸方位はN-120°-Wを向く。床面までの深さは15cm程度で、北側がテラス状に一段浅くなる。このテラス部の深さは5cmを測る。テラス部の中央付近に、東西両側に小

ピットを備えた焼面があることから、これはカマドの痕跡であることがうかがわれる。従って、このテラス状部分は古い段階のものであり、その後新たに掘削し直して西側にカマドを付け替えたという事になる。新しい段階の竪穴建物の規模は南北3.3m、東西3.4mではほぼ正方形プランになる。

新しい段階の竪穴建物の床面ではカマド右側の隅部でP1、北側隅部でP2を検出したが、対になる柱穴が見あたらぬため主柱穴と判断する根拠に欠ける。P1は長軸70cm、短軸50cm、深さ15cmを測る。P2は径70cm、深さ20cmを測る。

出土遺物のうち、2・6はP2出土、3は南壁際付近で出土、11はカマド右脇出土、12はP1出土である。

12号竪穴建物カマド（図版7・8、第23図）

西壁際に付設されたカマドである。右袖は長さ65cm、幅15cm、高さ5cm、左袖は長さ58cm、幅20cm、高さ8cmを測る。燃焼部の幅は50cm。奥壁から52cmのところに径8cm、深さ5cmの小ピットがあり、支脚抜き取り穴と思われる。その奥は径25cmの範囲で焼面が検出された。

出土遺物（図版19、第24図）

須恵器（1～5）

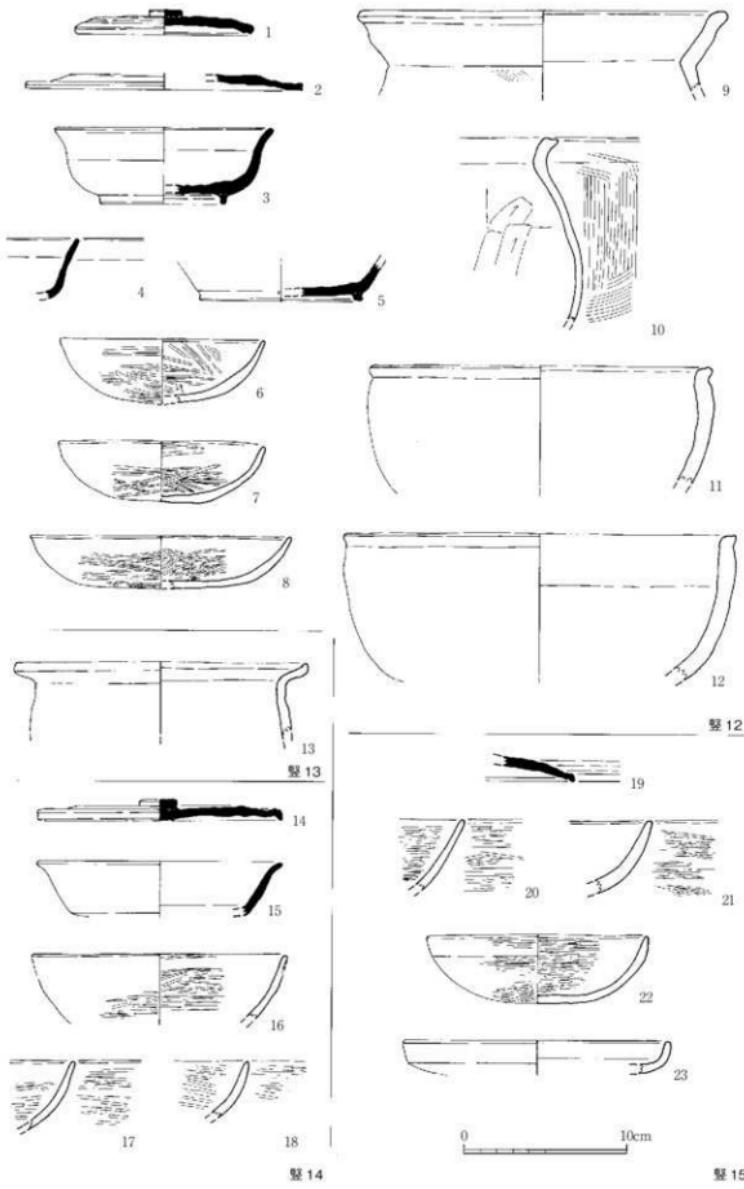
1・2は蓋である。1は低い器形の小型品で端部の折り返しもほとんど形骸化している。天井部には扁平な円盤状のツマミを貼り付ける。口径10.9cm、器高1.5cm。2もやはり天井部の高さがない低い器形となる。口縁端部はわずかに丸味を帯びるだけで折り返しも行われていない。3～5は坏である。3は屈曲部が丸く明瞭な稜を持たず、口縁部は外反する器形となる。高台は内側に近い位置に貼り付けられ、断面は小さな方形状を呈す。口径13.4cm、器高4.7cm。4は口縁部付近の小片である。やはり屈曲部は丸味を帯びて稜を持たず、口縁部付近は外反する器形となる。5は底部と体部の境目に高台を貼り付けるものである。高台径10cm。

土師器（6～12）

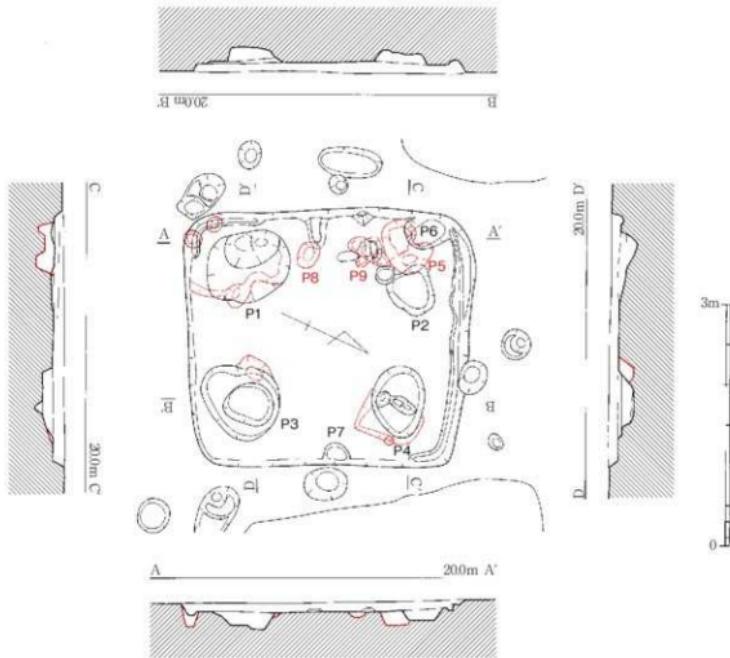
6～8は坏である。6は底部が不安定で丸味のある器形で、底部と体部の境目も不明瞭である。内外面ヘラミガキ調整を行う。口径12.6cm。7も底部が不安定で丸味を帯びた器形となる。内外面ヘラミガキ調整。口径12.5cm。8は浅い器形となる。底部は平坦だが体部は丸味を帯び、境目は不明瞭である。内外面ヘラミガキ調整。口径16cm。9・10は甕である。9は胴部と口縁部の境が明瞭な棱をなして屈曲し、口縁部はわずかに内湾して開く。口径22.6cm。10は胴部上半が丸味を帯びて内傾し、口縁部は短く外反する。口縁端部は水平な面をなす。胴部内面はヘラケズリ、外面は継ハケ目。11・12は鉢で、接合しないが同一個体である。体部は丸味を帯びて上半部は直立またはわずかに内傾し、口縁端部はわずかに外側に外反する。端部上面は面をなす。調整は内外面ともナデ。胎土に石英、長石の細砂を多く含む。11は口径21cm、12は口径24cmに復元される。

13号竪穴建物（図版8、第23図）

調査区南東側で検出した遺構である。12号竪穴建物と重複しており、これに大きく切られる。隅丸方形プランで、西壁長3.6m、南壁長3.5mとほぼ正方形になる。カマドを西壁の若干北寄りに付設しており、主軸方位はN-120°-Wを向き12号竪穴建物と同一主軸となる。床面までの深さは約5cm。床面ではカマド右側の隅部でP3を検出した。長軸100cm、短軸90cmで不整形を呈し、幾つかのピットが重なり合ったような形状を呈す。最も深いところで20cmを測る。その他のピッ



第24図 12～15号竪穴建物出土遺物実測図 (1/3)



第25図 14号竪穴建物実測図 (1/60)

トはどれも小さく深さも10cmに満たないものである。

遺物は13がP3から出土した。

13号竪穴建物カマド（図版8、第23図）

西壁際に付設されたカマドである。右袖は長さ35cm、幅20cm、高さ5cm、左袖は長さ35cm、幅15cm、高さ5cmを測る。燃焼部の幅は40cm。奥壁から20cmのところに径15cm、深さ5cmの小ピットがあり、支脚抜き取り穴と考えられる。その10cm手前には、径20cmの範囲で焼面を検出した。また、焼面の両側にはそれぞれ袖の延長上にピットが検出されており、カマド両焚き口に据えられた袖石の抜き取り穴と思われる。北側のピットは長軸40cm、短軸25cm、深さ15cm。南側のピットは一部12号竪穴建物に破壊されるが、径30cm、深さ10cmを測る。

出土遺物（第24図）

土師器（13）

13は土師器壺である。胴部上半は内傾し、口縁部は強く外反して端部は上方につまみ上げる。調整は内外面ともナデ調整を行う。口径18cm。胎土に角閃石を含む。

14号竪穴建物（図版8、第25図）

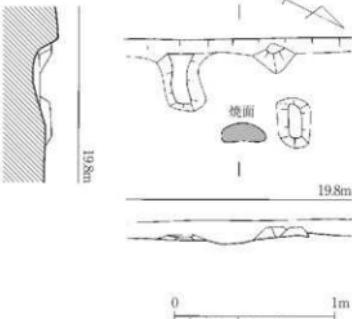
調査区南東側で検出した遺構である。13号竪穴建物の50cm西側に位置する。隅丸方形プランで、北壁長3.0m、西壁長3.4m、東壁長3.0m、南壁長3.0mを測り、西壁が若干長いが全体的には正方形に近い平面形となる。カマドを西壁の若干北寄りに付設しており、主軸方位はN-115°-Wを向く。床面までの深さは約10cm。床面上ではP1-P4のピットを検出した。P1は径100cm、深さ20cm、P2は径50cm、深さ25cm、P3は径90cm、深さ18cm、P4は径80cm、深さ18cmで、P2は東側に寄り過ぎている点が疑問を残すが、各位置から主柱穴と考えて良いものである。またカマド右側の西側隅部には径50cm、深さ15cmのP6を検出した。またカマドと対面する東壁の中央には径30cm、深さ5cmのP7を検出した。壁際の南隅部と北西壁際では、幅10cm、深さ5cmの壁溝を検出した。

床面下層では、P1・P3・P4の各ピットに先行すると思われる不整形のピットを検出した。またP2の西側ではP5を検出したが、他の主柱穴の配置からするとP5が本来の主柱穴の位置に相応しく、柱の建て替え以前の主柱穴であったものと思われる。また、カマド前面でP8・P9の二つのピットを検出した。P8は径35cm、深さ15cm、P9は長軸55cm、短軸40cm、深さ15cmを測る。位置から推察すると、カマド焚き口に据えられていた袖石の抜き取り穴であろう。

遺物は15がP5出土、14・16~18はカマド内出土である。

14号竪穴建物カマド（第26図）

西壁際に付設されたカマドである。建物廃絶時にかなり破壊されていたらしく、右袖は基部と先端部のみ、左袖は基部側の半分程度しか遺存していなかった。右袖は基部から先端部までで長さ65cm、幅20cm、高さ8cm、左袖は長さ35cm、幅25cm、高さ3cmを測る。燃焼部の幅は45cmを測る。奥壁から45cmのところに長軸25cm、短軸10cmの範囲で焼面の広がりが確認されたが、支脚の位置等は確認できなかった。



第26図 14号竪穴建物カマド実測図(1/30)

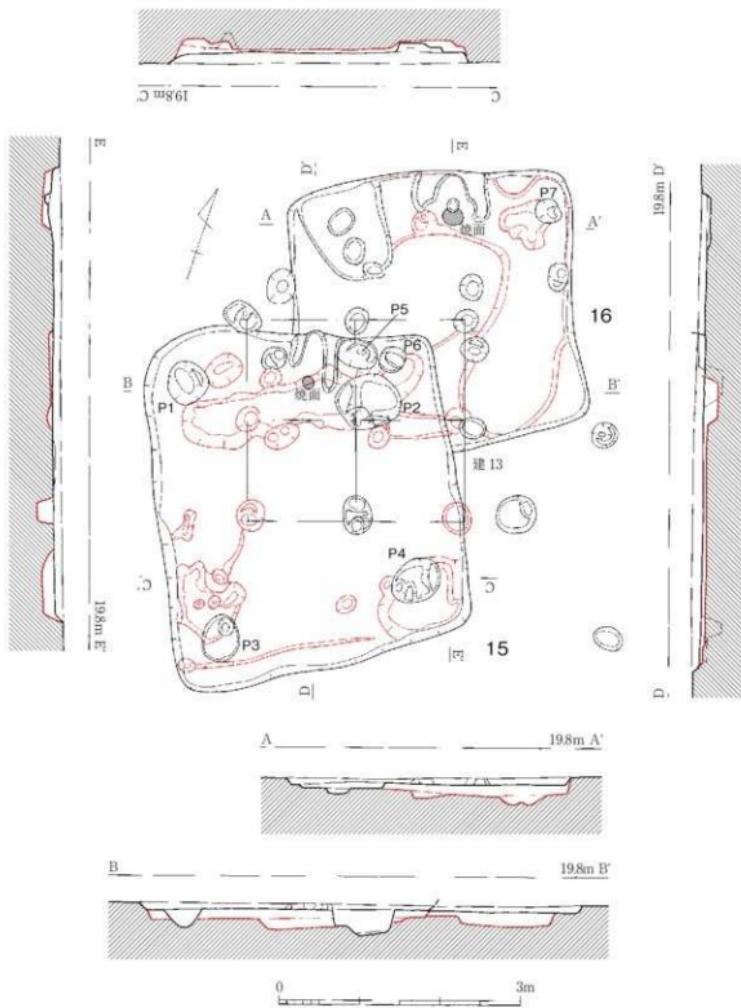
出土遺物（第24図）

須恵器（14・15）

14は須恵器蓋である。高さがほとんどない円盤状の器形で、端部のみ下方に折り曲げている。天井部には低い円盤状のツマミが付けられる。口径15.0cm。15は外反する口縁部となる壺である。口径15cm。

土師器（16~18）

16~18は土師器壺である。16は丸く深みのある器形となる。内外面とも横ヘラミガキ調整を行う。胎土に砂粒をあまり含まない。口径15.6cm。17・18も16と同様の器形となる。内外面とも横ヘラミガキ。17・18は同一個体の可能性がある。



第27図 15・16号堅穴建物実測図 (1/60)

15号竪穴建物（図版8、第27図）

調査区東側で検出した遺構である。16号竪穴建物・13号掘立柱建物と重複しており、先後関係ではこの二つの遺構よりも新しい。隅丸方形プランで、西壁長4.2m、東壁長3.5m、北壁長3.5m、南壁長3.6mを測り、西壁以外は同じ長さとなる。カマドを西壁の中央からやや東寄りの位置に付設しており、主軸方位はN-18°-Wを向く。床面までの深さは約10cmを測る。床面ではP1-P4の4つの主柱穴と、カマド右側でP5・P6の二つのピットを検出した。主柱穴であるP1は径50cm、深さ20cm、P2は径80cm、深さ25cm、P3は径45cm、深さ15cm、P4は径50cm、深さ15cmを測る。カマド右側のピットは、P5は径30cm、深さ25cm、P6は径30cm、深さ25cmを測る。

床面下層では、カマドの前面で長さ270cm、幅70cm、深さ15cmの浅い掘り込みを検出した。またP1・P3・P4に先行するとと思われる不整形のピットを検出した。

遺物は21がP2から出土した。

15号竪穴建物カマド（図版9、第28図）

西壁際に付設されたカマドである。右袖は長さ70cm、幅20cm、高さ10cm、左袖は遺存が悪く、長さ40cm、幅15cm、高さ10cmを測る。カマドの構築には黒褐色土を使用しており、燃焼部には焼土や炭を多く含んだ土が堆積していた。燃焼部の幅は35cm。奥壁部分は竪穴建物の壁をわずかに外側に掘り込んでいる。奥壁から60cmのところに径15cmの範囲で焼面を検出した。

出土遺物（図版19、第24図）

須恵器（19）

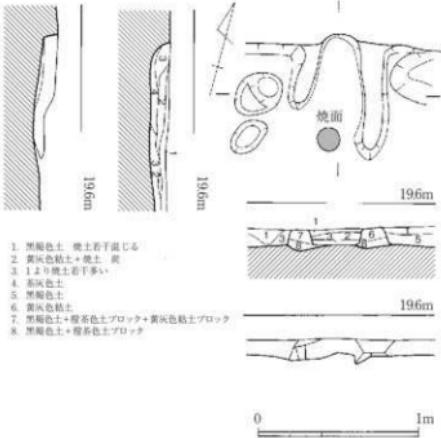
19は須恵器蓋である。低平な器形のもので端部のみ下方に折り曲げている。端部は断面三角形。

土師器（20～23）

20～22は壺である。20は直線的に開く器形となる。内外面横ヘラミガキ。21は丸味を帯びた器形で器壁が厚い。内外面とも横ヘラミガキ。胎土に粗砂をやや多く含む。22は丸く不安定な底部で、体部との境は不明瞭である。口縁部は直立する。調整は内外面とも横ヘラミガキを行う。23は皿である。口縁部は短く上方に立ち上がり、屈曲部は不明瞭である。口径16.4cm。

16号竪穴建物（図版8、第27図）

調査区東側で検出した遺構である。15号竪穴建物・13号掘立柱建物と重複しており、先後関係



第28図 15号竪穴建物カマド実測図(1/30)

では15号竪穴建物よりも古く、13号掘立柱建物よりも新しい。南西側を15号竪穴建物により大きく失うが、平面形は隅丸方形プランに復元され、北壁長3.5m、東壁長3.1mを測り、西壁長3.5m、南壁長3.5m程度になるとと思われ、東壁以外は同じ長さとなる。カマドを西壁の中央からやや東寄りの位置に付設しており、主軸方位はN-18°-Wを向き15号竪穴建物と主軸方向を揃える。床面までの深さは約5cmを測る。床面上では幾つかのピットを検出したが、どれも規模や配置の点で主柱穴と思われるものはない。またカマド右側では、径30cm、深さ25cmのP7を検出し、カマド左側でも長軸110cm、短軸90cm、深さ5cmの浅い掘り込みを検出した。

床面下層では、カマド付近から北側に及ぶ広い範囲で不整形の掘り込みを検出した。またP7近くでこれに先行すると思われる長さ60cm、深さ10cm程度の掘り込みを検出した。

遺物は1・3・4がカマド内から出土した。

16号竪穴建物カマド（図版9、第29図）

西壁際に付設されたカマドである。馬蹄形をしており、右袖は長さ60cm、幅30cm、高さ10cm、左袖は長さ50cm、幅30cm、高さ8cmを測る。カマドの構築には焼土粒を含んだ黒灰色土を使用する。奥壁から30cmの位置に径18cm、深さ5cmのピットがあり、支脚抜き取り痕と思われる。支脚抜き取り痕の両側の袖は抉られたような形状で掘り込まれている。その前面には長軸30cm、短軸20cmの範囲で焼面が検出された。左袖の手前には径30cm、深さ25cmのピットが検出されたが右袖側ではなく、焚き口を補強する袖石の抜き取り痕か否かは不明である。

出土遺物（第30図）

須恵器（1）

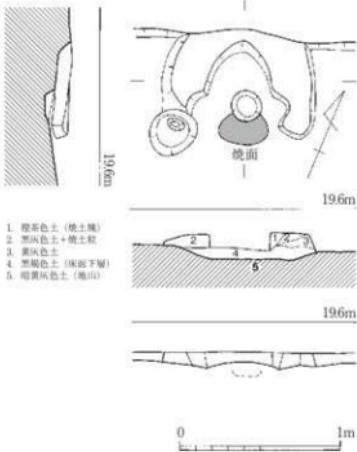
1は須恵器である。底部と体部の境は比較的明瞭で、体部から口縁部にかけて外片する。口縁端部は器壁が薄くなる。高台は屈曲部からやや内側に貼り付けられる。口径13.2cm、器高4.4cm。カマド内出土。

土師器（2～4）

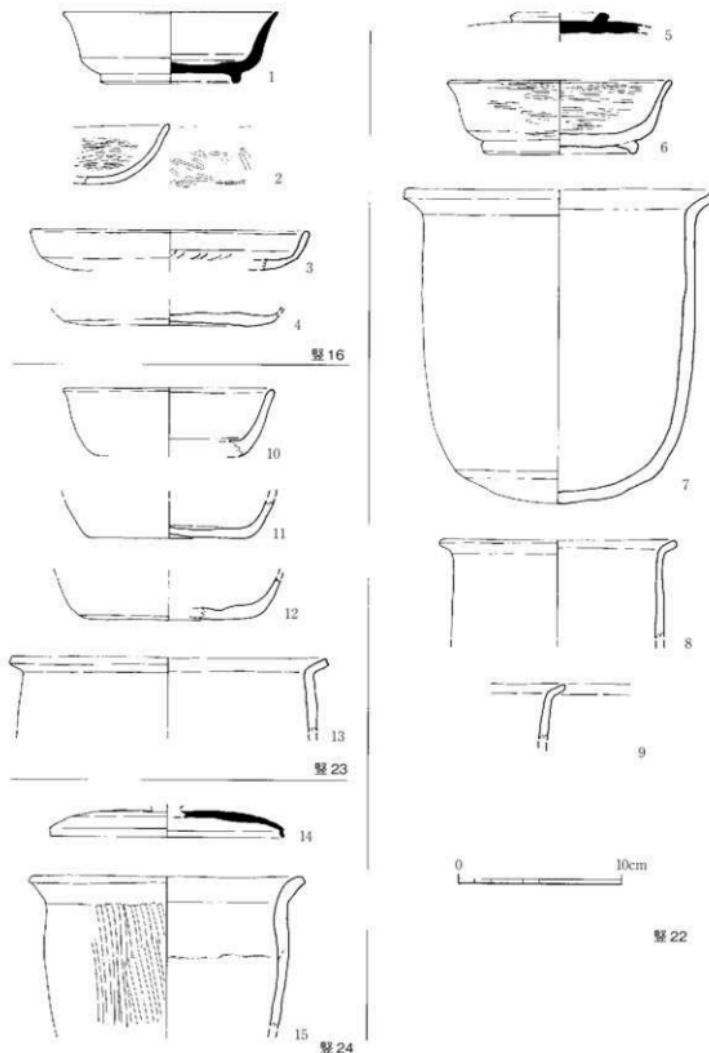
2は壺である。丸味を帯びた器形で深みはあまりない。調整は内外面とも横ヘラミガキ。胎土に砂粒をほとんど含まない。3・4は皿である。3は口縁部が直線的に開いて立ち上がる。内面には放射状のヘラミガキが行われる。口径17.2cm。4は底部片。内面はヘラミガキ調整。底径13.0cm。

17号竪穴建物（図版9、第31図）

調査区南東端で検出した構造である。大半が調査区外へ伸びており、また9号竪穴に切られるた



第29図 16号竪穴建物カマド実測図 (1/30)



第30図 16・22～24号竪穴建物出土遺物実測図 (1/3)



第31図 17・20・22号堅穴建物、22号堅穴建物カマド実測図 (1/60, 1/30)

め、検出できたのは南西壁の一部に過ぎない。従って竪穴建物ではない可能性もある。検出された南西壁は長さ2.5m。床面までの深さは5cm。床面上ではP1～P3の三つのピットを検出した。P1は径30cm、深さ25cm、P2は径20cm、深さ15cm、P3は径30cm、深さ30cm。図示できる遺物は出土しなかった。

20号竪穴建物（図版10、第31図）

調査区南東側で検出した遺構である。14号竪穴建物の50cm西側に位置する。著しく削平を受けしており平面形は不整形だが、本来は方形プランの竪穴建物だったと思われる。長軸4.0m、短軸3.2m、深さは5cm以内。床面上では幾つかのピットを検出したが、主柱穴と思われるような配置のものはない。図示できる遺物は出土しなかった。

22号竪穴建物（図版10、第31図）

調査区南西側で検出した遺構である。8号竪穴建物の70cm東側に位置する。試掘トレンチにより南西隅部付近を一部失うが、平面形は隅丸方形プランに復元され、北壁長3.1m、西壁長2.8m、東壁長2.9m、南壁長2.5mを測り、特に北壁が長い若いびつな方形となる。カマドを西壁の中央から東寄りの位置に付設しており、主軸方位はN-24°-Wを向く。床面までの深さは5cmを測る。床面上では幾つかのピットを検出したが、P1以外は規模や配置の点で主柱穴とは思われない。P1は径40cm、深さ30cmを測り規模や配置の点では主柱穴と考えて良いものだが、その他の主柱穴に相当するピットがないのでP1も主柱穴とするのに躊躇される。カマド右側では、径60cm、深さ10cmのP3を検出した。また西隅部付近や東側壁に沿って、幅10～15cm、深さ5cmの壁溝を検出した。

床面下層では、P1に先行すると思われるP2を検出した。P2は直径35cm、深さ10cmを測る。またカマド手前でP4・P5を検出したが、これはカマド焚き口を補強する袖石の抜き取り痕と思われる。またカマド内ではP6の小ピットが検出され、支脚抜き取り痕と思われる。これらP4からP6は床面上では確認出来なかったことから、現カマド構築以前のカマドに対応するものと思われる。

遺物は6がカマド前面、7がカマド内とカマド右側ピット内から出土した。

22号竪穴建物カマド（図版10、第31図）

西壁際の東寄りに付設されたカマドである。右袖は長さ45cm、幅20cm、高さ7cm、左袖は長さ40cm、幅25cm、高さ10cmを測る。カマドの構築には黒褐色土と黄灰色粘土を使用する。粘土の使用は今回の調査区の他の竪穴建物カマドではあまり見られず珍しい。奥壁側は建物の壁をわずかに掘り込んでいる。奥壁から30cmの位置に径25cmの範囲で焼面が検出された。

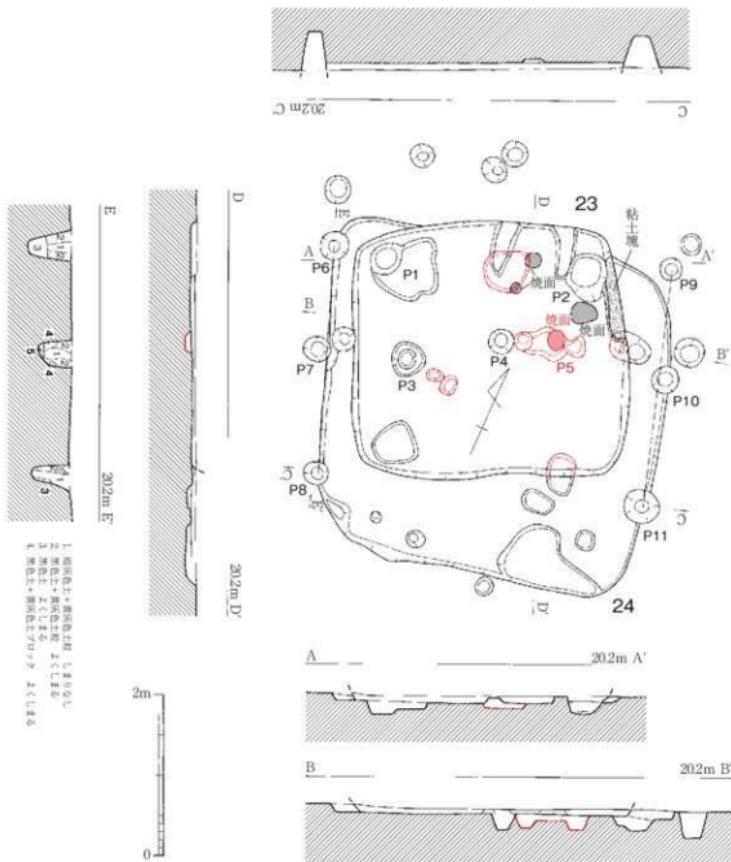
出土遺物（図版19、第30図）

須恵器（5）

5は須恵器蓋である。焼成が悪く黄灰色を呈す。天井部には輪状のツマミが付く。ツマミ部の径は6.0cm。

土師器（6～9）

6は椀である。底部と体部の境は丸味を帯びて不明瞭であり、体部から口縁部にかけては外反気味に立ち上がっている。高台は丸味を帯びた形状で、屈曲部からやや内側に付けられる。調整は内



第32図 23・24号竪穴建物実測図 (1/60)

外面とも横へラミガキを行う。胎土に石英、長石、角閃石の砂粒を若干含む。口径 13.8cm。7～9は甕である。7は完形に復元される。底部は丸く、胴部は直立して長胴気味に伸びており、口縁部付近の締まりはない。口縁部は短く直線的に外反し、屈曲部内面には稜を有す。口縁端部は上方につまみ上げられる。調整は全面ナデを行う。口径 19.2cm、器高 19.2cm。胎土に石英、長石、角閃石の砂粒を含む。8は7と類似する器形で、やや小型となる。器壁も薄く作られる。口径 14.6cm。9も恐らく類似した形状であろうと思われる。

23号竪穴建物（図版11、第32図）

調査区南西側で検出した遺構である。22号竪穴建物の1.8m北側に位置する。24号竪穴建物と重複しており、これを切って営まれる。平面形は隅丸方形プランで、北壁長3.0m、東壁長3.0m、西壁長2.7m、南壁長3.0mを測り、西壁のみ若干短い。カマドを北壁の中央から東寄りの位置に付設しており、主軸方位はN-24°-Wを向き22号竪穴建物と主軸方向を揃える。床面までの深さは約5cmを測る。床面上では幾つかのピットを検出したが、そのうちP1は規模や配置から主柱穴と考えられるものである。しかしそ他の対応する主柱穴は見当たらない。P1は径40cm、深さ20cmを測る。またカマド右側には径60cm、深さ15cmのP2を検出した。他にも径40cm、深さ40cmのP3や径30cm、深さ20cmのP4を床面上で検出した。その他、P2の南側では径30cmの範囲で焼面を、またそのすぐ東側の壁際で、長さ1m、幅15cmの範囲で粘土塊を検出したが、これらの性格は不明である。

床面下層では幾つかのピットを検出したが、特にP5は東西両側に小ピットがあり、中央に径30cmの焼面があることから、カマドに伴う焼面と、カマド焚き口を補強した袖石の抜き取り痕と思われるが、建物の壁からかなり内側に入った位置にあり、この建物に伴うものか否か判断することができなかった。

この建物の東西両壁にはほぼ沿って、壁から50cmほど外側にP6～P8、P9～P11の各3つのピットからなる柱列がある。主軸方位がN-18°-Wを向き、23号竪穴建物の主軸と少しずれた配置

にあるが、この竪穴建物に付随する柱列と考えている。各柱穴は径30～40cm、深さ25～40cm、土層図による柱痕は径20cm。柱間隔は、P6-P7間が130cm、P7-P8間が150cm、P9-P10間が130cm、P10-P11間が150cmを測る。

遺物は10がカマド内から出土した。

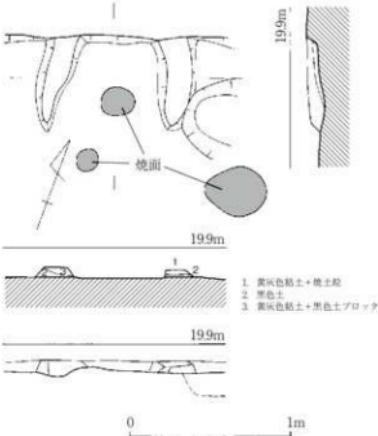
23号竪穴建物カマド（図版11、第33図）

西壁際に付設されたカマドである。右袖は長さ55cm、幅25cm、高さ5cm、左袖は長さ60cm、幅25cm、高さ7cmを測る。カマドの構築には下層に黒色土、上層に黄灰色粘土を使用する。カマドへの粘土の使用はこの遺跡では少ない。奥壁から30cmの位置に径18cmの範囲で焼面が検出された。またその焼面から30cm南でも、径15cm程度の焼面を検出した。

出土遺物（第30図）

土師器（10～13）

10～12は壺である。10は底部と体部の境が不明瞭で、口縁部は直線的に開く器形となる。底部付近の器壁は厚い。口径13cm。カマド内出土。11・12は口縁部の形状は不明であるが、底部は平坦で体部との境は比較的明瞭である。11は底径10cm、12は底径12cm。13は甕である。胴部上半



第33図 23号竪穴建物カマド実測図（1/30）

はわずかに内傾し、口縁部は短く直線的に開いている。端部は上方につまみ上げられる。口径 19.6cm。

24号竪穴建物（図版 12、第 32 図）

調査区南西側で検出した遺構である。23号竪穴建物と重複しており、先後関係ではこれよりも古い。平面形は隅丸方形プランで、北壁を 23号竪穴建物により大きく失うが、おおよそ 4.0m四方の正方形プランとなる。カマドは検出されていないが、恐らく北壁に付設されたものと推察される。方位は西壁を基準にして N - 19° - W を向く。床面までの深さは約 5cm を測る。

床面上では幾つかのピットを検出したが、主柱穴と思われるものはない。貼床も確認されなかつた。

出土遺物（第 30 図）

須恵器（14）

14は蓋である。低平な丸味を帯びた器形のもので、端部のみ短く下方に折り曲げられる。端部の器壁は特に薄く、わずかに外反する。口径 14.4cm。

土師器（15）

15は壺である。胴部上半はわずかに内傾して丸味を帯びており、口縁部は緩やかに外反する。口縁部は内外面ナデ、胴部内面ナデ、外面継ハケ目調整を行う。口径 17.0cm。胎土に角閃石を若干含む。

掘立柱建物

1号掘立柱建物（図版 12、第 34 図）

調査区西端で検出した遺構である。2間 × 2間の総柱建物で、梁の方位を N - 24° - W にとる。梁行 220cm、桁行 300cm、柱間は梁側が各 110cm、桁側の P1 - P4 間が 140cm、P4 - P7 間が 160cm を測る。柱穴は径 30 ~ 50cm、深さ 25 ~ 50cm。規則的な配置ではなく、特に P8 は大きく妻側に入っている。P1・P3・P5・P6・P7・P9 に径 15 ~ 25cm の柱痕が残る。

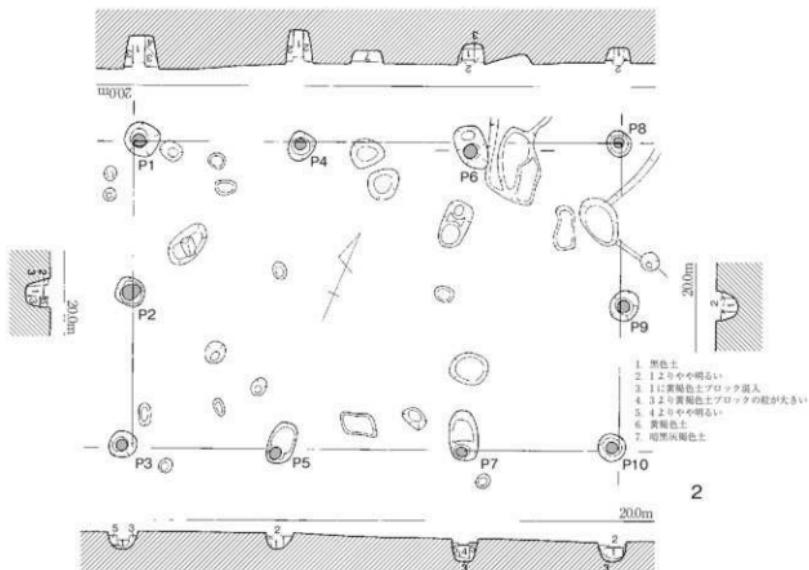
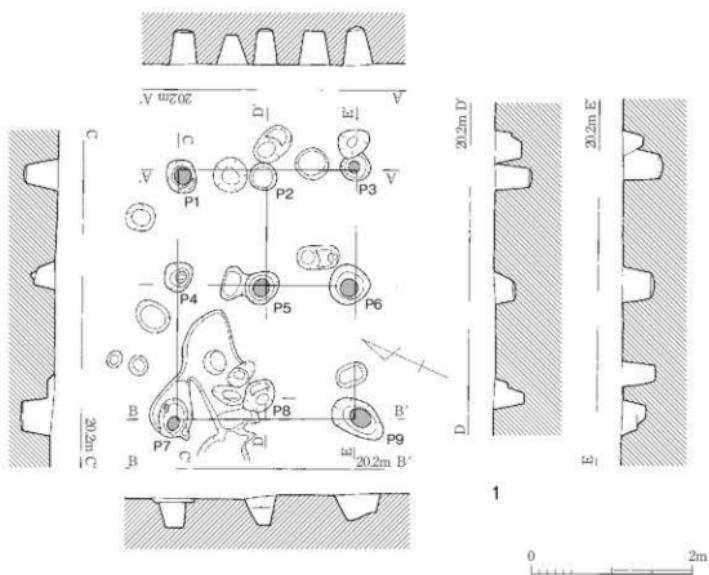
出土遺物（第 35 図）

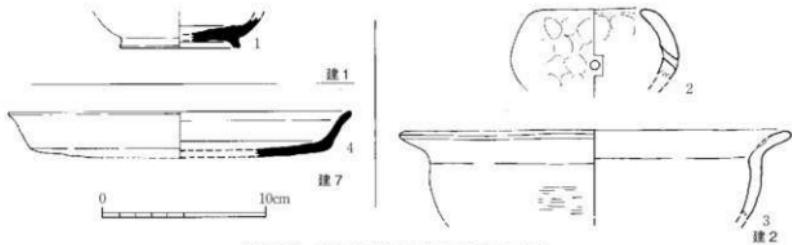
須恵器（1）

1は須恵器壺である。底部と体部の境は不明瞭で、高台の裾が開いた器形となる。高台径 7.2cm、P8 出土。

2号掘立柱建物（図版 12、第 34 図）

調査区西側で検出した遺構である。1号掘立柱建物から 1.5m 北東に位置する。2間 × 3間の側柱建物で、梁の方位を N - 24° - W にとり 1号掘立柱建物と方位が揃う。梁行 385cm、桁行 605cm、柱間は梁側の P1 - P2 間が 205cm、P2 - P3 間が 180cm で、P2 - P3 間の間隔が狭い。P8 - P9 間が 190cm、P9 - P10 間が 195cm ではほぼ等間隔である。桁側は P1 - P4 間が 185cm、P4 - P6 間が 210cm、P6 - P8 間が 210cm で P1 - P4 間の間隔が狭い。P3 - P5 間が 190cm、P5 - P7 間が 230cm、P7 - P10 間が 185cm で P5 - P7 間が広い。柱穴は径 30 ~ 45cm、深さ 15 ~ 40cm を測り、ほぼ規則的に配置される。全ての柱穴で径 15 ~ 25cm の柱痕が確認された。





第35図 掘立柱建物出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第35図)

土師器(2・3)

2は土師器イイダコ壺である。丸味を帯びた寸詰まりの器形で、体部最大径より少し下位に小円孔がある。穿孔は内側から外側に向けて行う。口径7.0cm。体部最大径10.2cm、孔径0.7cm。P-3掘り方出土。3は大型の鉢である。体部は丸味を帯び、口縁部は大きく開く。屈曲部内面には明瞭な稜を有す。体部外面には横方向のハケ目が見られる。口径23.3cm。P4掘り方出土。

3号掘立柱建物(図版13、第36図)

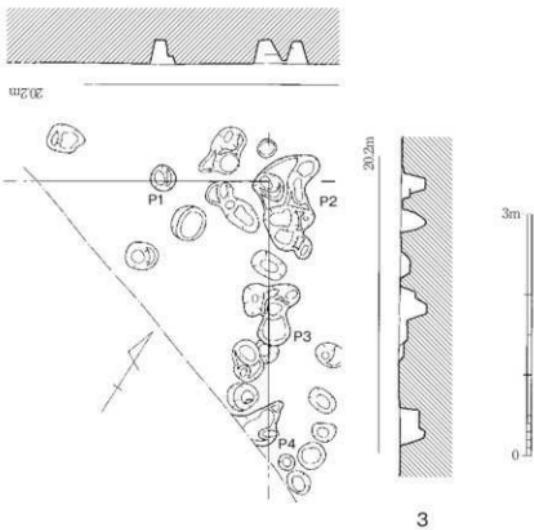
調査区西端で検出した遺構である。2号掘立柱建物の8.5m西側に位置する。大半が調査区外へと伸びているため平面形は不明である。梁の方位をN-33°-Wにとる。柱間はP1-P2間が135cm、P2-P3間が155cm、P3-P4間が155cm。柱穴は後世の切り合い等もあってかなりいびつであり、径30~50cm、深さ30cmを測る。柱痕は確認されなかった。

4号掘立柱建物(図版13、第36図)

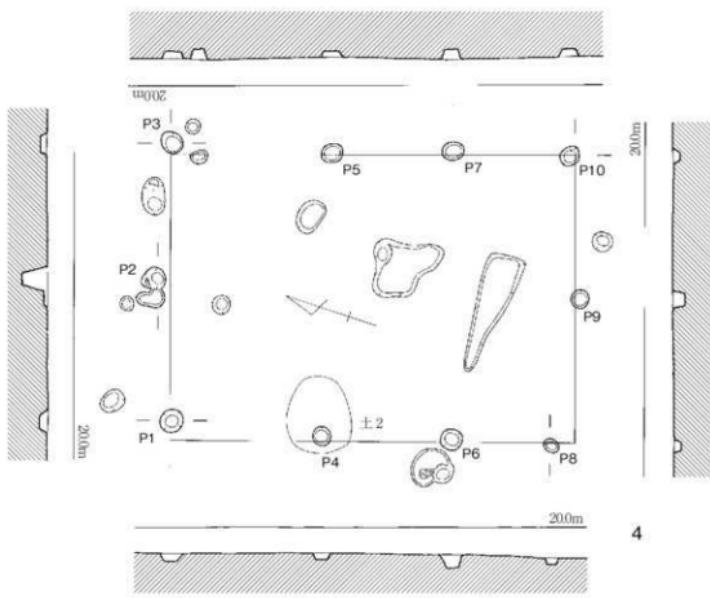
調査区北西側で検出した遺構である。2号掘立柱建物の11m北側に位置する。2間×3間の側柱建物で、梁の方位をN-18°-Wにとる。梁行360cm、桁行500cm、柱間は梁側が各180cm間隔、桁側がP1-P4間が185cm、P4-P6間が165cm、P6-P8間が150cm、P3-P5間が200cm、P5-P7間が150cm、P7-P10間が150cmで、P1-P4間とP3-P5間の間隔が広くなる。柱穴は径15~30cm、深さ5~10mを測り、あまり規則的な配置ではない。柱痕は確認されなかった。

5号掘立柱建物(図版13、第37図)

調査区南西側で検出した遺構である。2号掘立柱建物の8m南に位置する。5~7号竪穴建物と重複しており、少なくとも5号竪穴建物よりも古い。重複により南東側の柱穴を失うが、2間×3間の側柱建物になると思われる。梁の方位をN-24°-Wにとり、1・2号掘立柱建物と方位が違う。梁行390cm、桁行535cm、柱間は梁側のP1-P5間が185cm、P5-P6間が185cmではなく等間隔である。桁側はP1-P2間が175cm、P2-P3間が190cm、P3-P4間が170cmでP2-P3間が若干広い。P6-P7間は165cm。柱穴は径45cmで大きさや形状が規則的である。深さは35~55cmを測る。全ての柱穴で径15~20cmの柱痕が確認された。

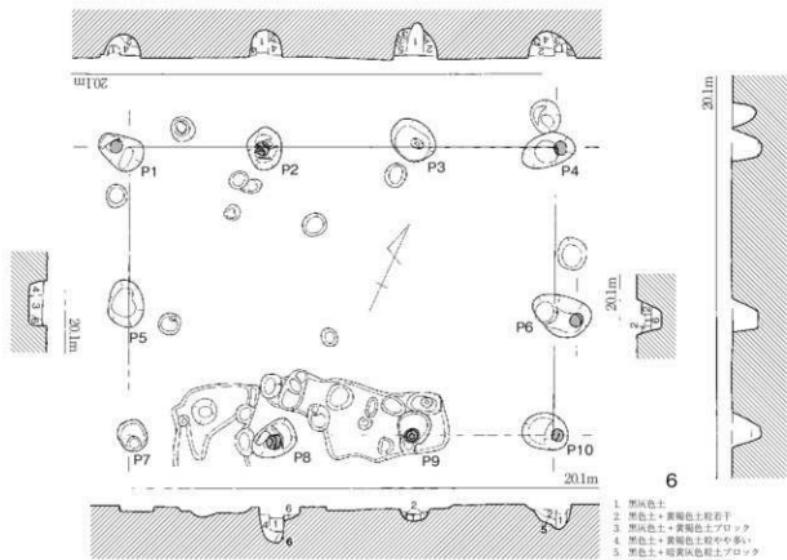
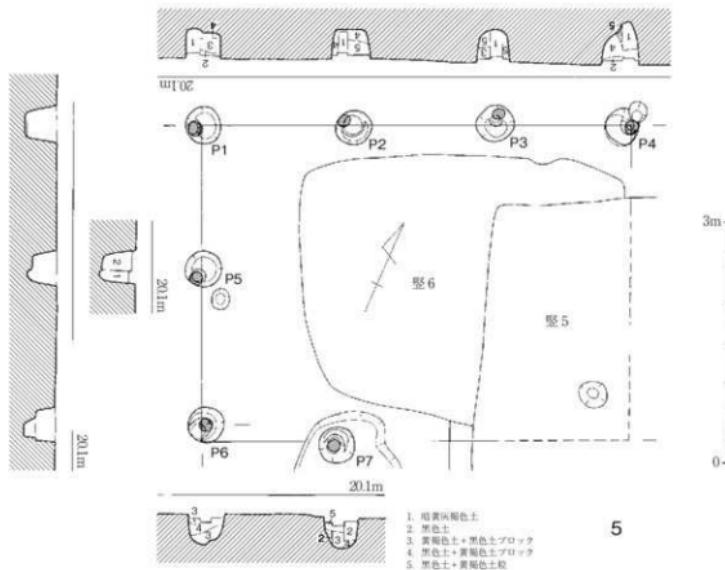


3

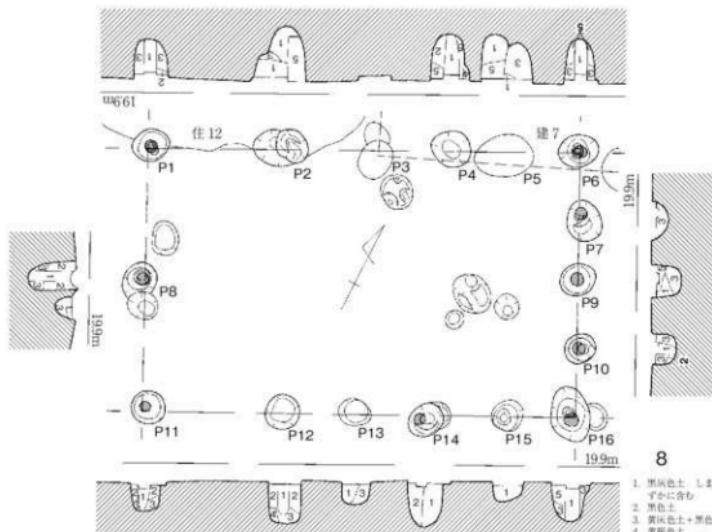
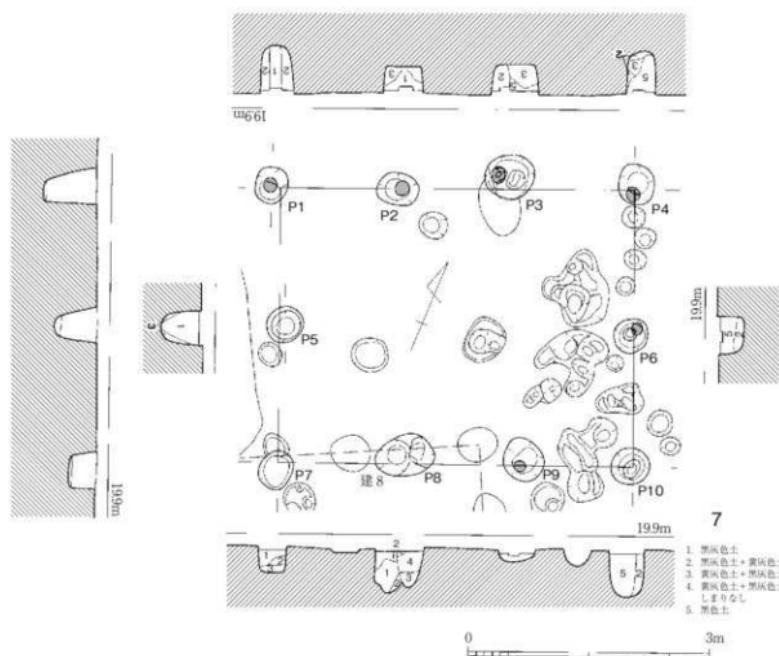


4

第36図 3・4号掘立柱建物実測図 (1/60)



第37図 5・6号掘立柱建物実測図 (1/60)



第38図 7・8号掘立柱建物実測図 (1/60)

6号掘立柱建物（図版14、第37図）

調査区西端で検出した遺構である。5号掘立柱建物の1.5m西側に位置する。2間×3間の側柱建物で梁の方位をN-24°-Wにとり、5号掘立柱建物と方位が揃う。梁行360cm、桁行530cmを測る。柱間は梁側のP1-P5間が200cm、P5-P7間が160cm、P4-P6間が215cm、P6-P10間が140cmで、どちらも北側の柱間の間隔が広くなる。桁側はP1-P2間が165cm、P2-P3間が190cm、P3-P4間が170cm、P7-P8間が180cm、P8-P9間が170cm、P9-P10間が170cmで、P2-P3間の間隔が若干広い。柱穴は径35~70m、深さ15~45cmを測りほぼ規則的に配置される。P3・P5・P7以外の柱穴で径15~25cmの柱痕が確認された。

7号掘立柱建物（図版14、第38図）

調査区南東側で検出した遺構である。12号竪穴建物の20cm東側に位置する。8号掘立柱建物と重複するが先後関係は不明である。2間×3間の側柱建物で、梁の方位をN-22°-Wにとる。梁行340cm、桁行440cmを測る。柱間は梁側が各柱間170cmと均等になる。桁側はP1-P2間が150cm、P2-P3間が120cm、P3-P4間が170cm、P7-P8間が150cm、P8-P9間が150cm、P9-P10間が140cmで、北側のP2-P3間が狭くP3-P4間が広くなる。柱穴は径40~55m、深さ15~50cmを測り配置はおおよそ規則的である。P5・P7・P8・P10以外の柱穴で径15cmの柱痕が確認された。

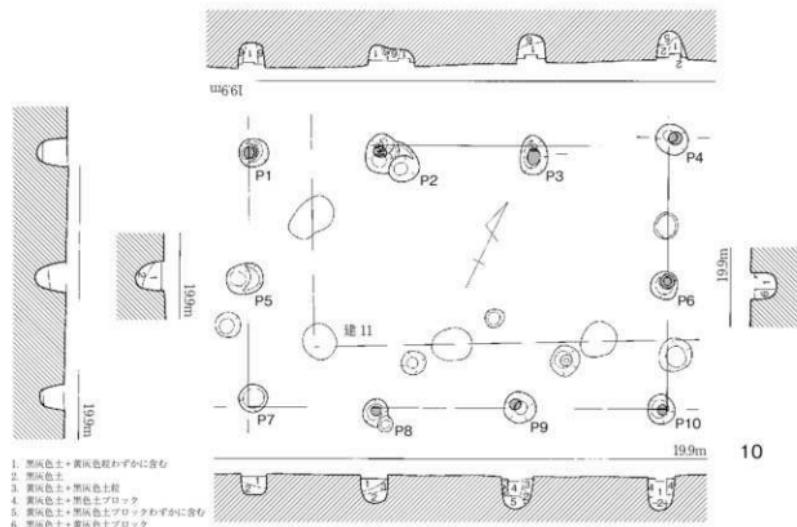
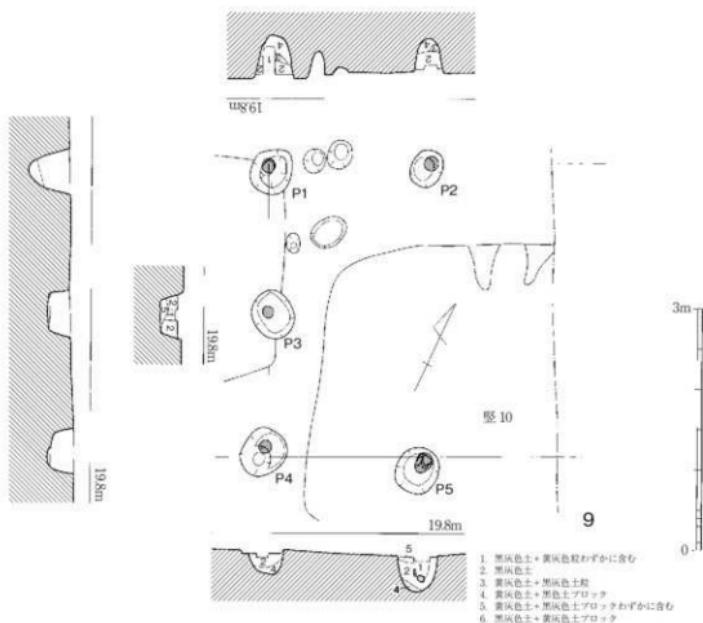
出土遺物（第35図）

須恵器（4）

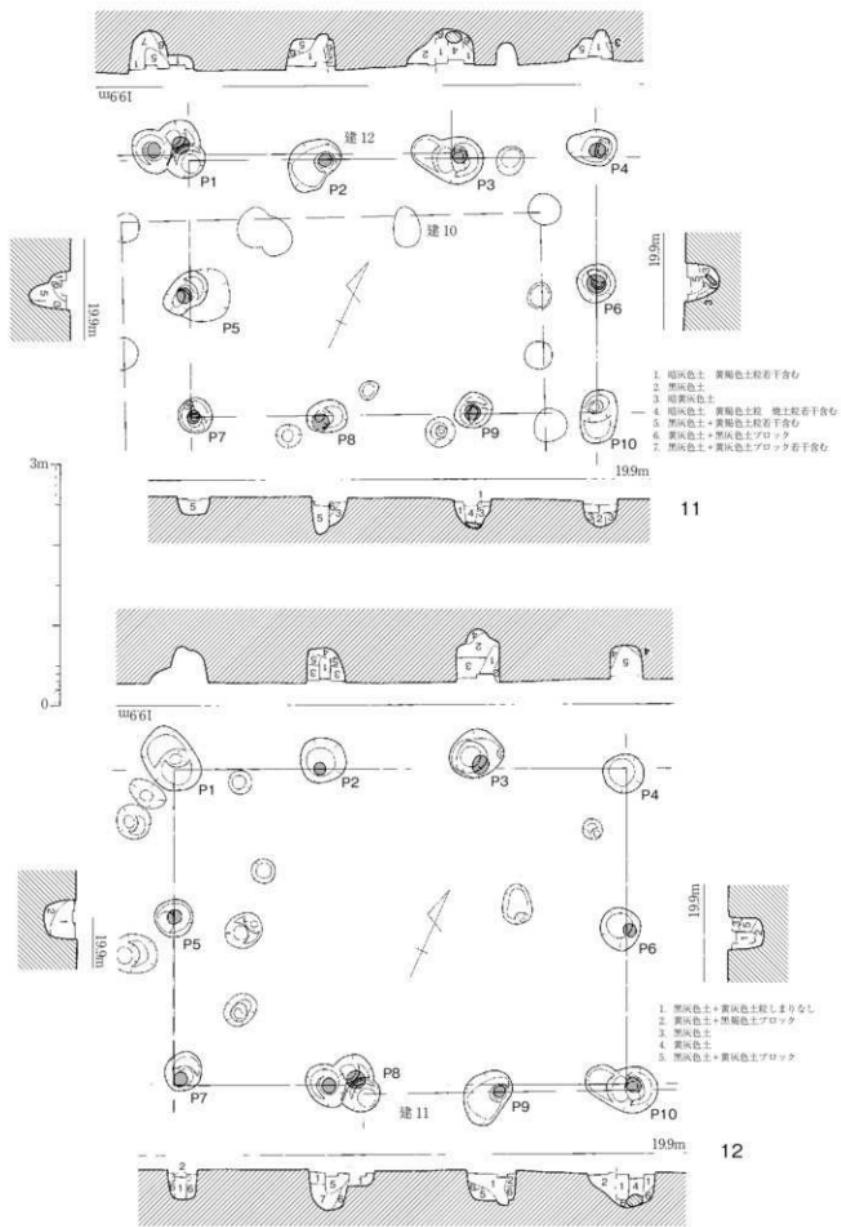
4は須恵器皿である。底部と体部の境は明瞭で、体部から口縁部にかけて外反する。口径20.8cm、器高2.8cm、底径18.4cm。

8号掘立柱建物（図版14、第38図）

調査区南東側で検出した遺構である。12号竪穴建物の20cm東側に位置する。12号竪穴建物、7号掘立柱建物と重複しており12号竪穴建物を切って営まれるが、7号掘立柱建物との先後関係は不明である。2間×3間の側柱建物で、梁の方位をN-25°-Wにとる。梁行330cm、桁行535cmを測る。梁側の柱間はP1-P8間が160cm、P8-P11間が170cmではほぼ同じ間隔となる。P6-P9間が160cm、P9-P16間が170cmで、両梁間は同じ間隔で設置されるが、P6-P9間の中央にはP7が、P9-P16間の中央にはP10がそれぞれ設けられる。桁側はP1-P2間が180cm、P2-P4間が190cm、P4-P6間が160cmで、P4-P6間がやや狭くなる。またP3・P5は7号掘立柱建物の柱穴と重複するので曖昧な点を残すが、P2-P4間の中央にP3が、P4-P6間の中央にP5が配置されているようである。P11-P12間が170cm、P12-P14間が170cm、P14-P16間が190cmでP14-P16間がやや広く配置され、P12-P14間の中央にはP13、P14-P16間の中央にはP15が配置される。このように、本建物は西側の一間分以外は各柱間の間に更に柱を追加する配置を行っている。柱穴は径35~70m、深さ25~70cmを測り、配置はおおよそ規則的で筋が通る。P1・P6~P11・P14・P16で径15~20cmの柱痕が確認された。



第39図 9・10号掘立柱建物実測図 (1/60)



第40図 11・12号掘立柱建物実測図 (1/60)

9号掘立柱建物（図版7、第39図）

調査区東端で検出した遺構である。10・11号竪穴建物と重複しており、これらを切って営まれる。東側が調査区外へと続くため全体の規模は不明であり、西側で2間、南北それぞれで1間分を検出した。恐らく棟を東西方向にとる2間×3間の建物になると思われるが確認はない。西側の柱筋では方位をN-25°-Wにとる。西側柱筋で365cm、北側柱筋で350cm、南側柱筋で360cmが検出されている。柱間はP1-P2間が200cm、P1-P3間が185cm、P3-P4間が180cm、P4-P5間が190cmを測り、他の掘立柱建物の柱間よりも若干広めに配置される。柱穴は径40~55m、深さ30~60cmを測り、配置は規則的で筋が通る。全ての柱穴で径15~20cmの柱痕が確認された。

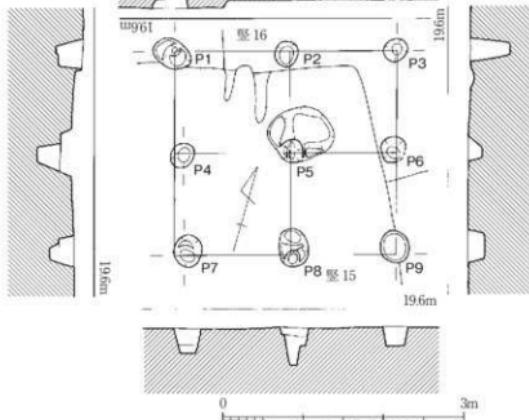
10号掘立柱建物（図版15、第39図）

調査区東側で検出した遺構である。9号掘立柱建物から5.5m西側に位置する。11号掘立柱建物と重複するが、遺構同士が切り合っていないため先後関係は不明である。2間×3間の側柱建物で、梁の方位をN-24°-Wにとる。梁行320cm、桁行520cmを測る。梁側の柱間はP1-P5間が160cm、P5-P7間が160cmで等間隔、P4-P6間が170cm、P6-P10間が150cmとなる。桁側はP1-P2間が160cm、P2-P3間が190cm、P3-P4間が170cm、P7-P8間が160cm、P8-P9間が170cm、P9-P10間が190cmで多少ばらつきがある。柱穴は径35~50m、深さ25~45cmを測り、配置はおおよそ規則的で筋が通る。P7以外の柱穴で径15~20cmの柱痕が確認された。

11号掘立柱建物（図版15、第40図）

調査区東側で検出した遺構である。10・12号掘立柱建物と重複するが先後関係は不明である。P2は12号掘立柱建物と完

全に重複しており、どちらの柱穴であるのか判断できなかつた。2間×3間の側柱建物で、梁の方位をN-26°-Wにとる。梁行320cm、桁行505cmを測る。梁側の柱間はP1-P5間が170cm、P5-P7間が150cm、P4-P6間が160cm、P6-P10間が160cmで、ほぼ等間隔に配置される。桁側はP1-P2間が170cm、P2-P3間が170cm、P3-P4間が165cm、P7-P8間が160cm、P8-P9間が190cm、P9-P10間が155cmで、P8-P9間が広くなる。柱穴は径45~



第41図 13号掘立柱建物実測図 (1/60)

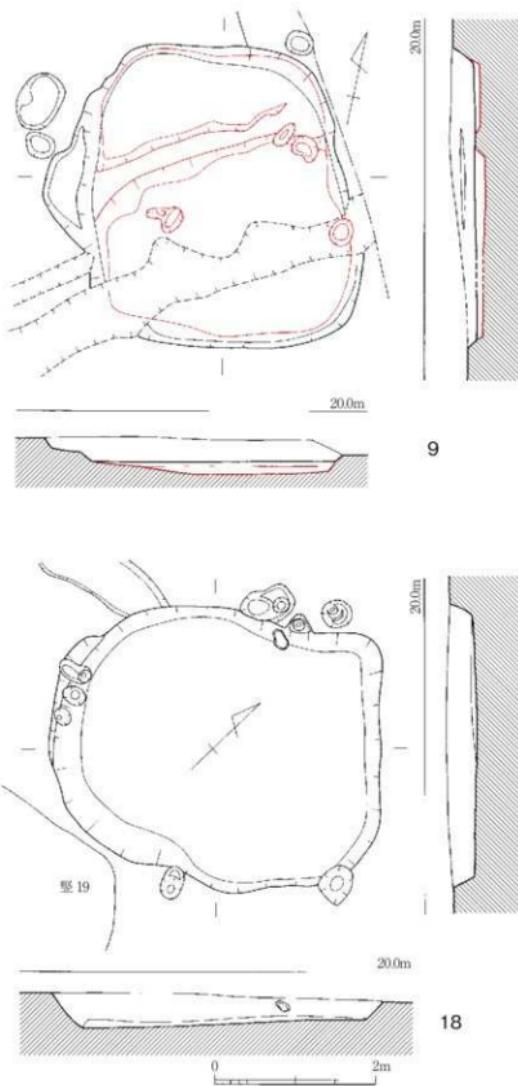
70cm、深さ20~50cmを測り、配置はほぼ規則的で柱筋が通る。P1以外の柱穴で径15~20cmの柱痕が確認された。

12号掘立柱建物（図版15、第40図）

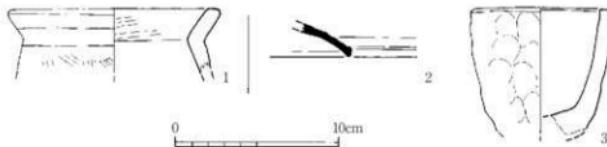
調査区東側で検出した遺構である。11号掘立柱建物と重複するが先後関係は不明である。P9は12号掘立柱建物と完全に重複しており、どちらの柱穴であるのか判断できなかった。2間×3間の側柱建物で、梁の方位をN-24°-Wとする。梁行390cm、桁行560cmを測る。梁側の柱間はP1-P5間が180cm、P5-P7間が210cm、P4-P6間が200cm、P6-P10間が190cmとなる。桁側はP1-P2間が180cm、P2-P3間が200cm、P3-P4間が180cm、P7-P8間が220cm、P8-P9間が180cm、P9-P10間が160cmで、P7-P8間が広くなる。柱穴は径45~70cm、深さ30~65cmを測り、配置はほぼ規則的で柱筋が通る。P1・P4以外の柱穴で径15~20cmの柱痕が確認された。

13号掘立柱建物（第41図）

調査区北東側で検出した遺構である。15・16号堅



第42図 9・18号堅穴実測図(1/60)



第43図 壺穴出土遺物測定図 (1/3)

穴建物と重複するが、先後関係は判断できなかった。2間×2間の総柱建物で南北柱筋の方位をN-16°-Wにとる。南北柱筋は255cm、東西柱筋は275cmを測る。柱間はP1-P2間が140cm、P2-P3間が135cm、P1-P4間が130cm、P4-P17間が125cmで等間隔に配置される。柱穴は径25~45cm、深さ20~50cmを測り、配置はほぼ規則的で柱筋が通る。

壺穴

9号壺穴 (図版15、第42図)

調査区南東端で検出した遺構である。17号壺穴建物と重複しており、これよりも新しい。後世の溝により一部削平されるが全体の形状はほぼ把握できる。平面形はいびつな隅丸方形を呈し、北壁長2.1m、西壁長3.4m、東壁長3.3m、南壁長3.0mを測る。方位は西壁でN-17°-W、東壁でN-26°-Wとなる。床面はほぼ水平で深さは10~30cmを測る。床面は貼床を行うが硬化は確認されなかった。床面下層は床面から5~10cm掘り込まれており、中央付近には帯状に掘り残された高まりがある。当初は壺穴建物と考えて調査を進めたが、平面形がいびつである事やカマドがない事、床面の硬化が全く見られないことから壺穴建物ではないという結論に至った。

出土遺物 (第43図)

土師器 (1)

1は土師器壺である。胴部上半は内傾し、口縁部は短く直線的に開く。屈曲部内面には明瞭な稜を有し、口縁上端部は面をなす。

18号壺穴 (図版16、第42図)

調査区南側で検出した遺構である。9号壺穴から18m西側に位置する。平面形はいびつな隅丸方形を呈し、北西壁長3.6m、北東壁長2.9m、南西壁長2.5m、南東壁長3.2mを測る。方位は北西壁でN-33°-Eを向く。床面はほぼ水平で深さは25~45cmを測る。床面は貼床を行わず、ピットやカマドも検出されなかった。平面形や床面の状況から壺穴建物ではないという結論に至った。

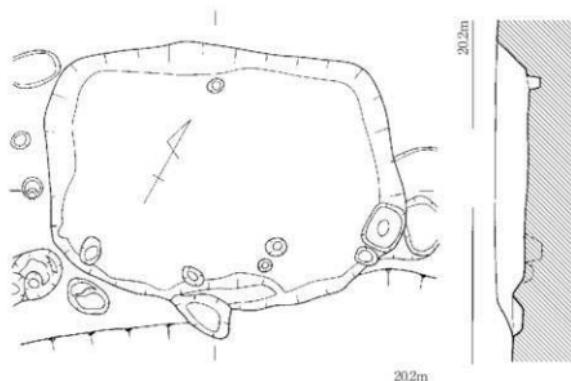
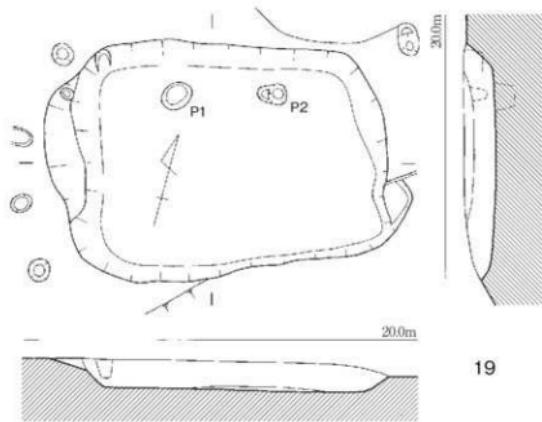
出土遺物 (第43図)

須恵器 (2)

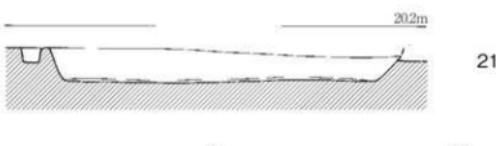
2は須恵器蓋である。小片であり傾きに不安が残る。器高が低く、わずかに内湾しながら口縁部へと統いており、端部は断面三角形で下方に折れる。

19号壺穴 (図版16、第44図)

調査区南側で検出した遺構である。18号壺穴の南西に接して位置する。平面形は隅丸長方形を呈

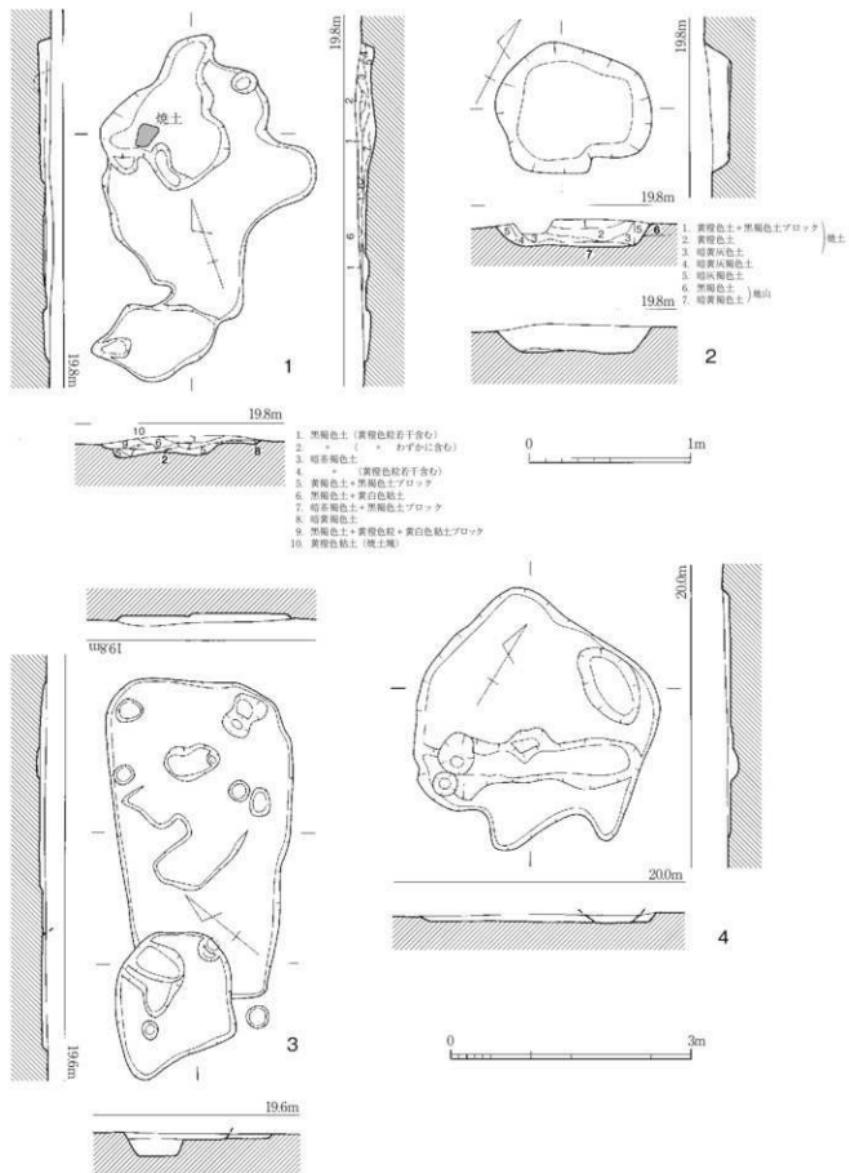


1. 稼黒灰色土・黄褐色土わずかに含む
2. 1.2m 黄褐色土较多
3. 1.2m かなり黄褐色土多い
4. 稼黒灰色土+黄褐色土ブロック
5. 黒色土



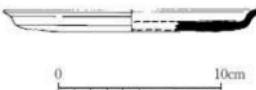
0 3m

第 44 図 19・21 号竖穴実測図 (1/60)



し、北壁長3.6m、西壁長2.5mを測る。方位は西壁でN-19°-Wをとる。床面はほぼ水平で深さは40cmを測る。

床面は貼床を行わず素掘りのままである。床面上ではP1・P2の二つのピットを検出した。P1は径30cm、深さ25cm、P2は径25cm、深さ25cm。カマドは検出されず、これらの事から堅穴建物ではないという結論に至った。



第46図 土坑出土遺物実測図(1/3)

21号堅穴（図版16、第44図）

調査区南側で検出した遺構である。19号堅穴の4m西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、北壁長3.9m、西壁長2.4mを測る。方位は西壁でN-34°-Wをとる。床面はほぼ水平で深さは40cmを測る。床面は貼床を行わず素掘りのままである。床面上では幾つかの小ピットを検出したが、カマドは検出されなかった。これらの事から堅穴建物ではないという結論に至った。

出土遺物（図版43図）

土師器（3）

3は土師器イイダコ壺である。体部は少し開きながら口縁部へと統いており、口縁部は素口縁となる。端部は面をなす。内面はナデ、外面は指圧痕が多く残る。口径8.6cm。

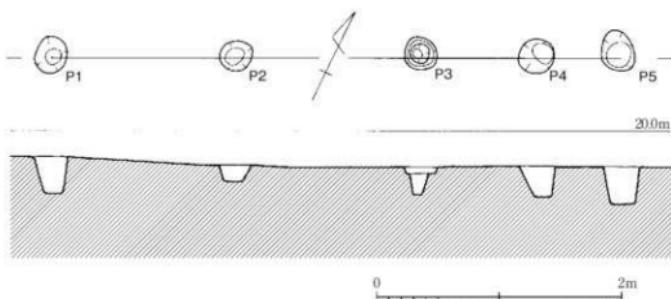
土坑

1号土坑（図版16、第45図）

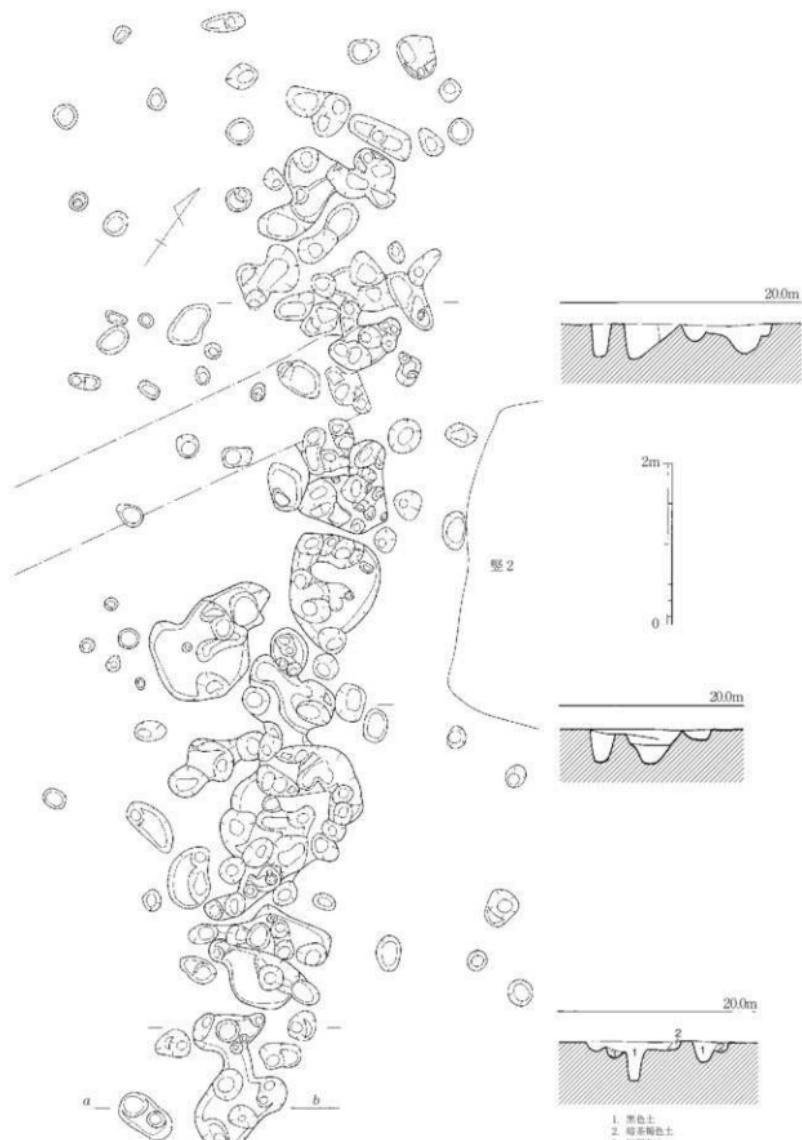
調査区西側で検出した遺構である。1号堅穴建物から1m東側に位置する。平面形は不整形で、長軸4.4m、短軸2.7mを測る。深さは15cm。土坑内部の北側からは焼土が検出された。

2号土坑（図版17、第45図）

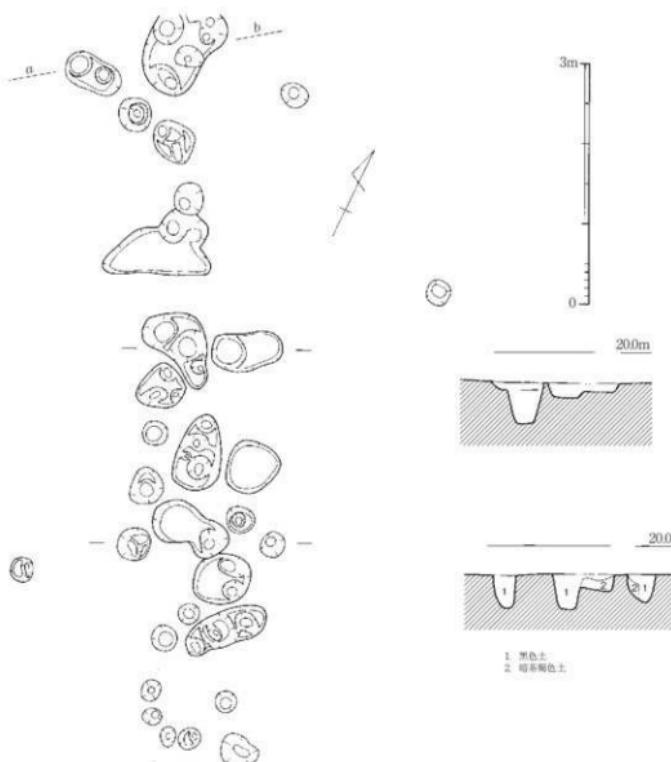
調査区北西側で検出した遺構である。2号掘立柱建物P2と重複しており、これに切られる。平



第47図 横列実測図(1/40)



第48図 ピット列実測図① (1/60)



第49図 ピット列実測図② (1/60)

面形は不整椭円形で長軸 98cm、短軸 83cm、床面はほぼ水平で深さ 15cm を測る。

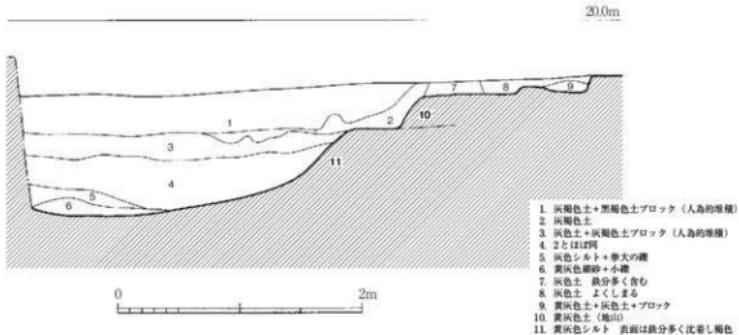
3号土坑（図版 17、第 45 図）

調査区南東側で検出した遺構である。18号竪穴から 1.5m 東側に位置する。西側を他の遺構によって切られるが、ほぼ全体の形状が把握できる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 3.9m、短軸 2.3m を測る。北西壁の方位は $N - 48^\circ - E$ をとる。床面はほぼ水平で深さは 5cm を測る。床面上では幾つかのピットや不整形の落ち込みを検出した。

出土遺物（第 46 図）

須恵器（1）

1 は須恵器皿である。口径 15.6cm、器高 1.4cm、底径 14.4cm。



第 50 図 南側段落ち断面土層図 (1/40)

4号土坑（第45図）

調査区南東側で検出した遺構である。3号土坑から2.5m 東側に位置する。平面形は不整形を呈し、長軸3.2m、短軸3.0mを測る。床面はほぼ水平で深さは5cmを測る。

柵列（第47図）

調査区西側で検出した遺構である。2号掘立柱建物から2.5m 北側に位置する。P1からP5の柱穴によって構成されるが、P4は柱間から判断すると本来無関係な遺構であるかもしれない。P1-P2間は150cm、P2-P3間は150cm、P3-P4間は100cm、P4-P5間は60cmを測る。方位はN-65°-Eをとる。位置関係や方位から2号掘立柱建物に伴う柵列と思われる。

ピット列（図版17・18、第48・49図）

調査区中央で検出した遺構である。不整形の多数のピットが一直線に列をなしており、配置に規則性は見られない。現状では35mの長さに及び、幅は最も広いところで2.5mを測る。方位はおよそN-30°-Wを向く。各ピットの覆土は黒色土が主体を占め、柱痕等のように柱を建てた痕跡は確認できなかった。類似例から波板状の痕跡を有した道路状遺構の可能性も考慮したが、波板状遺構とするには遺構が深すぎるようでもあり、あるいは植栽や生垣の痕跡とも思われる。

南側段落ち（図版18、第50図）

調査区南端で検出した段落ちである。長さ30m、幅5mに及ぶ。トレーナによる断面土層図を見ると、上層には第1層黒褐色土が混じった灰褐色土があるが、これは人为的堆積によるものと思われる。第3層灰褐色土ブロックが混じった灰色土も同じく人为的な堆積による。第2層・第4層は灰褐色土からなる層である。下層の第5層は礫を含んだ灰色シルト層、最下層の第6層は小砾を含んだ黄灰色細砂であり、流滌水による堆積層であると推察される。従ってこの段落ちは、隣接する水路の水流に伴って形成された自然地形と判断される。

ピット出土遺物（図版19、第51・52図）

須恵器（1～15）

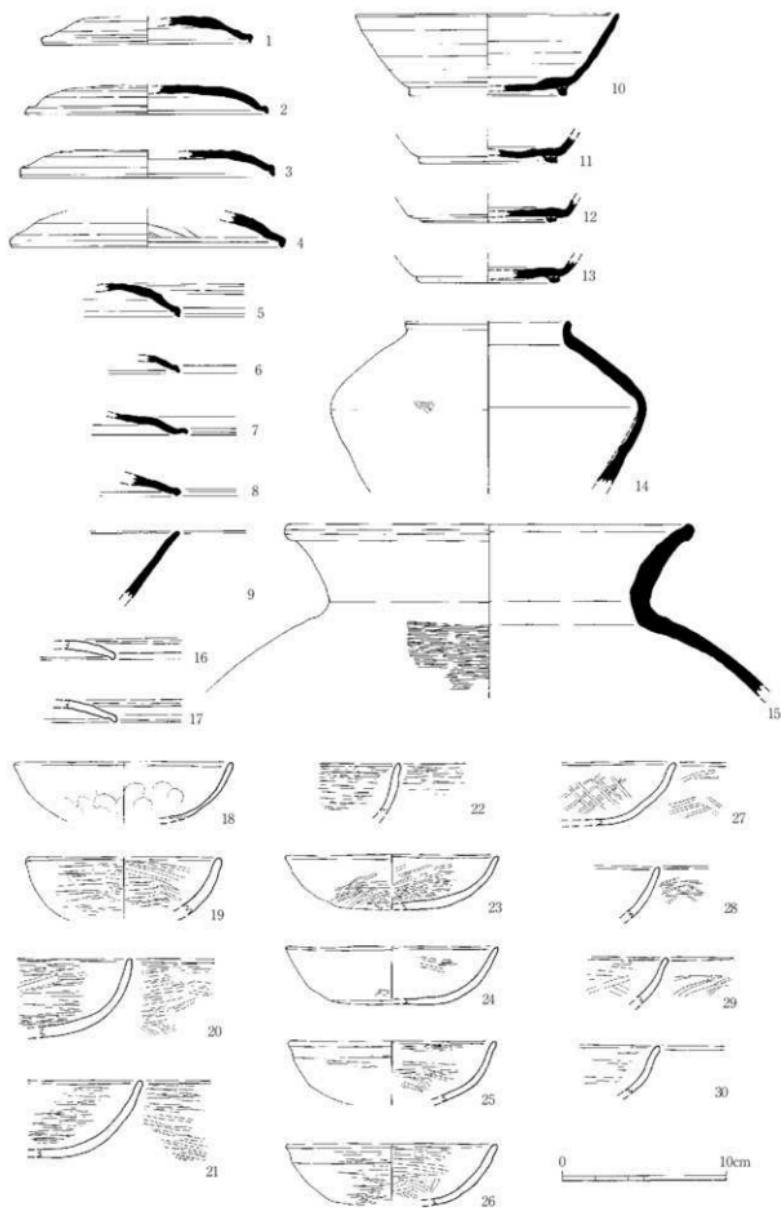
1～8は須恵器蓋である。1は器高が低く低平な蓋で、口縁部付近が水平近くまで開き、口縁部は断面三角形に短く下方へ折れる。接地部は鋭い稜をなす。口径12.7cm。2は口縁部が一旦大きく開き、端部が下方へ折れる。口径14.8cm。3は天井部から口縁部付近へとなだらかに続いている。端部は下方へ折れる。口径15.4cm。4は口縁端部が丸味を有す。口径16.6cm。5～8は径の復元ができない小片である。5は口縁部が下方を向く。6はやや開いた折れ方となる。7は口縁部付近が一度水平近くまで開き、端部のみ小さく曖昧に折れる。8は口縁部の屈折はなく、丸く肥厚するのみである。

9～13は坏である。9は直線的に開く体部となる。10～13は高台が付く。10は底部と体部の境近くに高台があり、体部は直線的に開く。口径16.1cm、器高5.0cm、高台部径9.6cm。11は断面四角形の低い高台が付く。高台部径8.3cm。12は屈曲部のやや内側に小さめの高台が付くもので、高台内側で接地する。高台部径8.4cm。13もやはり高台内側で接地する。高台部径8.8cm。

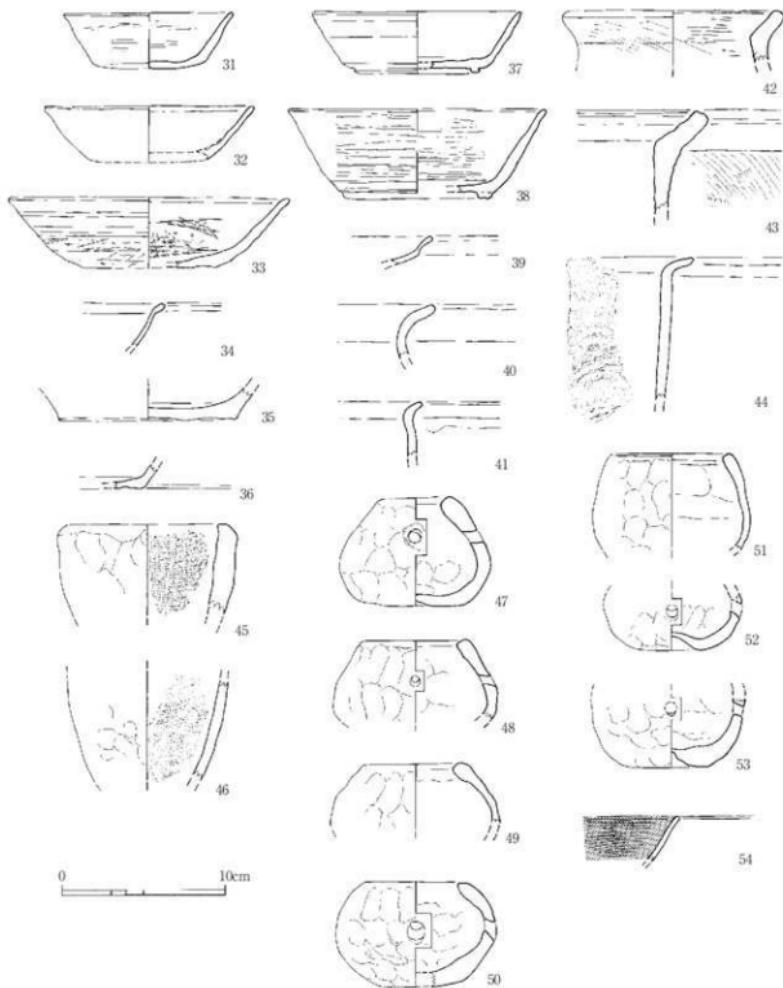
14は短頸壺である。体部は下半、上半とも直線的で、最大径の部分が屈曲したような器形となる。口縁部は短く直立する。口径9.8cm、体部最大径19.2cm。15は壺である。肩が丸く張り、口縁部は外反して大きく開く。端部は玉縁状に外側が肥厚する。内面は同心円當て具痕、外面はカキ目調整。口径24.5cm。

土師器（16～53）

16・17は蓋である。16は口縁端部が下方に短く折れる。17は端部の屈折が不明瞭で、ほとんど体部と一体化している。18～38は坏である。18～30は丸味を帯びた器形となる。18は器壁が非常に薄く、指整形で作られる。口径13.4cm。19～30は内外面とも調整にヘラミガキを行う。19は深みのある器形となる。他のものと比べて器壁が厚い。口径11.7cm。20は口縁部があまり開かず深みのある器形となる。21も20と類似する器形となる。22は口縁部付近がわずかに外反する。23はやや浅い器形となる。口径12.8cm。24は23と類似する器形となる。口径12.9cm。25は口縁部がわずかに外反する。口径12.6cm。26は口径12.8cm。27は内面のヘラミガキが格子状に交差して施文される。28は内面のヘラミガキがほとんど残っていない。29・30は口縁部がわずかに外反する。31は底部が平坦で体部との境に明瞭な棱を有し、体部は直線的に開く器形となる。調整は内外面とも横ヘラミガキ。口径10.2cm、器高3.4cm、底径6.8cm。32は31より口縁部が開いた器形となる。器表の風化が著しく調整は不明。口径12.7cm。33は内面に非常に幅の狭いヘラミガキを行う。外面上半は横ナデ、下半は横方向の手持ちヘラケズリ後にヘラミガキを疎らに行う。口径17.1cm、器高4.3cm、底径8.0cm。34は体部が直線的に開き、口縁部が更に外反する器形となる。口縁端部は丸味を帯びて肥厚する。器壁が非常に薄く胎土に砂粒をほとんど含まない。調整は内外面ともナデ。35は底部が平坦で、体部との境に明瞭な稜を有して屈曲する。底径10.6cm。36も明瞭に屈曲するものである。37・38は高台を有するものである。37は体部が直線的に開き、高台は屈曲部からやや内側に付けられる。高台は低く小さなもので、内側で接地する。口径12.6cm、器高3.8cm、高台径7.6cm。38は体部が直線的に開いて長く伸び、深みのある器形となる。高台は屈曲部近くに付けられる。調整は内外面とも横ヘラミガキを行う。口径15.6cm、器高5.5cm、高台径9.0cm。



第 51 図 ピット出土遺物実測図① (1/3)



第52図 ピット出土遺物実測図② (1/3)

39は皿である。口縁部が短く外反しており、体部との境は明瞭な稜を有す。胎土に砂粒をほとんど含まず精良である。不明瞭だが外面には化粧土が塗布されているように見える。

40～44は甌である。40～42は小型品。40は内傾する胴部から、口縁部が大きく外反する器形となる。41は口縁部が小さく強く外反する。42は口縁部が短く直線的に外反しており、内面に稜を有す。内外面ともに横ナデに先行するハケ目が残る。口径 12.5cm。43は胴部上半が直立し、口

縁部が短く直線的に開き、屈曲部内面には明瞭な稜を有す。端部は面をなす。外面の口縁部下には斜ハケ目を行う。胎土に石英、長石の粗砂が多く含む。44は胴部が直立し、口縁部が短く外反気味に開く。端部は面をなす。調整は口縁部と胴部外面は横ナデを行うが、胴部内面には同心円当て具痕が見られる。器壁は他の壺よりも薄い。胎土に石英、長石、角閃石の細差砂が多く含む。

45・46は焼塙土器である。45は口縁部付近の破片で、体部はわずかに開きながら立ち上がっていいる。口縁端部は外側に傾斜するよう整形される。内面布圧痕、外面指整形。口径 11.0cm。46はわずかに丸味をもつ筒状の体部となる。内面布圧痕、外面指整形。

47～53はイイダコ壺である。51以外は全て P-149という一つのピットから出土した。47は底部が平坦で中央付近がヘソ状に窪んでいる。体部は下方に重心があり、体部上半は直線的に内傾して口縁部へと続いており、ちょうど洋梨のような形状となる。穿孔は中位よりも上方にある。器壁は口縁部がやや厚くなる。調整は内外面とも指整形。口径 4.0cm、器高 6.6cm、体部最大径 9.2cm。48は底部を欠失するが、47とほぼ同じ器形になると思われる。口径 6.6cm、体部最大径 10.0cm。49も47と類似する器形になると思われるが、体部の器壁が薄く、口縁部付近のみ丸く肥厚する。口径 6.4cm。50は若干潰れた球形に近い形状となる。底部は小さく体部の中位に最大径がある。穿孔は47・48と比べて径が大きく、また内側から外側に向けて穿孔している。口径 6.2cm、器高 6.4cm、底径 4.0cm。調整は全面指整形。51はやや綾長の器形となる。最大径は中位より下にあるようである。口縁部の綺まりが他と比べて弱く、器壁も薄く作られる。口径 7.4cm、体部最大径 9.8cm。52は丸味のある不安定な底部で、中央付近がヘソ状に窪む。穿孔は内側から外側に向けて行われる。体部最大径 8.2cm。53も底部が丸味を帯びて不安定な形状となり、中央付近がヘソ状に窪む。体部最大径 9.4cm。

黒色土器（54）

54は内面黒色土器である。直線的に開く体部で器壁は薄い。内面はヘラミガキ、外面は横ナデ。

その他の出土遺物（第53・54図）

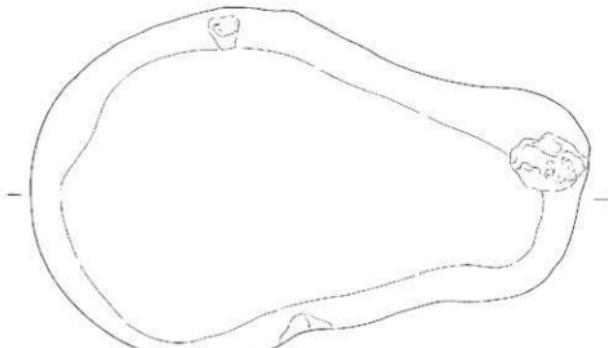
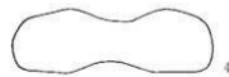
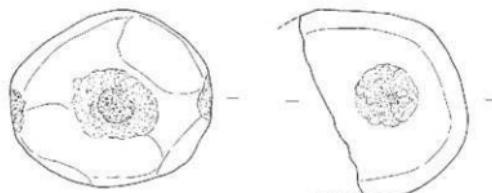
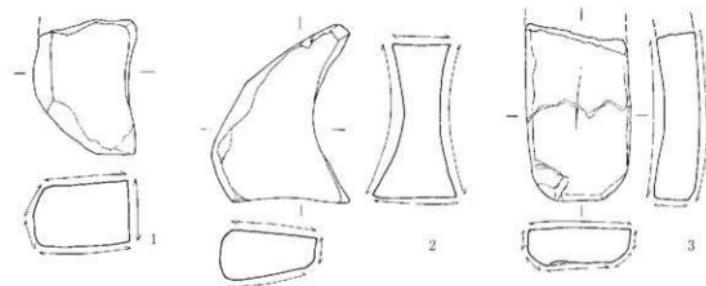
石製品（1～6）

1～3は砂岩砥石である。1は4面使用されているが表面の風化が著しく擦痕は見られない。現存する部分で長さ 5.6cm、幅 4.2cm、厚さ 2.8cm。6号竪穴建物出土。2は全面使用される。かなり使い込んでおり中央付近が大きく磨り減っている。形状も旧状を留めないほど変形しているように思われる。長さ 7.3cm、幅 5.7cm、厚さ 3.4cm。24号竪穴建物出土。3は比較的整った板状を呈す。現存部分で長さ 7.3cm、幅 4.3cm、厚さ 1.9cm。6号竪穴建物出土。

4・5は凝灰岩製凹石である。4は扁平な円盤の両面が径 3～4cm の大きさで深さ 5mm 程度窪んでいる。片側の面は砥石として使用したのか、平滑な面を形成している。また長軸側の両側縁は敲打のために潰れている。長軸 8.2cm、短軸 7.2cm、厚さ 2.6cm。ピット出土。5は片面のみ、径 2.5cm、深さ 2mm の規模で窪んでいる。現存部分で長軸 6.9cm、短軸 7.7cm、厚さ 2.7cm。6号竪穴建物出土。6は凝灰岩の扁平円盤で、台石として使用したものと思われ、片面が平滑になる。長軸 22.8cm、短軸 14.8cm、厚さ 4.4cm。18号竪穴建物出土。

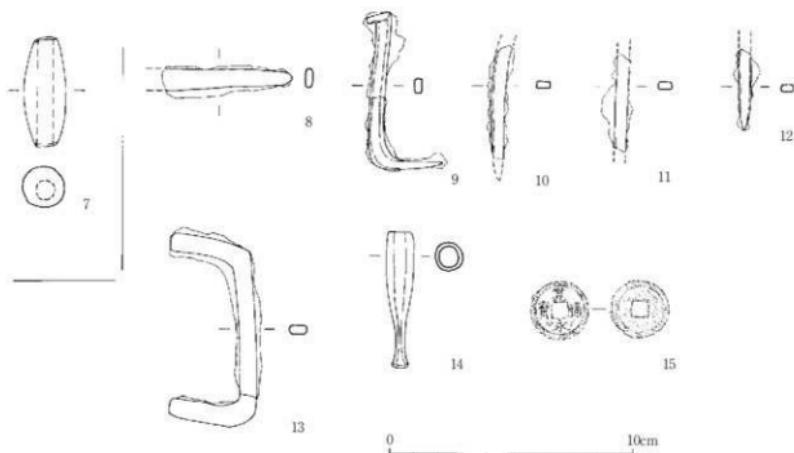
土製品（7）

7は管状土錘。円柱形だが中央が膨らんでいる。長さ 4.5cm、径 1.7cm、孔径 8mm。排土中。



10cm
0

第53図 石製品実測図 (1/2)



第 54 図 土製品・金属製品実測図 (1/2)

金属製品 (8 ~ 15)

8は刀子の茎部であろう。断面四角形となる。長さ 5.4cm、幅 1.3cm、厚さ 3mm。ピット出土。9~12は鉄釘である。9は完形である。先端部が 2cm ほどの長さで直角に曲がっているが、伸ばすと全長 9cm 程になる。断面は長方形で、厚さは 3mm。10号掘立柱建物 P-3 出土。10は現存長 4.7cm。ピット出土。11は現存長 4.0cm。12号竪穴建物 P-2 出土。12は先端部の破片で現存長 3.7cm。6号掘立柱建物 P-10 出土。13は「コ」字状に曲がる鉄製品。断面は角が丸味を帯びた長方形である。現状で長さ 8.0cm、幅 3.7cm。攪乱出土。

14は銅製のキセル吸口である。長さ 5.6cm。15は銅銭「寛永通寶」である。排土中から発見。

4) 小結

築城千代遺跡第 1 次調査区では、主要な遺構として竪穴建物 24 棟、掘立柱建物 13 棟、竪穴 4 基、土坑 4 基、柵列 1 条、ピット列 1 条を検出した。これらのうち、4 号掘立柱建物は柱穴の規模が他と比べて小さく中世の掘立柱建物に類似が散見されることから中世の遺構である可能性が高いが、出土遺物に恵まれなかつたため遺物からの時期比定は出来なかつた。その他の遺構に関しては、遺構の平面形や覆土の類似性、出土遺物による時期比定、主軸方位の同一性等から全て古代の遺構と考えて良いものである。以下では古代の遺構と遺物についてまとめを行う。

出土遺物

出土遺物はパンケースで 5 箱程度出土した。遺物の時期は 8 世紀後半を中心とし、若干前後すると思われる時期のものもある。出土点数が少ないので曖昧さを残すが、遺構別に見た場合、2 号竪穴建物の 7・8 の須恵器蓋は天井部が多少丸味を有しており、折り返した端部も明瞭である。10 の

須恵器壺や11の土師器壺も丸味のある器形であり、全体として他よりも古い要素を持つものが多く、時期が若干遡るものと思われる。6号竪穴建物も16・17の須恵器壺や18の土師器壺は丸味を有した器形であり、時期的に遡りうる要素を持つ。12号竪穴建物出土須恵器壺3は1点だけ見ると古い要素をもつようにも思われるが、他の併存遺物から判断すると時期を遡らせるることはできない。14号竪穴建物出土須恵器壺15も同様である。竪穴建物や掘立柱建物から出土した遺物は8世紀代におさまるものと思われるが、ピットから出土した32や33は新しい要素を備えており、9世紀まで下る時期のものと思われる。

竪穴建物

20棟の竪穴建物を検出した。平面形は正方形に近い隅丸方形となるものが多いが、中には6号竪穴建物や7号竪穴建物のように極端な長方形となるものもある。規模は、1号竪穴建物が一辺5mを超える可能性があるが壁面が残っていないので確証を得ることができない。他に一辺が5mを超えるものではなく、一辺3m台から4m台、面積で20m²以内におさまる。中には11号竪穴建物のように一辺2.7mと小型の竪穴建物もある。カマドは北壁際に付設されるものが多いが西壁際に付設する例もある。カマドは壁の中央に付設するのではなく中央から右側に寄った位置に付設する例が多く見られる。具体的には2・7・13～16・22・23号竪穴建物がそうであり、一つの目立った特徴として挙げることができる。カマドの右側にはほぼ例外なく土坑状の浅いピットを設置しており、これも特徴的である。主柱穴は14・15号竪穴建物で検出されたが他には無く、むしろ無い方が一般的である。壁溝は11・12・14・22号竪穴建物で検出されたが無いものの方が多い。床面下層の不整形掘り方と貼り床を持つものが少なからずあり、床面は特に中央付近が硬化したものが幾つか見られる。2号竪穴建物は床面の硬化が特に顕著に認められた。

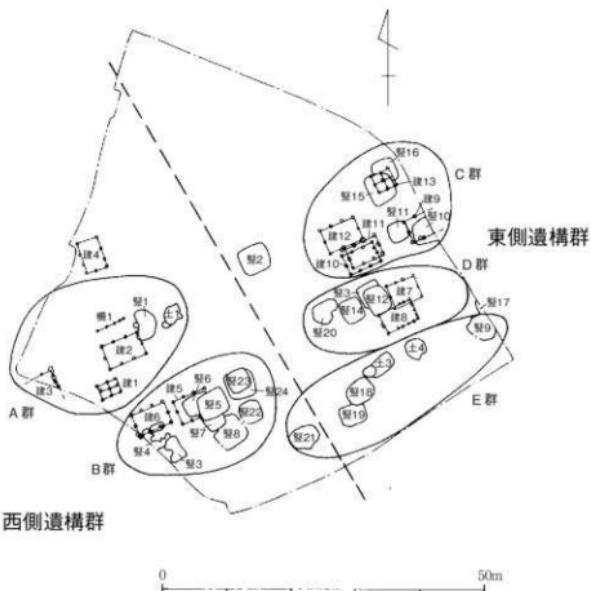
カマドは壁をほとんど掘りこまず壁から内側に設置されており、屋外にカマド本体を突出させる、いわゆる「突出型」のカマドは無い。ほとんどの場合、カマド基底部は壁際に「ハ」字状に設置された状態で検出されたが、11・16号竪穴建物のカマドは奥壁側にも基底部の土を積み上げ馬蹄形の基底部を形成する。カマド焚き口の両側に礫を立てて補強する例が5号竪穴建物カマドで検出され、他にも11・13・14・24号竪穴建物では抜き取り穴と思われる小ピットが検出された。全てのカマドに見られる訳ではないが本遺跡の特徴の一つとして挙げられる。

掘立柱建物

掘立柱建物は、2間×2間の総柱建物が1・13号掘立柱建物の2棟、平面形が不明な3・9号掘立柱建物以外の9棟は全て2間×3間の側柱建物である。総柱建物の1号掘立柱建物は東西方向に長い平面形、13号掘立柱建物はほぼ正方形となる。側柱建物では、柱穴は40cm～60cm、柱痕は15cm～25cmで特に大きな規模のものは無く等質的である。柱間は120cm～240cmと建物個々で差があり、この柱間間隔の差が面積に反映され、大型の2号掘立柱建物は22.8m²、小型の7号掘立柱建物は15m²という計測結果になる。

方形竪穴

今回の調査では、9・18・19・21号の4つの方形竪穴を確認した。これらは当初、竪穴建物を想定して掘削を行ったが、調査後に竪穴建物ではないと判断したものである。竪穴建物と比較すると平面形が不整形となる傾向があり、四隅が特に丸味を帯びる、長方形を意識して掘削される、床面が水平ではなく硬化面が確認できない、カマドを設置していない、などの諸特徴がある。出土遺物



第 55 図 遺構群の群構造想定図 (1/750)

も堅穴建物と比較すると極端に少ない。覆土の状況や主軸方位等から堅穴建物や掘立柱建物と同一時期に機能したものと思われるが遺構の性格については不明である。

集落構造

今回調査を行った古代の遺構は、主に検出した位置によって幾つかの群に区分することが出来る。また、出土遺物だけでなく主軸方位や平面形態の共通性、遺構の重複関係によって個々または複数の遺構からなる小群の時期的変遷を推定することも可能である。

まず、調査区の中央を列状に伸びるピット列については、遺構の性格自体は不明ではあるが、あたかもこの遺構を避けるように周囲に遺構がほとんど配置していないことから、少なくとも区画を意識したものであることが判る。これによつて各遺構は大きく東西に区分される。

西側の遺構群のうち、A 群は 1 号堅穴建物、1～3 号掘立柱建物、1 号土坑、1 号柵列で構成される群である。遺存状態が悪く既に削平されてしまっている堅穴建物等がある可能性もあるが、この群では頻繁な建て替え等は行われず、1 号堅穴建物と 2 号掘立柱建物との重複から少なくとも 2 時期に分けることができる。

B 群は 3～8、22～24 号堅穴建物と 5・6 号掘立柱建物で構成される群である。これらのうち、3 号堅穴建物と 4 号堅穴建物は重複しているので同時期に存在する可能性は否定される。同様に 5～8 号も相互に重複しており同時期ではなく、8 号堅穴建物と 5 号掘立柱建物は同時に存在する可

能性があるが、5～7号堅穴建物と5号掘立柱建物とは同時には存在しない。また23号堅穴建物と24号堅穴建物とも重複しており同時に存在しない。即ちこの群では5～8号堅穴建物の関係が示すように少なくとも4つの時期があったこととなり、恐らくは堅穴建物2～3棟と2間×3間の掘立柱建物1棟からなる小群の建て替えによってこの遺構の分布が形成されたものと思われる。

C群は東側の遺構群のうち、11・12・15・16号堅穴建物と9～13号掘立柱建物で構成される群である。11・12号堅穴建物と9号掘立柱建物は重複しており、また11号堅穴建物と12号堅穴建物とは互いに近接しているので同時期に存在したとは思われないため、それぞれ異なる時期に存在したものとすることができる。同様に15・16号堅穴建物と13号掘立柱建物も重複しており3時期あることが確認される。10～12号掘立柱建物のうち、10号掘立柱建物と12号掘立柱建物は重複してはいないが近接しており同時に存在したとは思われないため、やはり同時期のものではないということになる。堅穴建物に関して言えば11号と15号または16号は同時に存在した可能性があり、同様に10号と15号または16号も同時に存在した可能性がある。掘立柱建物に関しては、9号と10号または11号または12号、それに加えて13号が同時に存在した可能性があり、これらから推察すると、堅穴建物1～2棟、側柱建物1～2棟、総柱建物1棟からなる小群の建て替えによってこのような遺構分布が形成されたということになる。

D群は12～14、20号堅穴建物と7・8号堅穴建物で構成される群である。12・13号堅穴建物と8号掘立柱建物が重複しており、少なくとも3つの時期があったことが分かる。14号堅穴建物が存在した時期には、12・13・20号堅穴建物は位置が近すぎる所以同時に存在したとは思われず、7号掘立柱建物または8号掘立柱建物のどちらかが存在した可能性がある。20号堅穴建物が存在した時期には12・13号堅穴建物、7・8号掘立柱建物のいずれかが同時に存在した可能性がある。これらから推察すると、この群は堅穴建物1～2棟、もしくは堅穴建物1棟と掘立柱建物1棟からなる小群の建て替えによってこのような遺構分布が形成されたということになる。

E群は17号堅穴建物、9・18・19・21号堅穴、3・4号土坑で構成される群である。詳細不明な17号堅穴建物は別として、他は堅穴や土坑など居住施設ではない遺構からなる群であり、堅穴建物や掘立柱建物同様、同時期に存在したものではなく数時期に分かれるものと思われる。なお、単独で存在する2号堅穴建物については、時期が他の遺構よりも若干遡る可能性もあり他の遺構との関連性が認めがたい状況にあることから、群構成の枠外の遺構として取り扱う。

これらの群構成のうち、西側にあるA群とB群は一つのまとまりのある群として把握され、一つの密接な関連のある群を形成していたものと思われる。調査区外には遺構の広がる可能性もあるが、この群は現状では堅穴建物2～3棟、2間～3間の側柱建物1～2棟、総柱建物1棟程度からなる群であったと推察される。東側にあるC群とD群も同じように一つの密接な関連のある群を形成したものと思われ、堅穴建物2～3棟、2間～3間の側柱建物1～2棟、総柱建物1棟程度からなる群であったと推察される。E群はこれら東西両群の居住空間から少し離れた位置にありどちらの群にも属さない位置にあることから、両群の共有する施設であり空間であったものと考えることができる。

なお、今回の調査では非常に狭い範囲に遺構が集中し、方位を揃えて重複する様相が複数の遺構で見られた。これについては、土地の区画や利用に対する規制が働いた結果によるものであり、屋敷地としての土地利用の結果が遺構の分布に投影されたものと解釈される。

2 築城千代遺跡 第2次調査

1) 調査の概要

調査地は北西から南東方向に長く、ほとんど平坦地といつてよいが、全体的に南西から北東へわずかに傾斜し下っている。そのため、第3・4次調査区の遺構面よりも少し低くなっている。また、今回の調査区の北西側に向かって少し高くなることから、北側と第1次調査区のある南側との間の比高差1m程度のゆるやかな谷状地形に位置している。この谷状地形の最深部に1号溝が掘られている。

工事工程の都合上、大きく北半（A区）と南半（B区）に分けて調査し、第1次調査で確認した集落跡の広がりを確認するため調査区南端にC区を設定し、さらに遺構分布の確認のため南側を中心に第

1・2トレンチを設けた。結果的にC区及び第1・2トレンチではピットと擾乱以外の遺構を確認できず、遺物の出土もなかった。

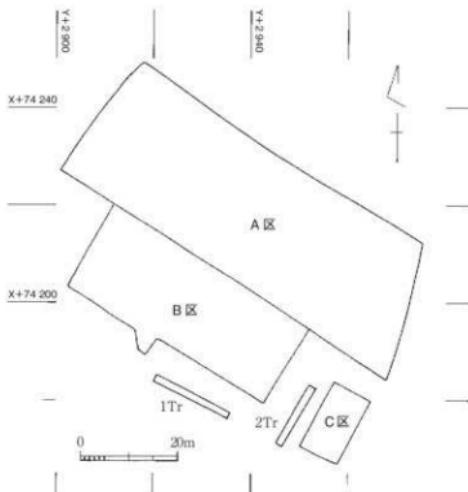
第2次調査区で確認した明確な遺構は、時期不明の土坑1基、弥生時代終末～古墳時代初頭の溝1条、古墳時代の溝2条、古代の溝2条、時期不明の溝2条、古代の波板状遺構1基だけである。この他はほとんどがピットである。なお、調査時には掘立柱建物の可能性があるピット列もあったが、建物としての確認がえられないので、今回建物跡としては報告しない。

出土遺物には、縄文時代後期後葉の西平式土器、弥生時代終末～古墳時代初頭ごろの土器群、古墳時代終末期ごろの土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器などがあり、土製品や石製品、鉄製品なども若干出土している。

2) 基本層序（第58図）

遺跡の広がりが広範囲に及ぶため、統一的な層序ではないが、基本的な堆積状況は以下に記すとおりである。

まず、最上層には県営築城団地の造成に伴う整地層があり、その直下には耕作土およびその床土が確認できる。この下層は、中世の土師器や陶磁器などをわずかに含む厚い堆積層であるが、上下



第56図 第2次調査区 位置図 (1/1,000)

の層を含め中世期の遺構の掘り込みは確認できず、単純な包含層と考えられる。

さらに下層にはキメの細かい黒褐色土が続く。調査区の土層観察から、今回の調査で確認した遺構のほとんどがこの黒褐色土に切り込んでおり、当時の遺構面であったと考えられる。なお、黒褐色土は基本的に遺物の出土は皆無であるが、遺構等から黒曜石の石鎚や剥片がわずかながら出土しており、あるいは縄文期の包含層としての可能性も考え得る。黒色土上面の標高は北側で 19.5 m、南側で 20.1 m ほどである。

遺構面とみられる黒褐色土の下位には黄褐色粘質土の地山土があり、これを 1 m 程度掘り下げると拳大から人頭大の礫を含む基盤層（黄白色土）に達する。

さて、当調査区の遺構面であるが、基本的には上記のとおり黒色土の上面であると考えられる。ただし、この面で表土掘削を終えても遺構埋土との境界が不鮮明であることから、この下層にある黒褐色土が見えはじめる高さまで掘り下げて検出を行っている。そのため、基本的には全ての遺構の深さは断面図よりもさらに 20 cm 程度深くなり、溝についても幅は平面図で示した以上に広くなる。また、今回の調査では確認できなかった遺構も多数存在すると考えられる。

3) 遺構と遺物

土 坑

1号土坑（図版 23、第 59 図）

B - C 区の南側に位置する。ほぼ正円形を呈し、径 1.6 m、深さ 0.48 m を測る。遺構の壁は垂直に近く、全体に円筒状に掘削されている。床面中央に径 0.23 ~ 0.35 m、深さ 0.15 m の小さな掘り込みを確認し柱等の可能性も考えられたが、土層や埋土の観察からは設置物の痕跡は確認できなかった。なお、周間に幾つかのピットが存在するが関連性はないようである。また、出土遺物は皆無である。

溝

1号溝（図版 23 ~ 25、第 60 ~ 63 図）

調査区の北西寄りに位置し、南西から北東に横断する溝である。幅はおおよそ 1.6 ~ 2.0 m ほどであるが、最大幅 2.5 m、最小幅 1.4 m を測る。ただし、中央付近に両側へ張り出す箇所があり、そこでの幅は 4.42 m を測る。深さは検出面から最大 1.04 m であるが、北側および南側の土層観察から、本来の掘り込みは遺構検出面から最大で 0.25 m 上から始まり、土層から読み取れる深さは 1.12 m 程度である。

溝の床面は地山の礫層が所々露出しており、土層の観察から大きく三段階程度の埋没過程が推定でき、流水と堆積が交互に確認できる。床面付近の壁は流水のためか全体的に抉り込まれており、床面そのものも小さく蛇行している。壁の上半部にも亂れが確認できることから、ある程度埋没した段階でも、流水による蛇行が繰り返されたことが窺える。なお、この溝に流水があったことは、出土土器の大半がローリングを受けていることからも間違いないだろう。

遺構の切り合いから、「1号溝 - 2・3・4号溝」の順序が判明している。

出土遺物（図版 28・29、第 64 ~ 66 図）

1号溝では複数設けた土層観察用ベルトを基準に、可能な限り層位的な遺物の取り上げを実施し



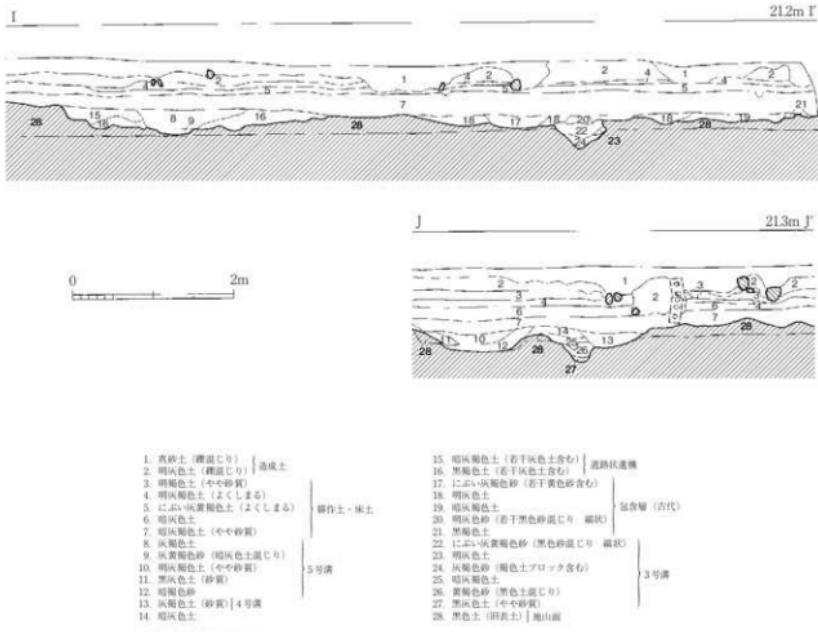
第57図 第2次調査区 遺構配置図(1/300)

た。大きさは上層・中層・下層であるが、比較的区別が容易な箇所では上層から最上層、あるいは下層から最下層を分離している。ただし、包含される土器の様相からは上・中・下の三区分が最も判断し、今回はこの三区分に従って報告する。

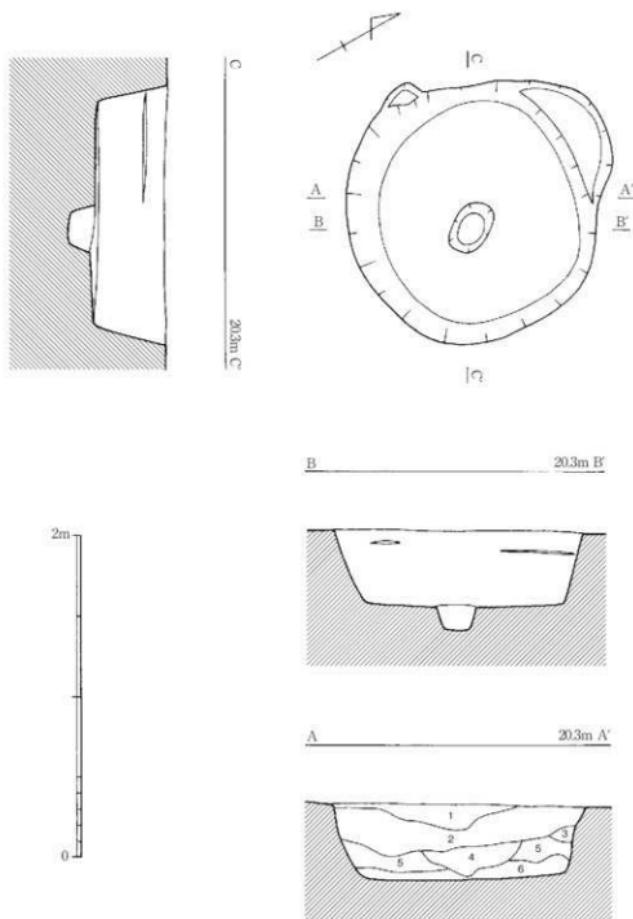
上層出土遺物

土師器（1・2）

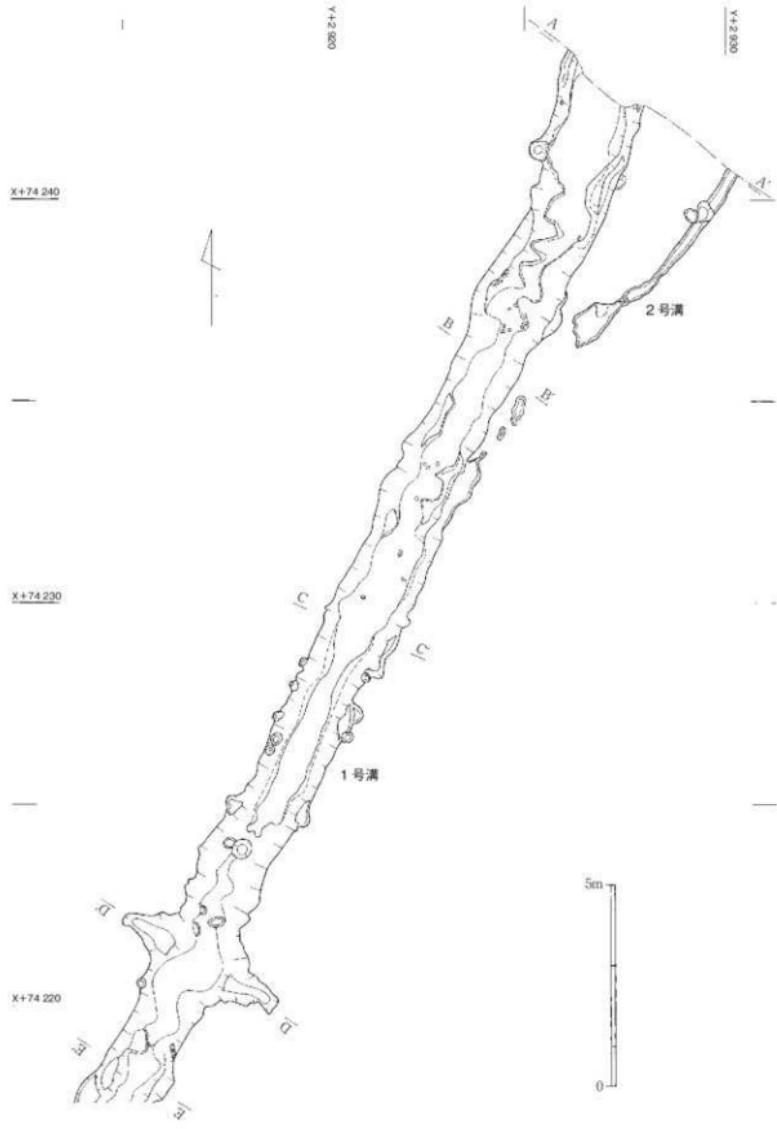
1・2は土師器である。1は壺の口縁部片である。全体的に磨滅しており調整等は不明瞭であるが、内面には暗文が施されていた可能性がある。胎土は精良である。2は高壺の脚基部片である。壺部と脚部との接合時に強いナデを行っている。



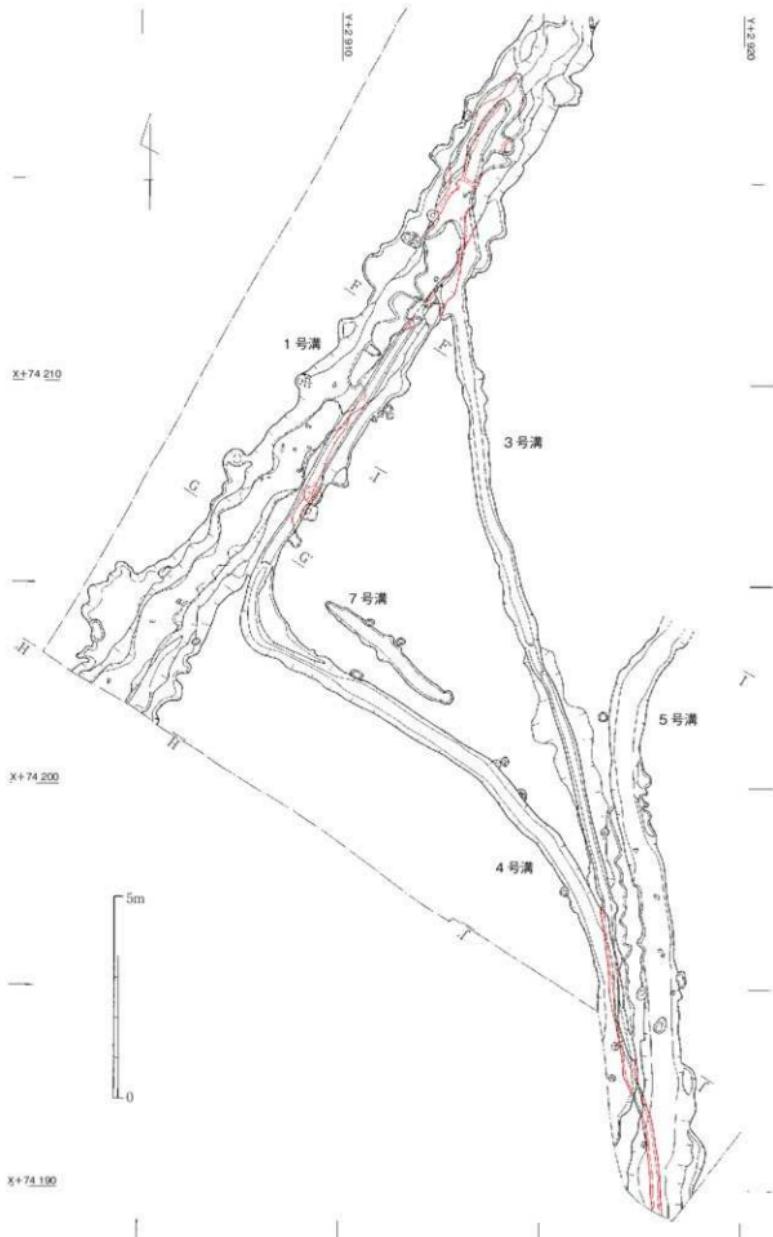
第58図 第2次調査区 基本土層図 (1/60)



第 59 図 1 号土坑実測図 (1/30)



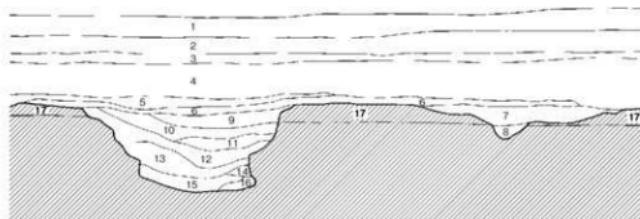
第60図 溝実測図① (1/120)



第61図 溝実測図② (1/120)

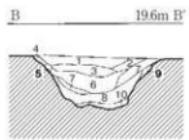
A

21.1m A'



1号溝

1. バラソ [住宅の整地]
2. 黒砂
3. 塩灰褐色土 (若干粘質)
4. 明赤褐色土 (粘質 程度) [耕作土]
5. 塩灰褐色土 [堆積土]
6. 塩灰褐色土
7. 黄褐色細色砂
8. 黑褐色土
9. 塩灰褐色土
10. 明赤褐色土 (若干砂質)
11. にい(灰)褐色土 (若干地山粒状に混じる)
12. 塩灰褐色土 (やや黄褐色砂混じり)
13. 深褐色土 (砂質)
14. 黄褐色土 (砂質)
15. にい(灰)褐色土 (若干粘質)
16. 明赤褐色土 (地山の落ち込み)
17. 黑色土



19.6m B'

19.6m C'



1. 黑色土 (灰褐色土混じり)
2. 黑色土
3. 明赤褐色土 (粘質 黑色土混じり)
4. 从色土 (若干地山粒状に混じる)
5. 黄褐色砂 (耕混じり)
6. 填灰褐色土 (地山粒状に混じる)
7. 填灰褐色土 (粘質)
8. 填灰褐色土 (灰褐色土混じり)
9. 填灰褐色土
10. 黑冰褐色土 (若干地山粒状に混じる)
11. 填灰褐色土 (若干砂含む)
12. 填灰褐色土 (若干地山粒状に混じる)
13. にい(灰)褐色土
14. にい(灰)砂
15. 填灰褐色土 (地山ブロック 耕混じり)

D

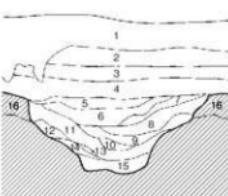
19.8m D'



1. 黑色土 (やや砂混じり)
2. 填灰褐色土 (粘質)
3. 黑色土 (やや砂質)
4. 明赤褐色土 (粘質)
5. 黑冰褐色土
6. 填灰褐色土 (若干砂混じり)
7. 填灰褐色土 (")
8. 黑冰褐色土
9. 黑冰褐色土 (若干地山小ブロック含む)
10. 黑色土 (砂質 地山小ブロック含む)

E

21.1m E'



※土層の位置は第60・61回参照

0 2m

第62図 1号溝土層図① (1/60)

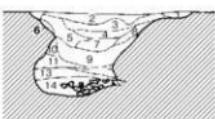
F 20.3m F'



1. 塗灰褐色土（やや砂質 黒色土粒状に混じる）→4号溝
2. 黒褐色土（若干少量の砂含む）
3. 黑色土（若干少色土混じる）
4. 塗灰褐色土（黒色土混じる）
5. 塗灰褐色土（若干黄褐色地山土含む やや砂質）
6. 黑褐色土（若干黄褐色地山土含む やや砂質）
7. にふり灰褐色土（黑色土及び黄褐色地山土若干含む 砂質）
8. にふり灰褐色土（黑色土が粒状に混じる 地山土の落ち込み）
9. 塗灰褐色土（やや砂質）
10. 黑褐色土（若干白色土混じる）
11. 塗灰褐色土（黃褐色地山土粒状に混じる）
12. 明灰褐色土（黑色土）
13. 塗灰褐色土（黃褐色地山土粒状に混じる）

N II I

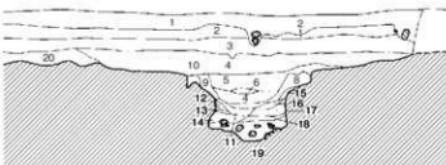
G 20.3m G'



1. 塗灰褐色土（若干黄褐色地山土含む）→4号溝
2. 黑褐色土（）
3. にふり灰褐色土（若干白色土混じる）
4. 黑褐色土（黄褐色地山土粒状に混じる）
5. 明灰褐色土（やや砂質）
6. 灰褐色土（黑色地山土若干含む）
7. にふり灰褐色土（若干白色土及び黄褐色地山土粒状に混じる 砂質）
8. 塗灰褐色土（砂質）
9. 塗灰褐色土（若干黄褐色地山土粒状に若干混じる 砂質）
10. 塗灰褐色土
11. 明灰褐色土
12. にふり灰褐色土（若干白色土混じり）
13. 塗灰褐色土（黄褐色地山土粒状に多量に混じる）
14. 明灰褐色土（人頭大までの礫多く含む）

N II I

H 21.1m H'



1. 明灰褐色土（礫混じり）| 造土
2. 明褐色土（やや砂質）
3. 塗灰褐色土（やや少しある）| 植被障壁
4. 塗灰褐色土（若干白色土含む）→（ほみの程度）
5. 明灰褐色土（やや少しある）| やや砂質
6. 黑褐色土（黄褐色地山土含む）
7. 黑褐色土（若干地山土が粒状に混じる）
8. 灰褐色土（若干地山土含む）
9. 塗灰褐色土（やや地山土粒状に含む）
10. 灰褐色土（黒褐色地山土含む）
11. 塗灰褐色土（若干地山土含む）
12. 黑褐色土（若干地山土含む）
13. 明灰褐色土（やや砂質）
14. 黑褐色土（若干地山土含む）
15. 明灰褐色土（やや砂質）
16. 黑褐色土（地山土ブロック目立つ）
17. 塗灰褐色土（若干地山土ブロック含む）
18. 塗灰褐色土（地山土混じる）
19. 塗灰褐色土（若干地山土含む やや砂質）
20. 黑褐色土（やや少しある）→田耕土

N II I 1号溝

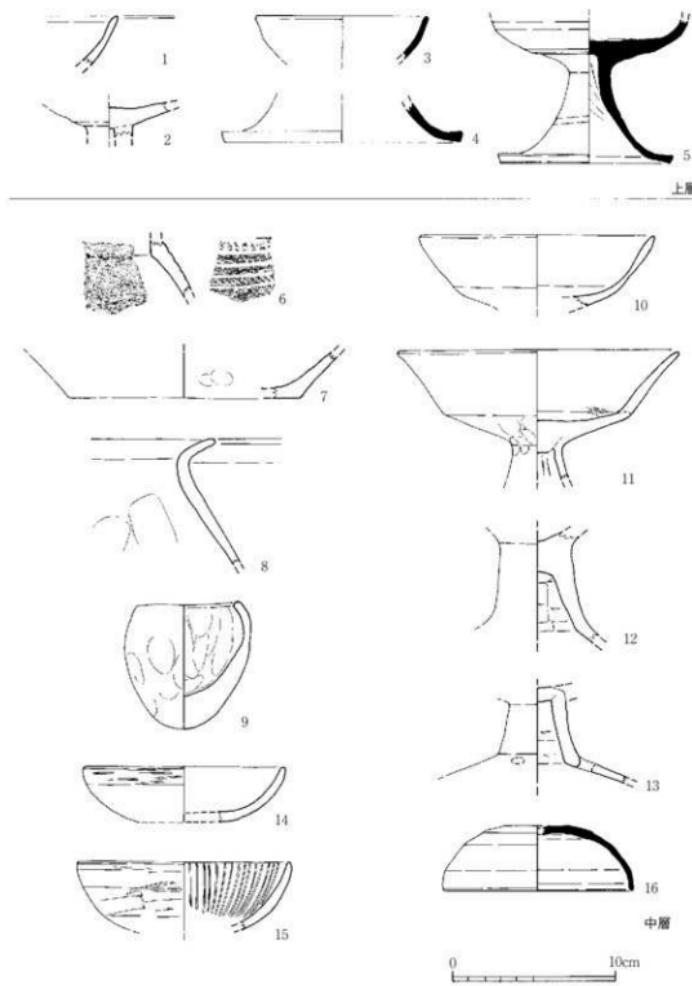
0 2m

堆土層の位置は第61回参照

第63図 1号溝土層図② (1/60)

須恵器 (3~5)

3~5は須恵器である。3は口縁部片である。坏身と思われるが、内外両面に薄く灰かぶりが見られることから、無蓋高坏の坏部の可能性もある。復元口径 10.4cm。4は高坏脚端部片である。端部に近い破片であるため定かでないが、透かしの痕跡は認められず、無蓋高坏ではないか。復元底径 14.4cm。5は無蓋高坏で、口縁部を欠損している。坏部の底は平坦で、腰部でゆるやかに内湾し、口縁部は垂直気味に立ち上がる。坏底部外面は回転ヘラケゼリを施す。脚部の中央付近には一条の沈線がめぐり、内面にはしぶりの痕跡が認められる。透かしはない。底径 10.7cm。



第 64 図 1 号溝上層・中層出土遺物実測図 (1/3)

中層出土遺物

縄文土器 (6)

6はいわゆる「擦り消し縄文」を施した縄文土器である。鉢の頸部小片で、内面はナデによる調整である。外面には五条の凹線が平行に施されており、最下部のみ縄目文を残し、その他は擦り消している。また、頸の付け根には刺突文がめぐる。形態等から西平式後半段階に位置づけられる。

弥生土器 (7・8・10～13)

7・8・10～13は弥生土器である。7は壺の底部。全体にローリングを受けており調整は不明瞭であるが、内面にはナデによる指頭痕が確認できる。弥生時代中期に位置づけられる。8は壺口縁部片で、内外とも磨滅しているが、内面は工具によるナデ調整と思われる。

10～13は高坏である。10は坏部片で、口縁部は外方へ直線的に広がる。復元口径14.3cm。11は脚部を欠損している。口縁部はやや外反しながら上方へと伸びる。坏部内面にわずかにミガキが確認でき、外面も本来ミガキがあったと推測される。脚部は八の字状に開く。口径17.2cm。12は脚基部の破片である。基部からわずかに八の字状に伸びて、裾部に向かって強く屈曲して開く形態をなす。13は低脚高坏の脚部片である。裾部に向かって強く折れて大きく開き、屈曲部付近に円孔を穿っており、残存状況から3孔透かしと考えられる。

土師器 (9・14・15)

9は土師製イイダコ壺。円孔部は欠損により失われているが、内湾する口縁部の形態や法量などからイイダコ壺と判断した。底部は厚く、口縁部に向かって薄くなる。胎土はやや粗い。口径6.4cm、器高7.8cm。14・15は土師器坏である。14は浅めの坏で、全体的にローリングによる磨滅が顕著であるが、口縁部外面に横方向のミガキが施され、内面もミガキが行われたと推定される。外面の一部に黒斑がある。復元口径12.4cm、器高3.4cm。15は底部を失う、外面下半を手持ちヘラケズリ、上半は横方向のミガキで仕上げる。内面は放射状の暗文を丁寧に施されている。復元口径13.1cm。

須恵器 (16)

16は須恵器坏蓋である。内外とも回転ヨコナデで調整し、天井部外面はヘラ切り未調整である。全体的に丸みを帯び、口縁部をわずかに曲げている。口径11.7cm、器高4.0cm。

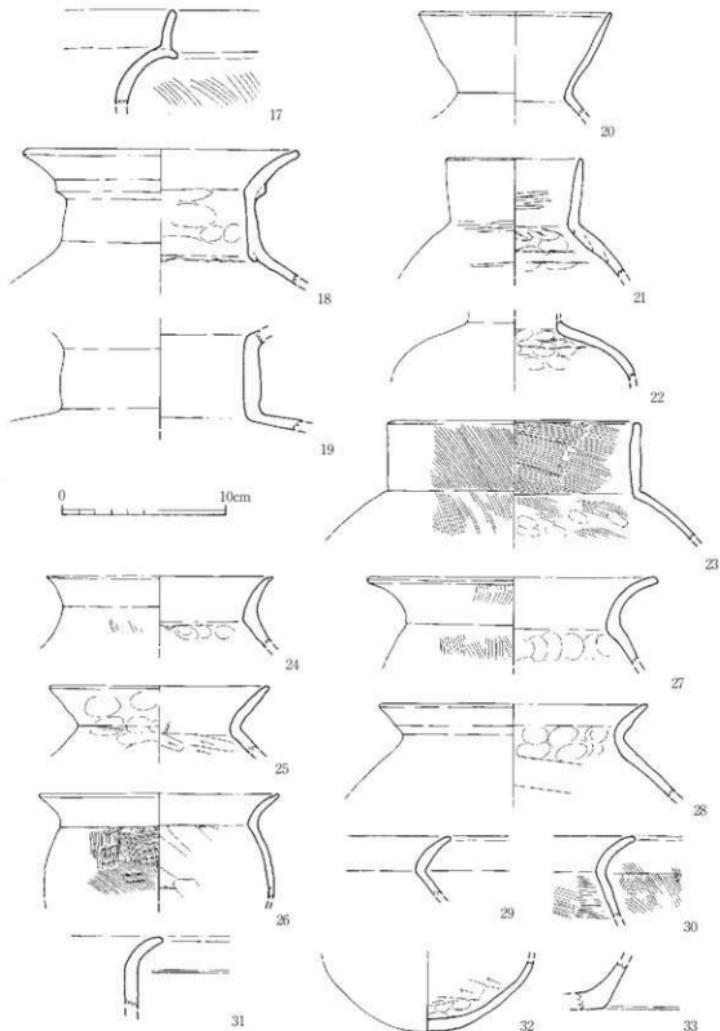
下層出土遺物

弥生土器・土師器 (17～51)

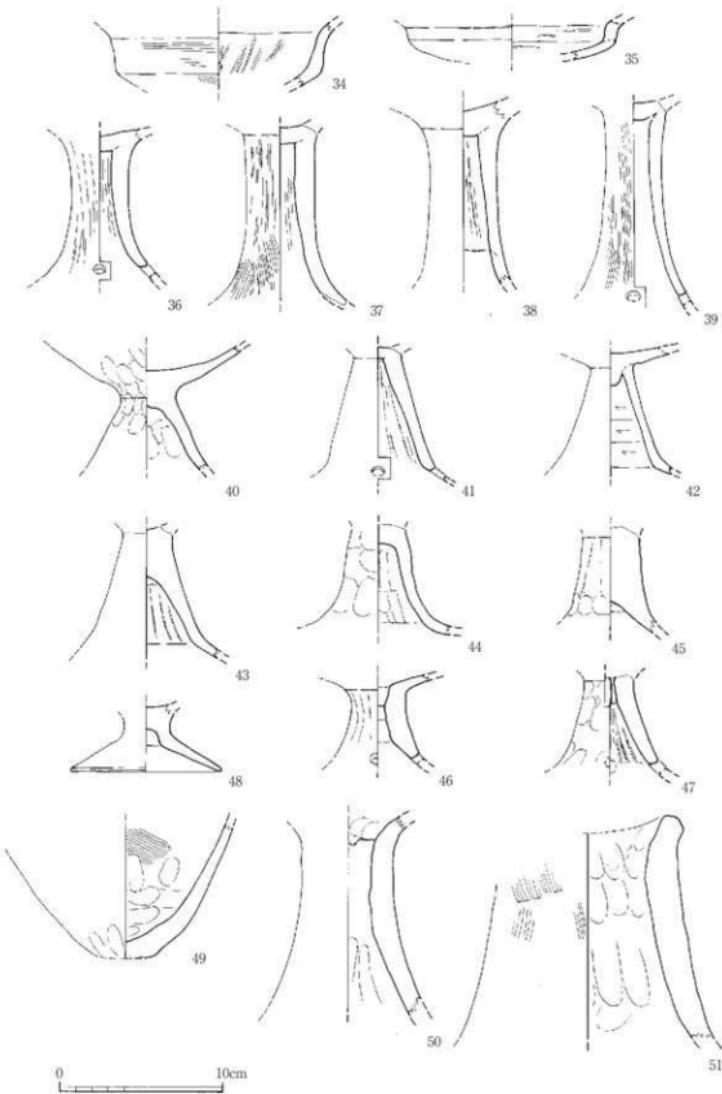
17～23は壺である。17～19は大型の壺である。17は在地系の複合口縁壺の口縁部で、頸部は強く外反し、口縁部は垂直気味に立ち上がる。外面はタテハケ調整である。18・19は畿内系の二重口縁壺である。18は頸部と体部との境が比較的緩やかで、内面には接合痕跡を明瞭に残す。頸部と口縁部の境には小さな低い突帯をめぐらせる。全体的にローリングを受け、調整は不鮮明である。復元口径16.8cm。19は頸部と体部との境が直角気味に折れる。頸部と口縁部との境に突帯はない。ローリングにより調整は不鮮明であるが、外面はミガキの可能性がある。

20～21は小型の壺で、いずれもローリングを受け。20は直口壺の口縁部で、逆八の字状、かつ直線的に外方へ広がる。胎土に角閃石が目立つ。復元口径11.8cm。21は口縁部が垂直にのび、胎土に角閃石が目立つ。復元口径8.3cm。22は肩部で、内面に接合痕跡と指頭痕が明瞭に残る。

23は中型の広口壺で、口縁部は垂直に立ち上がる。内外ともハケ調整。復元口径15.5cm。



第65図 1号溝下層出土遺物実測図① (1/3)



第66図 1号溝下層出土遺物実測図② (1/3)

24～33は壺で、24～26・29・32は小型である。24は頸部が肥厚し、口縁端部に向かって外反しながら急速に薄くなる。外面はハケ調整。復元口径13.8cm。25は口縁部が直線的に外方へのびる。体部内面はヘラケズリ。復元口径13.4cm。26はV様式系の壺で、口縁部は外反しつつも端部付近のみ内側に緩やかに曲がる。体部外面はタテハケ調整により仕上げるが、部分的に右上がりのタタキが確認できる。復元口径14.6cm。27はやや厚手で外面はタテハケ調整、頸部内面は指オサエ。在地系の長胴壺。復元口径17.8cm。28は口縁部が短く外方へ伸びる。頸部内面は二段にわたる指オサエが確認でき、これより下方は不明瞭ながらヘラケズリと推定される。畿内系壺の模倣であろう。復元口径16.3cm。29は口縁部小片で、わずかに外反しながら外方へ伸びる。調整は不明瞭である。30は在地系長胴壺の口縁部片で、内面はヨコハケ、外面はタテハケによる調整。残存状況から推定される口縁部径は20cm以上。

31は口縁部下に細い沈線を一条めぐらせ、口縁部は短く外反する。弥生時代前期に遡る資料であろう。

32・33は壺底部である。32は丸底で、畿内系壺の底部である。外面調整はローリングにより不明で、内面は底部のみナデ、それ以外はヘラケズリを行う。33は平底で、在地の壺である。全体に磨滅しており、調整は不明である。

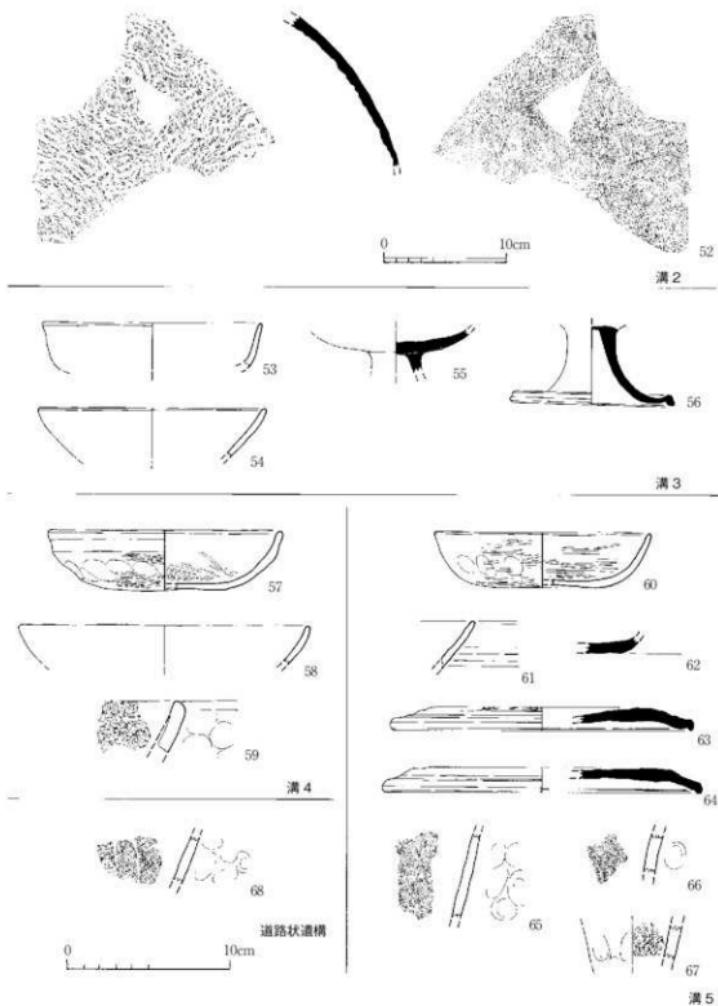
34～47は高坏である。

34・35は屈曲口縁高坏で、ともに坏部の屈曲部付近だけが残る。34は坏部がやや深めで、内外にミガキの痕跡が残る。35は坏部が浅く、外面はハケ調整、内面にはミガキの痕跡がわずかながら残る。

36～39は長脚高坏の脚部である。36はやや短めながら柱状をなし、裾部に向かって緩やかに開く。裾部との境付近には円孔を穿っており、残存状況から2孔透かしに復元できる。外面は縦方向のミガキ、内面は工具調整を行う。37は坏部との接合面で剥離しており、接合面には刻みを施している。外面は縦方向のミガキを行い、内面は工具調整の痕跡が窺える。38は内面に接合痕を残す。内面基部付近は棒状工具による器面調整を行っており、坏部側には棒状工具による刺突の痕跡が残る。39は細長い柱状部から緩やかに裾部へ開く。裾部との境付近には円孔が確認できる。

40～47は低脚の高坏である。40は基部からの開きが顕著で、坏部は鉢状を呈する。内外ともナデ調整による。41はやや厚手で、八の字状に伸びたあと裾部へ屈曲する。屈曲部には円孔が穿たれており、四孔透かしの可能性がある。外面はローリングにより調整が不鮮明であるが、内面はしばりによって生じた亀裂が顕著である。42は薄手で、裾部との境は強く屈曲する。脚部内面は横方向のヘラケズリを行う。43は基部付近のみ中実気味で、内面はしばり痕が認められる。外面はローリングによる磨滅が激しい。44は裾部との境が緩やかに外反し、内面はケズリのちナデ、外面はナデによる調整である。45は柱状部が中実で、裾部との境は比較的緩やかに折れる。外面はナデ調整である。46は中空の脚部で、短く厚手である。裾部へと屈曲する付近に円孔が穿たれており、少なくとも三箇所以上あったと見られる。47は坏部との接合面で剥離しているが、基部には径2～3mm程度の小孔が貫通している。内面はしばり痕が明瞭で、外面はナデ調整である。裾部への屈曲部には円孔が穿たれ、残存状況から四方向透かしと推定される。48は低脚の坏である。基部から強く屈曲して八の字状に広がる。内外とも磨滅が著しく、調整は不明である。底径9.2cm。

49は鉢の底部である。厚手で、底部は若干剥離しているが径3cm程度の平底である。内面の中



第67図 2～5号溝、道路状遺構出土遺物実測図 (52:1/4、他:1/3)

位にはハケ調整の痕跡が認められる。外面は強くローリングを受けている。

50・51は器台で、二点ともローリングを受けている。50は全体に厚手で、外面調整は不明であるが、内面はナデ調整で仕上げる。51はやや大型で、厚手である。内面はナデによる指頭痕がよく残り、外面はタテハケ調整である。

2号溝（図版25）

調査区北西部に位置し、1号溝の東に沿うように伸びる。検出面での規模は、幅0.48m、深さ0.18mであるが、調査区北壁の土層観察から本来の溝幅は2.62m、深さは0.41mであることが判明した。また、本来は南に向かってさらに伸びていたと見られるが、表土掘削時に削り過ぎて確認できない。溝の流れは、遺構面を削り過ぎていることを考えると、南から北へ流れていた可能性が高い。なお、出土遺物の時期を考えると、同時期の遺物が出土している3号溝につながる可能性もある。遺構の切り合いから「1号溝→2号溝」の順序が確認できる。

出土遺物（図版29、第67図）

須恵器（52）

52の須恵器横瓶片が唯一の出土資料である。内面は同心円あて具、外面は細かな格子タタキのあと粗くカキメを施している。壺片の可能性もあったが、カキメの方向やあて具の状況から横瓶の可能性が高いと判断した。

3号溝（図版26）

調査区の西側に位置し、南から北へ向かって流れ、1号溝と接触する場所で緩やかに屈曲し、1号溝と重なって流れる。検出面での幅は0.32mで、深さは0.22mであるが、調査区南壁の土層観察から本来は幅0.72m以上、深さ0.34mである。最下層に砂質土が堆積しており、一定の流水があったことが窺える。遺構の切り合いから「1号溝→3号溝→4・5溝、道路状遺構」の順序が窺える。

出土遺物（図版29、第67図）

土師器（53・54）

53・54は土師器壺である。53は口縁部で、口縁部は緩やかに曲がる腰部から垂直気味かつ外反気味に立ち上がる。小片のため口径復元にやや不安がある。54も口縁部片であるが、大きく開く形態である。調整は不明で、小片のため口径復元にやや不安がある。

須恵器（55・56）

55・56は須恵器高壺である。55は焼成がやや不良で、全体に磨滅している。透かしはない。56は脚部のみほぼ完形で、裾端部が強く屈曲する。底径10.0cm。

4号溝（図版26）

調査区西側に位置し、蛇行しながら南から北へと流れ、1号溝と重なる箇所まで確認できる。検出面での幅は0.8m、深さは0.16mであるが、調査区南壁の土層観察から本来は幅0.9m、深さ0.25mである。断面は幅の広い逆台形状を呈する。1・3号溝とは異なり、さほど流水に関する所見は得られず、出土遺物もローリングが顕著ではない。遺構の切り合いからは「1・3号溝→4号溝」の順

序が確認できる。

出土遺物（第67図）

土師器（57・58）

57・58は土師器坏である。57は残りがよく、内外とも粗い横方向のミガキが確認できる。口縁部は強いヨコナデにより少し屈曲する。底部はナデ調整である。復元口径14.4cm、器高3.6cm。58は逆ハの字に聞く口縁部で、ローリングにより調整は不明瞭である。

製塩土器（59）

59は土師製の製塩土器である。内面はほとんど剥離しており、端部付近のみ残っており、布目の痕跡が確認できる。やや厚手で、鉢形を呈する部類であろう。

5号溝（図版26）

調査区西側に位置し、南から北へ緩やかに蛇行する溝である。北側は表土掘削時に遺構面を下げるために確認できなかった。検出面での幅は0.9m、深さ0.13mであるが、調査区南壁での土層観察から本来は幅1.8m、深さ

0.31mを測る。断面形は幅の広い逆台形を呈する。堆積状況は4号溝と類似し、さほど流水はなかったと考えられる。遺構の切り合いから、「3・4号溝→5号溝→波板状遺構」の順序が確認できる。

出土遺物（図版30、第67図）

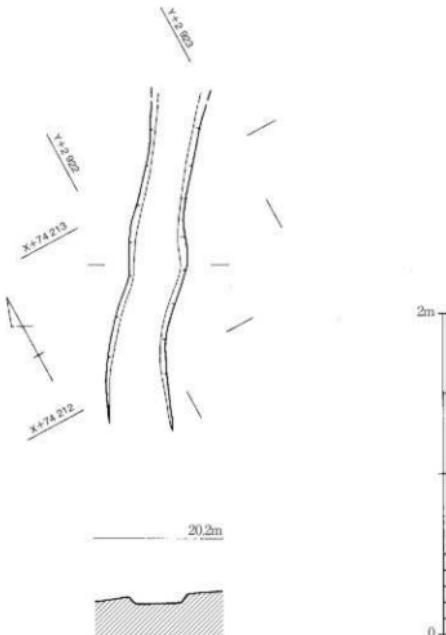
土師器（60・61）

60・61は土師器坏である。60は、平坦な底部から緩やかに内湾し口縁部へ至る。内外とも横方向のミガキ。復元口径13.2cm、器高3.4cm。61は外方へ直線的に開き、外面は強いヨコナデにより凹凸が目立つ。

須恵器（62～64）

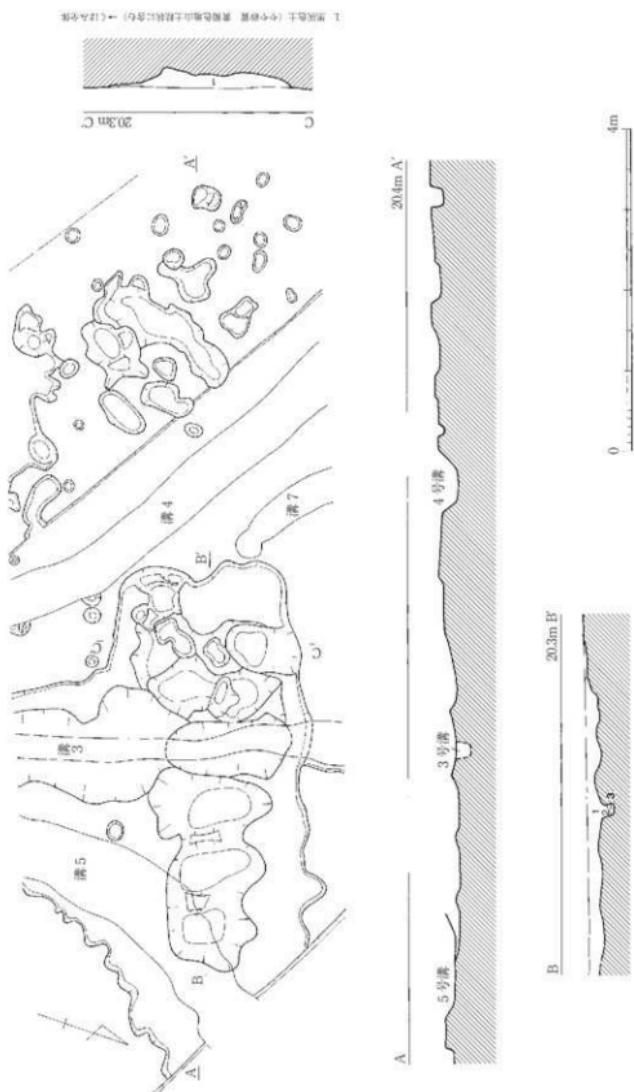
62は坏の底部小片である。底部はヘラ切り未調整である。

63・64は須恵器蓋である。63はわずかに嘴状の口縁部の形態を残し、天井部から屈曲して口縁部へ至る。撮みの有無は不明である。天井部外面はヘラ切り



第68図 6号溝実測図(1/30)

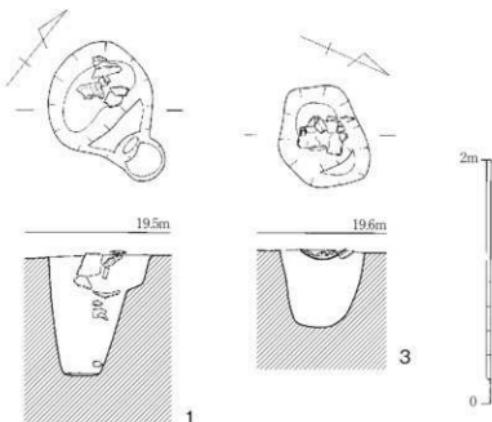
第69圖 道路抉遺標實測圖 (1/60)



未調整。内面に墨痕か。
64は口縁端部をわずかに折り曲げ、端部は少し丸みを帯びる。天井部からあまり屈曲せずに口縁部へと至る。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整で仕上げる。重ね焼きの痕跡が明瞭である。

製塩土器（65～67）

いずれも筒状を呈する部類である。65は薄手で、内面にわずかながら布目痕を残す。66は小片であるため傾きに不安があるが、内面に布目痕を残す。67も小片であるが、復元される径から底部付近の破片と見られる。内面には布目痕が残る。



第70図 ピット1・3実測図 (1/20)

6号溝（図版26、第68図）

調査区中央やや西寄りに位置し、表土掘削時に削り過ぎたために、わずかな範囲のみ確認できた。確認した長さは2.0m、幅0.36～0.4m、深さ0.05mを測り、周辺の土層から少なくとも深さ0.2mほどであったと考えられる。出土遺物は皆無である。

7号溝

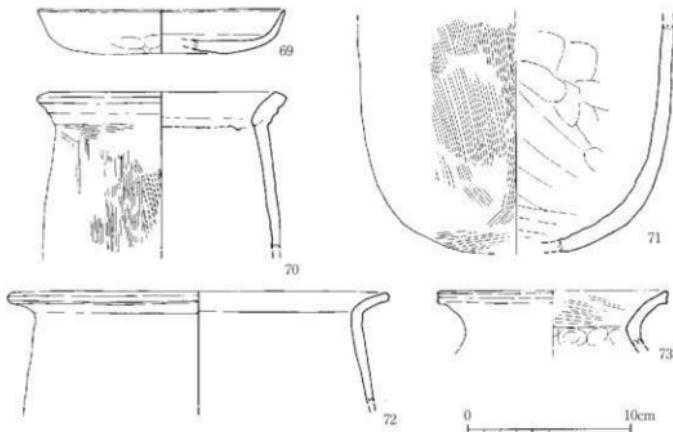
4号溝と沿う形で伸びる浅い溝で、長さ4.0m、幅0.48m、深さ0.1mを測る。遺物の出土は皆無で、時期は不明である。

道路状遺構（図版27、第69図）

調査区西側に位置し、3・4・5号溝などと重なるように掘り込まれている。長さ1.6m、幅0.7mほどの長楕円形の土坑が連続・重複して掘り込まれており、連続箇所は全体で長さ6.4m、幅2.5mを測る。この遺構は、「波板状遺構」・「波板状痕跡」などと称される道路痕跡と共通する点があることから、ここでも道路痕跡の一種と考える。調査時は道路としての認識がなかったために、十分な遺構観察を行えなかつたが、この延長上に存在する不整形な掘り込みも本来は一連の遺構であったと考えられる。また、埋土そのものに礫や土器小片などは含まれない。この遺構を道路痕跡として良いのであれば、東西方向に伸びる道路の存在が復元できる。

出土遺物（第67図）

製塩土器（68）



第71図 ピット、その他出土遺物実測図 (1/3)

わずかに製塙土器1点が出土しただけである。小片であるため傾きに不安があるが、浅い鉢状を呈する部類と見られる。内面には布目痕が認められる。

ピット

ピット1 (図版27、第70図)

調査区北西部に位置し、径 $0.43 \sim 0.47\text{m}$ ・深さ 0.5m を測る円筒状のピットである。恐らく本来は柱穴ではなかったかと推測されるが、周囲にこれと組み合う柱穴がなく、性格は不明である。上層から下層にかけて土器が出土している。

出土遺物 (第71図)

土師器 (70・71)

70・71は土師器甕で、70は小型、71はやや大型である。70は厚く肥厚する口縁部が特徴で、豊前の企求型甕の系統か。内面はナデ、外面はタテハケによる調整を行うが、内面の仕上げは粗い。復元口径 15.2cm 。71は体部下半の破片である。傾きに若干不安を残すが、円筒状に近い形態に復元でき、底部は平底気味。内面はナデ、外面はタテハケ調整である。外面に若干煤が付着する。

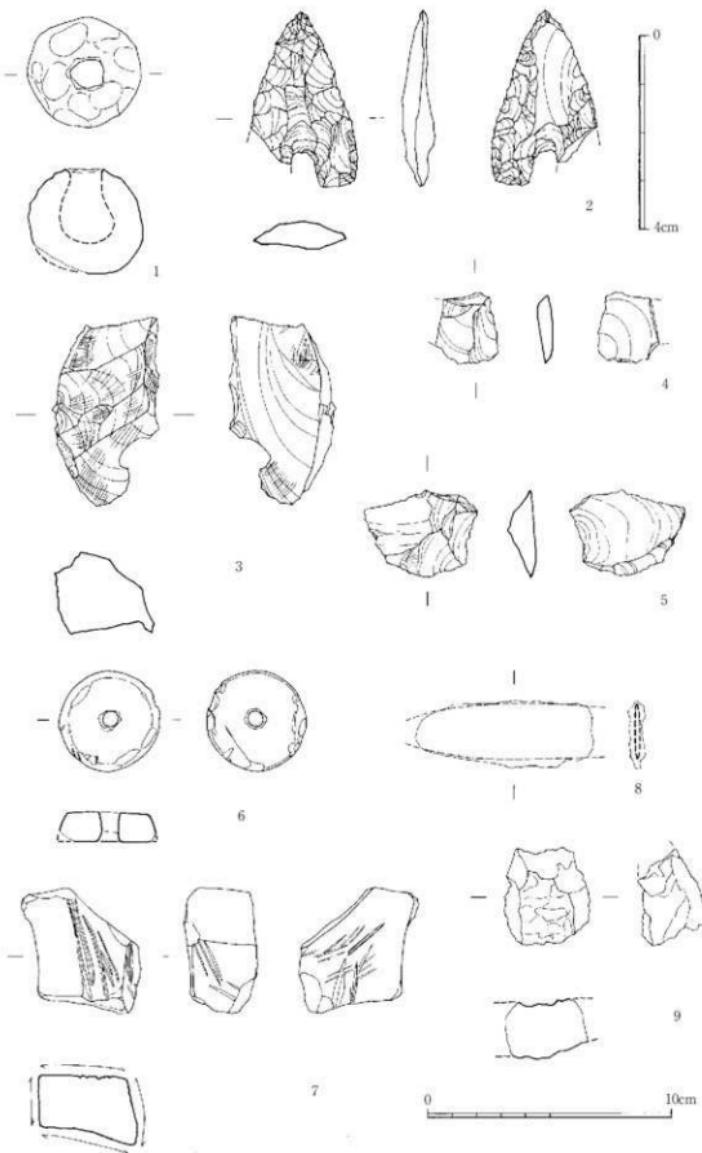
ピット3 (図版27、第70図)

調査区南側に位置し、径 $0.35 \sim 0.42\text{m}$ ・深さ 0.32m を測る。遺構の上層に土師器甕片がつぶれた状態で出土しており、一部は表土掘削時に削平してしまった可能性もある。

出土遺物 (第71図)

土師器 (72)

72は土師器甕の口縁部である。全体に薄手で、口縁部は短い。外面の調整は不鮮明ながら、タテ



第72図 その他の出土遺物実測図 (2~5:1/1, 1・6~9:1/2)

ハケとみられる。復元口径 23.4cm。

ピット 8 出土遺物（第 71 図）

土師器（69）

69 は壺。口縁部は平坦な底部から緩やかに折れ、短くのびる。復元口径 15.2cm、器高 2.7cm。

その他の出土遺物（第 72 図）

弥生土器（73）

73 は第 2 次調査 B 区検出時に出土した弥生土器の壺口縁部。口縁端部はヨコナデにより、浅い沈線状をなす。内面はヨコハケによる調整で、頸部内面に指頭痕が残る。復元口径 13.9cm。

その他の出土遺物（図版 30、第 72 図）

土製品

1 は径 4.65cm、高さ 4.3cm の球体を呈する不明土製品である。上部に径 1.1 ~ 1.5cm 程度の横円形の孔を有し、内部は中空になるようである。調査時には内部は全て土が詰まっており、洗浄作業によりこの土をある程度取り出しがたが、全ての除去が困難であることから、九州歴史資料館において CT スキャンを行い、断面観察を行った。その結果を実測図に反映させているが、得られた透過画像から、器壁内部に 1mm 程度の微細な空隙を少なからず有するものの、全て土で作製された土製品であることが判明した。外面の調整はナデによる。重さは 58.5 g。B 区中央付近での遺構検出時に出土。

石製品

2 はチャート製の石鎚で、黒灰色を呈する。片足を欠損しているが、長さ 3.6cm・幅 2.1cm（復元幅 2.3cm）・厚さ 0.6cm・重さ 4.0 g を測る。1 号溝上層出土。

3 ~ 5 は黒曜石の剥片である。3 は西北部九州産黒曜石の剥片である。縦 3.9cm・横 2.15cm・厚さ 1.65cm・10.0 g を測り、側面にわずかながら原石面を残す。ピット 19 出土。4 は姫島産黒曜石の剥片で、一部を欠損する。縦 1.4cm・横 1.25cm 以上・厚さ 0.3cm・重さ 0.5 g を測る。1 号溝中層出土。5 も姫島産黒曜石の剥片で、縦 1.75cm・横 2.35cm・厚さ 0.55cm・重さ 2.0 g を測る。1 号溝最下層出土。

6 は滑石製紡錘車である。表面には発掘調査時の傷もあるが、ローリングを受けたためか表裏とともに後世に付いた傷が無数にある。径 4.1cm・厚さ 1.2cm、中央の円孔は径 0.9cm を測り、断面台形状を呈する。重さは 36.0 g。4 号溝出土。

7 は砂岩製の砥石で、縦 5.1cm・横 4.9cm・厚さ 3.9cm・重さ 59.5 g を測る。全ての面が砥面として使用されており、このうち 3 面に研磨時の条痕が残っている。仕上砥であろうか。1 号溝最上層出土。

鉄器

8 は長さ 7.3cm 以上・幅 2.3cm・厚さ 0.2cm・重さ 16.5 g を測る鉄製品であるが、全体に鏽びで覆われており、製品本体を目視により確認することは困難である。そこで九州歴史資料館で CT スキャンを行い、詳細な画像による観察を行った。実測図による平面形および断面形には画像結果を

反映させている。これにより、両側に刃部を有し、先端が欠損していることが判明した。上面側が微妙に窪む可能性があることから鉈であるかもしれないが、現時点では確証がなく、小型の鉄劍としておきたい。1号溝最下層出土。

鉄滓

9は小型の椀形鍛冶滓片である。縦4.0cm・横3.5cm・厚さ2.6cm・重さ46.5gを測り、推定される径は12cm程度である。上面と下面の一部に原面を残すが、側面は全て破面（6面）である。上面には焼土粒がみられる。ピット16出土。

4) 小結

第2次調査では、弥生時代から古代までの遺構を確認し、一部縄文時代に遡る遺物の出土もみた。そこで、当調査に関わる遺構と遺物について簡単にまとめておきたい。

まず、最も遡る縄文時代には、後期後葉に位置づけられる西平式土器が1点出土しており、同時期かどうかは判別できないがチャート製の石鎌や黒曜石の剥片等も縄文期に遡る資料である。黄褐色地山土の直上に黒色土があり、全ての遺構はこの黒色土を切り込むが、あるいは縄文期の包含層であった可能性も否定できない。ただし、調査区の壁全体を見渡しても遺物を包含している痕跡はなく、仮に包含していたとしても極微量であったものと考えられる。

弥生時代になると1号溝が掘削される。1号溝の下層および最下層からは弥生時代終末～古墳時代初頭ごろの土器が多量に出土しており、中層や上層にも同時期の遺物が多数包含されていた。出土資料の大半がローリングによる磨滅が著しく、溝の床面付近の壁が抉れ、床面も礫混じりの基盤層が洗い出されている状況から、一定の流水があったものと判断できる。ちなみに、1号溝最下層からは鉄劍の可能性がある鉄製品が出土している点は注目される。

古墳時代になると1号溝の埋没（中層・上層）が進むが、最終的な埋没は古墳時代終末期（7世紀）に下るようである。2・3号溝もほぼ同時期の所産と考えられるが、遺物量が少なく判断に苦しむ。

奈良時代になると4・5号溝が掘削され、道路状遺構も設けられる。遺構の重複関係から道路状遺構→5号溝の順序で新しくなり、4号溝は先後関係が不明である。4・5号溝とともに堆積状況に流水の痕跡がなく、出土遺物にもローリングを受けた形跡は認められない。なお、5号溝出土の須恵器蓋（63）は内面が平滑になっており、墨痕らしきものも確認できることから転用窯の可能性があり、第1次調査で見つかった古代集落を考える上で注目される遺物である。

道路状遺構は道路の基礎部に設けられる基礎地業に伴うものと考えられ、楕円形の土坑が連続することから「連續土坑」とも称されることがある。今回確認した道路状遺構も道路に伴う痕跡である可能性が高く、東西方向に伸びる道が存在したものと考えられる。今回の調査では表土掘削により黒色土を削平しているため、路面に相当する部分は確認できなかった。調査区壁の土層観察から側溝は存在しないと考えられる。この他、ピット出土土器は基本的に奈良時代に属し、無数にあるピット群の大半はこの時期の所産ではないかと考えられる。

今回の調査では奈良時代以降の遺構は確認できず、包含層中に中世の遺物が散見される程度であった。したがって、古代以降は耕作地程度の利用しか行われなかつたものと考えられる。

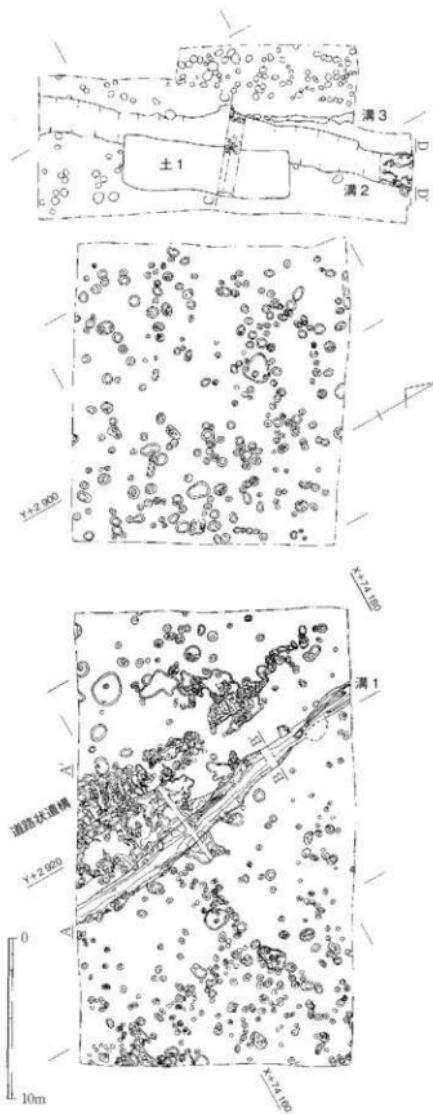
3 築城千代遺跡 第3次調査

1) 調査の概要

第3次調査区は方位より約45度振った東西に長い長方形をなすが、間に水路が走り二分される。西側の1区は $19.0 \times 16.5m$ で320m²、東側の2区は $28.0 \times 17.0m$ で470m²を測る。検出された遺構は溝1条と多数のピットである。溝は第2次調査にて検出されたものの延長と判断された。また小ピット群からなる凹凸の著しい遺構は、道路状遺構の可能性が考えられた。ピットは多数検出されたものの、掘立柱建物を復元するには至らなかった。出土遺物はパンケース1箱に留まり、ごく少ない。また調査区西側の確認調査では、 $8.0 \times 23.0m$ にわたって表土の除去を行い、遺構検出を実施したが、溝2条と竪穴建物の可能性がある土坑、多数のピットが検出された。遺構の拡がりを確認する調査であったため、溝の断面観察を行うためのトレンチ調査に留めた。

堆積状況は地表面より約65cmは表土層であり、その下層に茶褐色土・黒褐色土の包含層が広がる。特に黒褐色土の包含層は調査区全面にわたって厚く堆積しており、その厚さは約35cmを測る。ただし西側拡張区で検出された2号溝の西側で地山が上昇しており、そこで黒褐色土の堆積は終わっている。遺構面（地山面）の標高は2区東端で約20.2m、拡張区で約20.5mと、西側が幾分高くなる。

表土除去作業および調査区の壁面を注意深く観察したが、黒褐色土やその上層の暗茶褐色土に含まれる遺物量はごくわずかであった。黒褐色包含層には須恵器・土師器の小片が含まれ、土



第73図 第3次調査区 遺構配置図 (1/300)



第 74 図 2 区南壁・1 号溝土層図 (1/60)

師器には壺類と壺類が含まれる。須恵器は第 76 図に図化したが、いずれも小片であり、復元を行ってはいるものの正確さには欠けると考える。黒褐色土の上層の暗茶褐色土からは摩滅の著しい土師器壺小片と須恵器大壺胴部片があるのみである。

出土遺物 (図版 38、第 76 図)

須恵器 (1 ~ 4)

1 は壺蓋天井部。欠損部が多いが、低い宝珠形のつまみがつく。2 は平坦な形状の壺蓋で、口縁端部は欠損するが短く下方へ屈曲させるタイプであろう。3・4 は壺身で、高台を有するタイプ。高台の断面形状は、3 はやや外方へひろがり、4 は方形をなす。

2) 遺構と遺物

溝

1号溝 (図版 33、第 74 図)

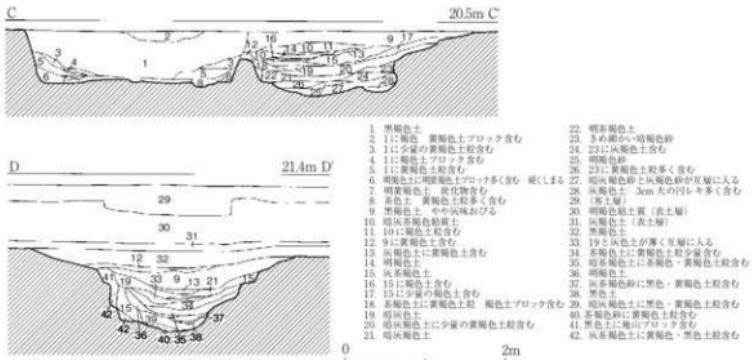
2 区の中央西寄りで検出された溝。やや西に振れる南北溝であり、地山面での幅は 1.0 ~ 1.6m を測る。調査区壁の観察から、本来は黒褐色包含層の上面から切り込むものと判断できるが、埋土と包含層の区別は困難であり、地山まで下げる検出を行った形となっている。断面観察から、黒褐色土上面での検出幅は約 2.5m を測る。底面は約 50 cm 幅で平坦で、溝の壁面は緩やかに立ち上がる。底面のレベルは南側調査区壁で 19.8m、北側調査区壁で 19.7m とほぼ同じであった。埋土は色調の異なる灰色砂質土が互層に堆積する状況をなす。

出土遺物 (図版 38、第 76 図)

設定したベルト間毎に遺物の取り上げを行ったが、いずれの区間も小ビニル袋 1 程度の遺物量であり、実測できるものはごくわずかであった。土師器に関しては、ヘラ切りとみられる胎土が精良な壺類が多い。須恵器に関しては、大壺の胴部片が数点あり、外面には平行タタキ痕、内面には青海波あて具痕を残す。

土師器 (5・6)

5 は土師器壺。薄手のつくりで口縁部端部はやや厚みを増す。内外面ともにヨコナデによる凹凸



第75図 2号溝、1号土坑土層図 (1/60)

が明瞭である。6は土師器壺の底部。ヘラ切りによるもので板压痕が認められる。体部の外面底部際には回転ヘラケズギが施される。

2号溝 (図版33、第75図)

東に約35度振る南北溝で、検出面での幅は約2.5mを測る。底面は1.0~1.5mを測るもので、中央部はやや深くなるものの平坦に近い。壁の立ち上りは中位まではほぼ直立し、上位は緩やかとなる。底面のレベルは中央部トレチで19.6m、北側調査区壁トレチで19.5mと、北側に向かって深くなる。埋土は上層が茶褐色土が基本であるが、比較的細かい単位で層が重なる。壁面の立ち上りが急となる位置を境に下層は砂質が強くなり、褐色砂質土と灰褐色砂質土が互層に堆積する。

出土遺物 (図版38、第76図)

検出面にて比較的多くの須恵器大甕胴部片が出土したが、諸特徴から同一個体の可能性が高い。厚さ約8mmを測り、外面は平行タタキ痕にカキメが加わり、内面は青海波あて具痕を残す。他には小ビニル袋3の遺物量である。土師器が多いが、全体的に摩滅が著しく、小形の壺かと思われるものの特定できないものが大半を占める。

須恵器 (7)

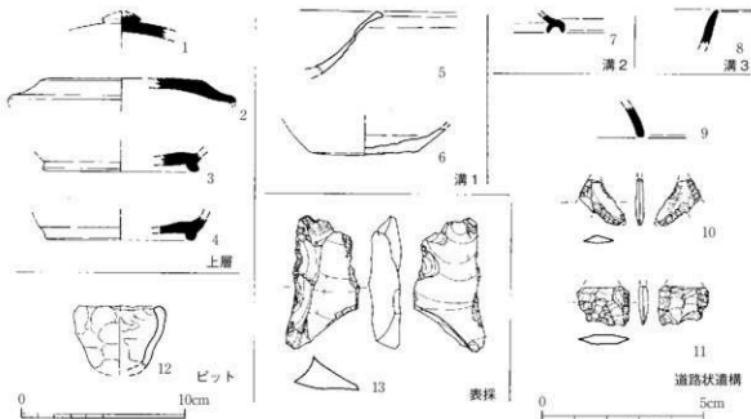
7は須恵器壺蓋口縁部。身受けのかえりと口縁端部の高さが一致するもので、身となる可能性も残す。

3号溝 (図版33)

2号溝の西側で検出された溝で、底面がかろうじて残るらしく途切れ途切れで検出された。東に約30度振る南北溝で、調査区北端から2号溝と切り合う位置まで検出されたが、2号溝との切り合は不明瞭である。検出面での幅は30~50cmを測る。

出土遺物 (図版38、第76図)

検出面出土での土器が小ビニル袋1分ある。土師器壺・須恵器壺・瓦質土器の小片が含まれる。



第76図 第3次調査区出土遺物実測図 (10・11・13: 2/3, 他: 1/3)

須恵器 (8)

8は須恵器坏身小片。直線的にのびる口縁部で、端部は尖る。

道路状遺構

1号溝の西側に約5mの幅にわたって東西方向の溝状遺構が連続する状況が確認された。総体として溝状の遺構をなすが、小ピットが連続して集合する状況を呈する。いわゆる波板状遺構と称される道路状遺構の可能性が考えられる。埋土は黒色土に明褐色土がマーブル状に入る。硬質でコロコロした感覚である。調査区南側は残存が良好であるが、中央より北部は途切れ途切れとなり、最下層のみが残る状況を呈している。調査区壁面の土層観察から、黒褐色包含層を切り込む灰～茶褐色土を基本とする幅広い堆積の中にこの遺構は伴うものと考えられる。この灰～茶褐色土に1号溝が切り込むため、道路状遺構は1号溝よりも先行すると判断される。

出土遺物 (図版38、第76図)

小ビニール袋1分の出土土器があるのみ。土師器・須恵器と黒曜石が含まれる。

須恵器 (9)

9は須恵器坏蓋の小片。端部は丸みをもつもので、おそらく半球状の形態となろう。

石器 (10・11)

10は姫島産黒曜石製の石鎚。先端部及び片側の基部を欠損するが、正三角形に近い形状の凹基式となろう。剥片の端部に微細な調整を施すことにより成形する。11は姫島産黒曜石で、石鎚の未製品であろう。両面ともに調整剥離を施すもので、先端にあたる部分を欠失する。

1号土坑 (第75図)

2号溝を切る形で検出された $3.0 \times 10.5\text{m}$ の長方形土坑。長辺は2号溝に並行する。検出面にお

ける埋土が2号溝と極めて類するため、2号溝の拡張部分のように判断されたが、トレンチ調査の結果、2号溝を切る形で方形の遺構として別に捉えるべきものと判断された。

検出面からの深さは65cmと深く、壁面の立ち上りは急傾斜である。底面は水平で、かつ底面から5cmの深さで貼床状の明黄褐色土ブロックを含む明褐色土の締まった堆積土があり、竪穴建物の可能性が考えられる。しかし平面形が竪穴建物としては細長いため土坑として扱うこととした。出土遺物はない。

ピット

ピットは調査区全体にやや粗密はあるものの溝渠なく分布する。掘立柱建物を復元するに至らなかったが、西側拡張区で検出したピット群は、比較的直線的な配置をなし、柵状をなす可能性が考えられる。埋土は黒色のものが多くを占め、暗灰褐色のものもみられる。遺物が伴うピットはごくわずかで20基に満たない。

出土遺物（図版38、第76図）

土師器（12）

12はピット（P18）出土の手捏ね土器。楕円形を呈するもので、口縁部は内湾する。内外面ともに指オサエによる凹凸がみられ、内面に残る傷状の痕跡は爪があたったものであろうか。なお、口縁部が残らず図化は行っていないが、P16からも同様の手捏ね土器が出土している。

表探遺物（第76図）

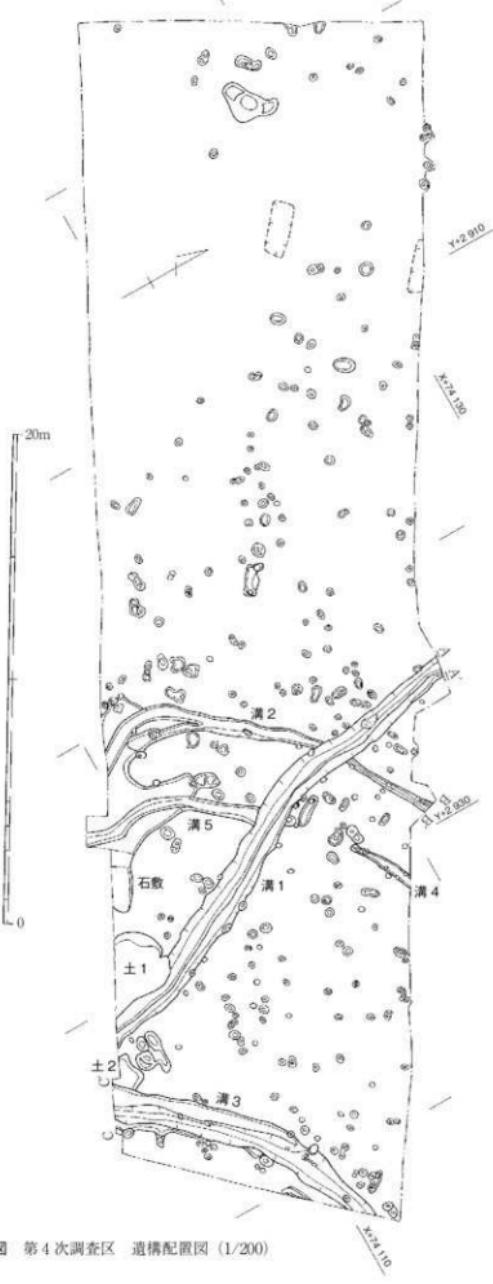
石器（13）

13は表探資料で、黒曜石の使用痕ある剥片。漆黒色を呈するもので、縦長剥片の側縁に調整剥離および使用痕が観察される。

3) 小結

3次調査で検出した遺構は溝3条と方形の土坑、及び多数のピットである。また、小ピット群からなる波板状圧痕は道路状遺構の可能性が考えられる。出土遺物はごく少ないものの、1号溝の時期は8世紀の範疇におさえられる。道路状遺構は時期を判断できる遺物は出土しなかったが、1号溝に切られるとはいはば並行する位置関係から、比較的近い時期の関連する遺構の可能性が考えられる。今回の調査区を覆う包含層もまた小片ではあるが8世紀に位置づけられる土器が出土することから、当該時期にこの地域で集落の展開があったものと想定される。

調査区内では、竪穴建物も掘立柱建物も明瞭な形では検出されなかつたが、今回の調査で検出された遺構群は北西側の第1次調査区で検出された住居群に連動するものであろう。ただし今回の調査区の西側に設定した拡張区で竪穴建物の可能性が考えられる方形土坑が検出されており、周辺のピット密度もより高くなることを踏まえれば、西側に向かって別の遺構群が展開する可能性が高い。



第77図 第4次調査区 遺構配置図 (1/200)

4 築城千代遺跡 第4次調査

1) 調査の概要

第4次調査区は第1次調査区の西側、第3次調査区の南側にあたる区域である。調査面積は648m²。検出された遺構は溝と土坑、ピットである。調査区は長方形をなすが、東側に遺構は集中し、西側はピットが散在する程度である。出土遺物はパンケース1箱のみである。細片となったものが多くを占め、形状を復元できるものはごくわずかである。

2) 遺構と遺物

1号溝（図版36、第78・79図）

第3次調査で検出された南側延長部分と考えられる。やや西に振れる南北溝で、調査区内において長さ20mにわたって検出した。幅0.9~1.5m、深さ70cmを測る。上層・下層に分けて遺物の取り上げを行ったが、いずれも細片となっていることもあり層による相違はみられない。土師器・須恵器からなり、比較的薄手の傾向にあり、坏類や小形の壺類がみられる。

出土遺物（図版38、第82図）

土師器（1）

1は小形の土師器壺で、頸部内面の棱は比較的明瞭。内面のケズリは頸部から約1cm下がった位置から施され、その境には明瞭な接合痕を残す。



第78図 1~3号溝土層図 (1/60)

2号溝（図版36、第78・80図）

1号溝と直行し、切られる溝。長さ14mにわたって検出され、幅30~70cmと北に狭い。深さは50~70cmを測る。溝底はU字形で凹凸が著しい。壁は垂直に近く立ち上がる。南側は東へ湾曲し、硬化面を切り込む。この溝両側の硬化面の性格や時期はともに不詳である。硬化面の東側には円礫が列状に伸びる。西側の暗黄褐色土は遺跡全体に堆積し、1号溝の土層図6層と同色の土層が東側に斜めに切られ、溝肩となる。その下層に黄褐色粘土ブロックを多く含む土層、黒灰色砂質土となり、その下に石敷がある。石敷間からは須恵器小片が出土した。

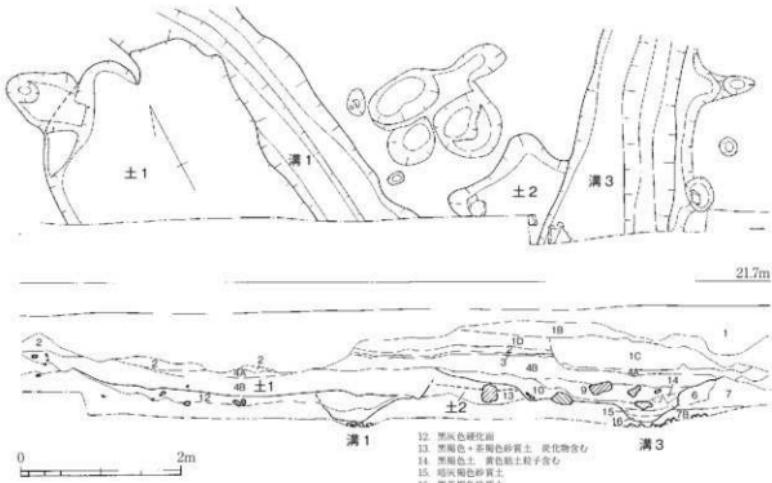
出土遺物（図版38、第82図）

須恵器（2・3）

2は半球形の形状の坏蓋。小片のため復元には不安を残す。3は口縁端部をごくわずかに下方へ屈曲させる坏蓋。

石器（4）

4は混入品で姫島産黒曜石製の石鎌。先端及び片脚先端を欠損する。ゆるやかな凹基式。



第79図 1・2号土坑、1・3号溝土層図 (1/60)

3号溝 (図版36、第78・79図)

調査区の東端で検出された南北溝。ゆるやかに円弧を描く。長さ12mにわたって検出され、幅1~1.5m、深さ60cmを測る。検出された遺構の中では切り合い関係から最も新しい時期である。下層に黒灰色土に黄褐色粘土粒を多く含んだ砂質土が堆積する。

遺物量はパンケース半箱分と、今回の調査では最も多く遺物が出土した遺構である。上層と下層に分けて遺物の取り上げを行ったが、遺物量はほぼ同量であった。ただし上層と下層で遺物の構成は変わらないものといえる。須恵器は大甕胴部片がまとまって出土しており、タタキ成形で外面には平行タタキ痕、内面には青海波あて具痕を残す。須恵器環類も小破片は比較的多く出土しているが、國化した特徴ではばかりカバーできていると考える。土師器は薄手のものが多く、坏類が多くを占めるようである。土師器は他に甕胴部片があるが、実測に耐えない。

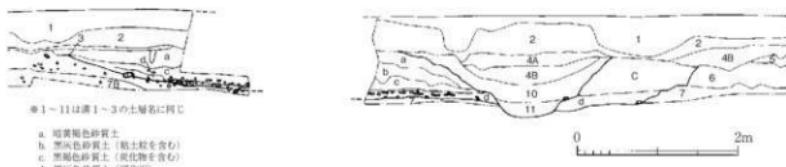
出土遺物 (図版38、第83図)

須恵器 (5~12)

5~7は須恵器坏蓋で、平坦な形状。口縁端部は下方へ短く屈曲させるもので、6はやや屈曲部が長いが他はごくわずかである。8~11は須恵器坏身で、高台を有するもの。高台断面は正方形に近く、外方へのひろがりはほとんどないか、ごくわずかである。10は焼成が悪く灰黄色を呈し軟質である。12は須恵器坏身の口縁部。丸みをもって立ち上がる体部で口縁部は短く外反させる。

土師器 (13~15)

13~14は土師器坏。13は丸みを帯びる底部で口縁部はゆるやかに外反する。14の底面はヘラ切りのちナデ。口縁部は直線的にハ字形にひろがる。15は土師器甕口縁部で、円弧を描きながらひろがる。薄手のつくりである。



第80図 石敷遺構、2号溝南壁土層図 (1/60)

4号溝 (図版36)

2号溝に平行して円弧を描く溝状遺構。南西側の5号溝の続きと考えられる。出土遺物は土師器・須恵器の小片が各1のみである。

出土遺物 (図版38、第82図)**須恵器 (16)**

16は半球形の形状の壺蓋で、薄いつくりである。

5号溝 (図版36)

石敷遺構から北に延びる浅い溝で、石敷遺構より南は2号溝に並行する。内部には石敷遺構の石材と同様の河原礫を敷いている。遺物は土師器小片が3点出土しているのみである。

6号溝 (図版36)

2号溝の南側硬化面に近い位置で検出された浅い溝で、2号溝から派生した状況をなす。5号溝に並行するように円弧を描く。溝内において円礫の列が見られる。

出土遺物 (図版38、第82図)**弥生土器 (17)**

17は弥生土器壺の底部。高い柱状を呈し、底面は上げ底。混入品と考えられるが、近隣に弥生時代の遺構が存在することを窺わせる。

須恵器 (18・19)

18は平坦な形状の須恵器壺蓋。口縁端部は下方に向かって丸みをもって突出させる程度である。天井部外面はヘラ切り状の痕跡を残すが、ナデのためか不明瞭となる。19は瓦質の壺身であるが、焼成の悪い壺蓋の可能性もある。

石敷遺構 (図版37、第80・81図)

調査区南側の東寄りに拡がる。東西4m、南北3mの範囲が検出された。3cmから5cm大の河原礫を、7層黄褐色土直上にて硬く叩き締めた黒灰色粘質土壤中にびっしりと均して敷きつめている。この硬化面は2号溝に切られながらも西側に拡がる。また石敷は調査区南側にも大きな拡がりを持つとみられる。前述した5号溝はこの石敷遺構下から北に延びており、関連する遺構と考えられる。第3次調査で検出された小ピット群からなる凹凸の著しい遺構については道路状遺構の可能性が指摘されているが、この石敷遺構と溝も関連する可能性がある。出土遺物は中型のビニル袋にお



第 81 図 石敷造構実測図 (1/60)

さる程度の量であり、かつ 2cm 四方に収まる大きさの小片からなる。須恵器・土師器からなり、須恵器は壊と判断できるものが多く、からうじて半球形の壊蓋と見られるものがある。

1号土坑（第 79 図）

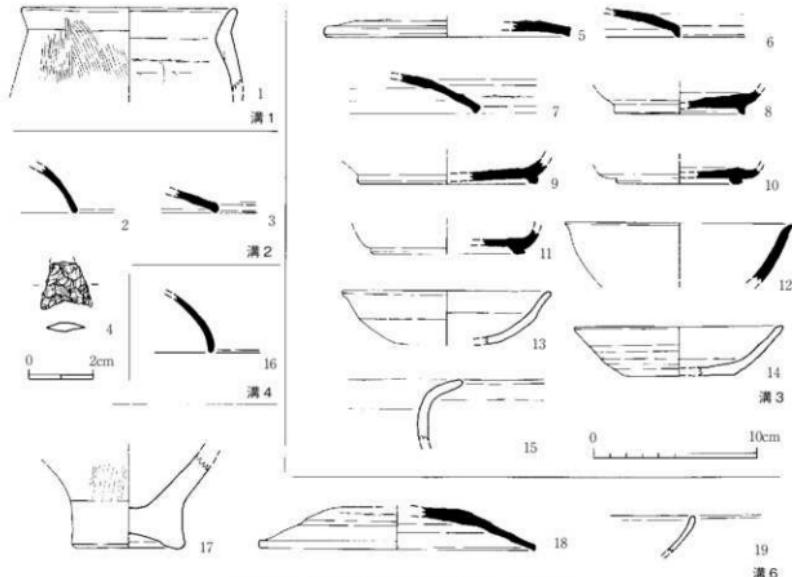
1号溝南側には硬い面が折り、1号溝上部を覆う。この硬化面を1号土坑とする。

大ビニール袋1程度の遺物量であり、弥生土器の壊片が多くを占める。しかし古墳時代後期と考えられる蓋受けの立ち上がり基部を伴う須恵器壊身小片が含まれ、下層として取り上げられた資料は2cm 四方に満たない程度の須恵器・土師器小片であり、時期幅が存在する。

出土遺物（図版 38、第 83 図）

弥生土器・土師器（1～6）

1は弥生土器で、深い鉢形土器となろうか。ハ字形に広がる形状をなし、口縁部は胴部に比して



第82図 溝出土遺物実測図 (4:2/3、他:1/3)

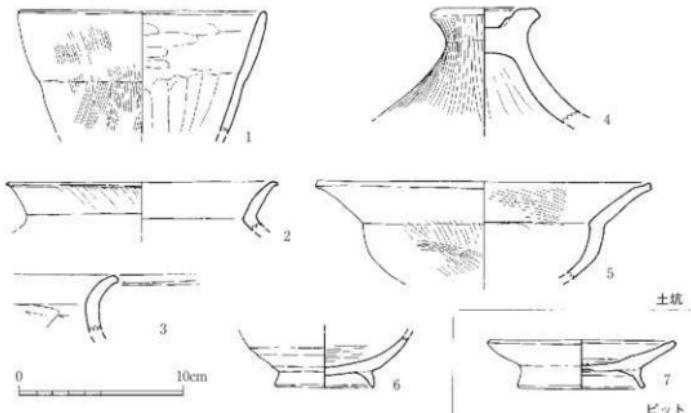
厚みを有する。2は土師器甕の口縁部。口縁端部は外方へつまみ出される。頸部内面には胴部のケズリにより強い稜が生じる。焼成良好で硬質。3は円弧を描き外反する甕口縁部。胴部内面はケズリによる。4は弥生土器の甕蓋。上部は円弧を描き強く外反し、内面は粗い調整で凹凸がみられる。5は弥生土器鉢ないし高杯。半球形の坏部に直線的に大きくハ字形に開く口縁部が続く。6は土師器椀で、ハ字形に開く高台を有する。内面は摩滅するが、黒色を帯び横方向のミガキを施すようであるため黒色土器に分類されようか。

2号土坑（第79図）

調査区南東隅付近で3号溝に切られる土坑である。長方形を呈するようであるが、調査区外に延びることもあり全容はつかめない。遺物は中ビニル袋1におさまる量であり、土師器小片が少量と須恵器大甕胴部片からなる。須恵器大甕胴部はタタキ成形で、外面に平行および格子タタキ痕、内面に青海波あて具痕を残す。

ピット

ピットは黒褐色土から掘り込み、黄褐色粒を多く含む覆土をもつものと、黄褐色粘質土を掘り込み暗褐色土を覆土とする2種がある。東側のピットの埋土は黒色土+橙色の小プロックを埋土とするものが多い。多数検出されたものの、遺物が伴うものは7個に限られる。かつ土師器の小片が大半であり、実測したものは7の土師器のみである。



第83図 土坑、ピット出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (図版38、第83図)

土師器 (7)

7は土師器坏。坏部は浅く直線的に開く。底面はヘラ切りでハ字形に開く高台を貼り付ける。

3) 小結

4次調査では溝6条と土坑2基、石敷遺構と多数のピットが検出された。1号溝は第2・3次調査で検出された遺構から続くものと考えられ、調査区内で若干蛇行するものかなりの距離にわたって直線的に伸びるものと把握され、計画的に構築されたものと想定される。出土する土器も、8世紀に位置づけられるものであり、第2・3次調査と矛盾がない。2号溝と5・6号溝は円弧を描きながら並行するもので、連動する溝と判断される。出土する土器は小片のみであり評価が難しいが、7世紀～8世紀におさまるものといえ、1号溝に切られるという関係からも当たはまる。3号溝は切り合い関係からいえば、今回の調査区の中で最も新しく位置づけられる。出土土器は8世紀におさまるものであり、矛盾はない。2・4・5号溝と距離は離れるが、ほぼ並行する軌跡を描くもので、近似した性格かと想定される。

4次調査で特徴的な遺構として石敷遺構が挙げられる。5号溝はこの下層から伸びることから関連するものとして捉えられるが、河原疊を硬く叩き締めた状況から道路状遺構の可能性も考えられる。3次調査区においても溝に近接して道路状遺構が検出されていることから、この遺構に関しても同様のあり方を示すものといえよう。

4次調査で検出された溝は切り合い等から時期差はあるとはいえるが、出土土器からは7～8世紀という比較的近い時期に位置づけられるといえる。これまでの調査により広域にわたって古代の遺構が検出される結果となったが、堅穴住居や掘立柱建物は検出されず、ピットの密度も低いものであり集落域の縁辺と想定される。また、弥生時代中期を中心とする土器が散見されることから、古代とは異なったあり方で弥生集落が近隣に存在することを想起させる成果が得られた。

IV おわりに

以上で築城千代遺跡第1次～第4次調査の報告を終える。調査内容の個別具体的評価については既に記したので、ここでは遺跡の時期的変遷を中心に概観して総括したい。

築城千代遺跡で最も古い時期のものは、第2次調査区で出土した縄文時代後期の磨消繩文土器であるが、後世の遺構に混入した状態である。他に黒曜石製石鏃や使用剥片も出土しているが、どれも遺構に伴った状態のものではない。付近に当該期の遺構が存在するのか、それとも遺構は既に削平されてしまっているのか判断できないが、少なくともこの一帯に人々が生活を営んだ最初の証拠として特記される。

その後、弥生時代前期や中期の遺物も散見されるがやはり後世の遺構に混入した状態で出土したものであり、本格的な遺構の形成は弥生時代後期終末を待たなければならない。第2次調査区で検出された1号溝は第2次～4次調査区で確認されており、総延長83mに及んで直線的に伸びる遺構である。出土遺物から開削時期は弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭、埋没時期は7世紀代に比定されている。流水の痕跡から水路として利用されていた事が判る。付近に当該期の集落等の存在が予想されるが、これ以上の事については周辺域の調査の進展を待つより他にない。

古墳時代初頭から7世紀頃までは遺構・遺物は見られない。再びこの遺跡に生活の痕跡が見られるのは7世紀以降のことである。7世紀代は2次～4次調査区で少量の遺物が出土しているだけであり依然として不明瞭である。遺構や遺物が発見され生活の痕跡が明確な形となって表れるのは8世紀代からとなる。第1次調査区では一部の堅穴建物に8世紀前半代と思われるものがあり、集落の開始期をこの頃に求めることができる。その後、8世紀後半になると第1次調査区で堅穴建物、掘立柱建物を中心とする集落関連遺構が継続的に造営され、一定期間生活が営まれたことが判る。第2次～第4次調査区でも同時期の溝や道路状遺構が検出されており第1次調査区の集落との関連が想定されるが、出土遺物からほぼ同時期と判断される一方、集落域で見られる主軸方位の同一性が第2次～第4次調査区で検出された溝や道路状遺構では見られない点は関連性を認めがたい否定的な要素であり、これらの関連性の有無については今後の調査の進展を期待したい。なお、第1次調査区で見られた古代の生活痕跡も、第1次調査区で見つかった中世頃の可能性のある1棟の掘立柱建物を除けば、遅くとも9世紀初頭以降にはほぼ見られなくなる。

以上のように、築城千代遺跡の中心は弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の時期と、8世紀代との二つの時期があり、特に8世紀代の集落遺跡は一定程度の継続的な生活の痕跡が認められ、各遺構の類型化や遺構の群構造を想定できる貴重な成果を得ることができた。豊前北部地域では他にも古代の集落遺跡が少なからず調査されており、比較検討する上で重要な成果を追加できたものと思われる。

一方で、今回の第1次から第4次にわたる発掘調査では少量の遺物しか見つからなかった縄文時代、弥生時代の遺跡の存在も周辺域に想定されるところであり、今後周辺域の調査が進めば新たな知見が得られるものと期待される。

図 版



1. 第1次調査区遠景
(南上空から)



2. 第1次調査区遠景
(東上空から)

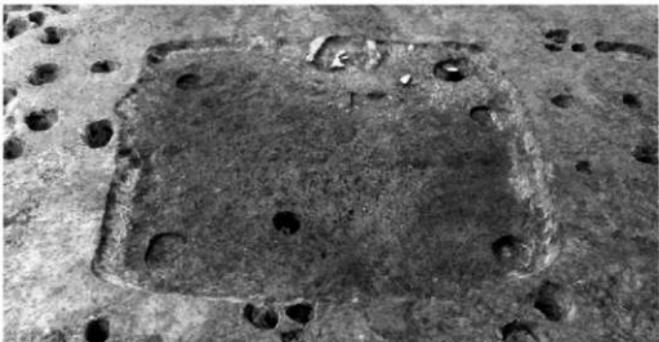
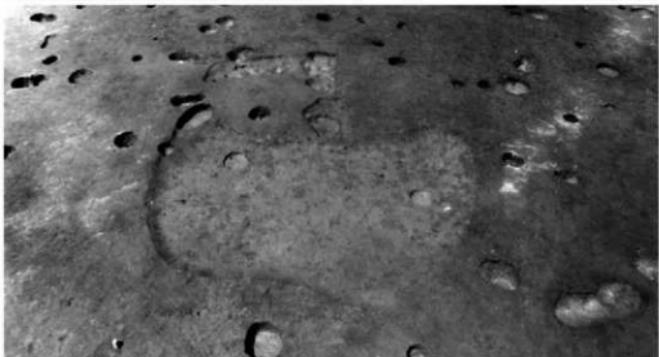
図版2



1. 北半部全景
(上空から)



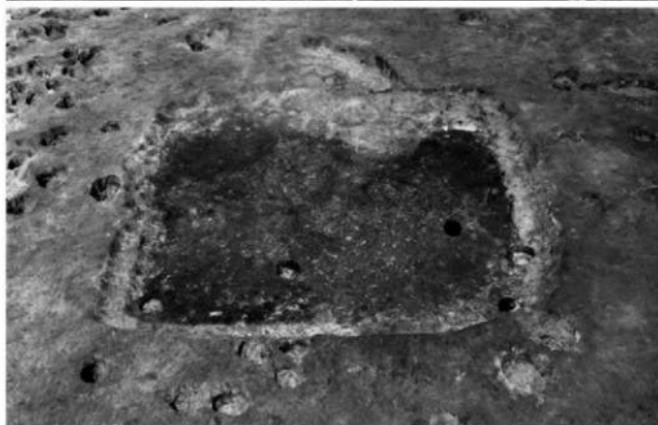
2. 南半部全景
(上空から)



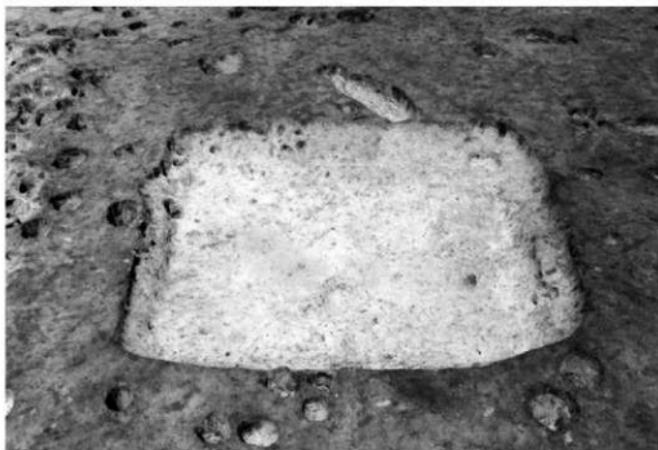
図版4



1. 2号堅穴建物カマド
(南から)



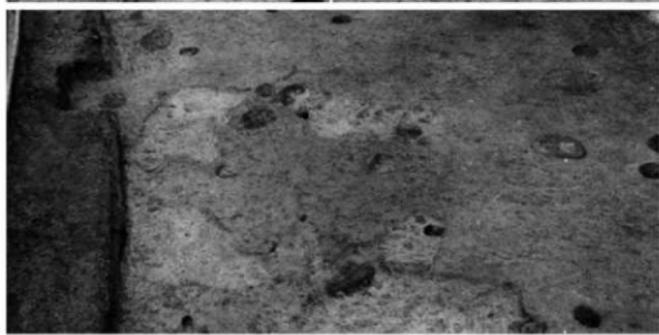
2. 2号堅穴建物下層
(南から)



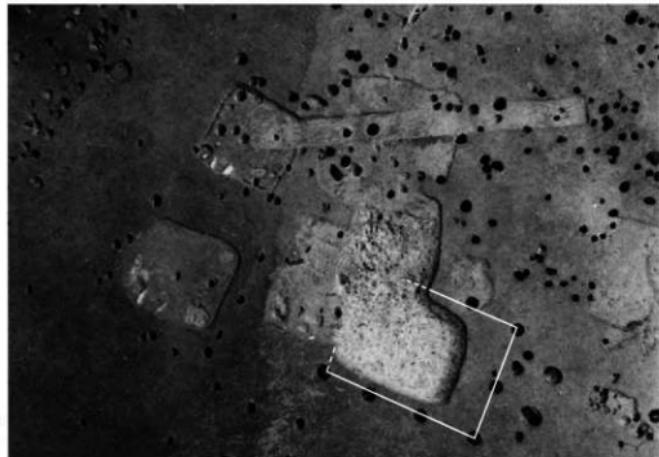
3. 2号堅穴建物完掘
状態 (南から)



1. 3号竪穴建物
(南東から)



2. 4号竪穴建物
(南東から)



3. 5~8・22~24号竪
穴建物周辺(上空から)



1. 5～8号竪穴建物
(南から)



2. 5～7号竪穴建物
完掘状態 (南から)



3. 10号竪穴建物
(南から)



1. 11号堅穴建物、9号
掘立柱建物（南から）



2. 12号堅穴建物
(北東から)

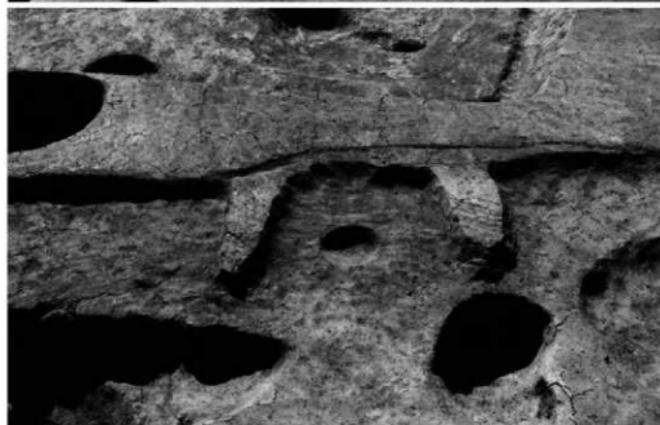


3. 12号堅穴建物カマド
(北東から)

図版 8



1. 12～14号堅穴建物
(東から)



2. 13号堅穴建物カマド
(東から)

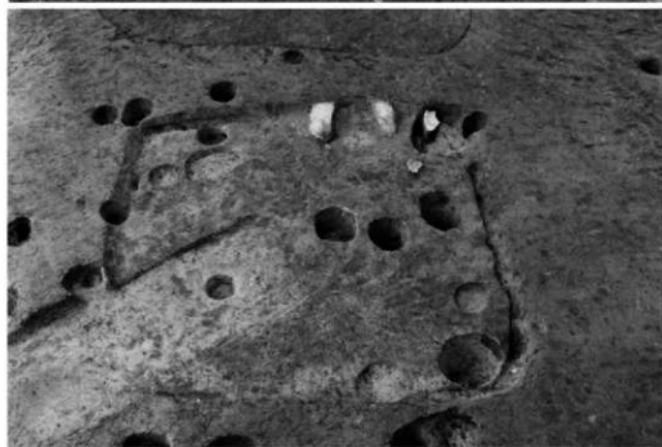


3. 15・16号堅穴建物
(南東から)





1. 20号竪穴建物
(南から)



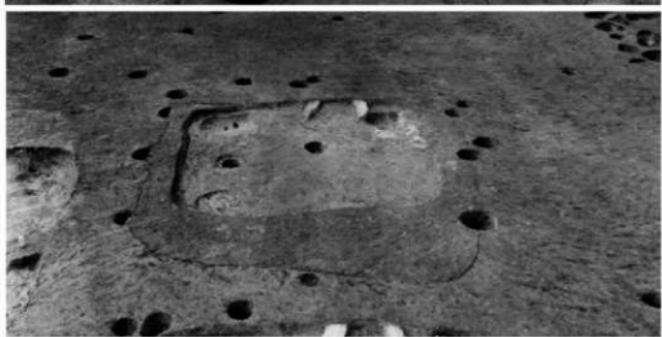
2. 22号竪穴建物
(南から)



3. 22号竪穴建物カマド
(南から)



1. 22号竪穴建物完掘
状態（南から）



2. 23号竪穴建物
(南から)

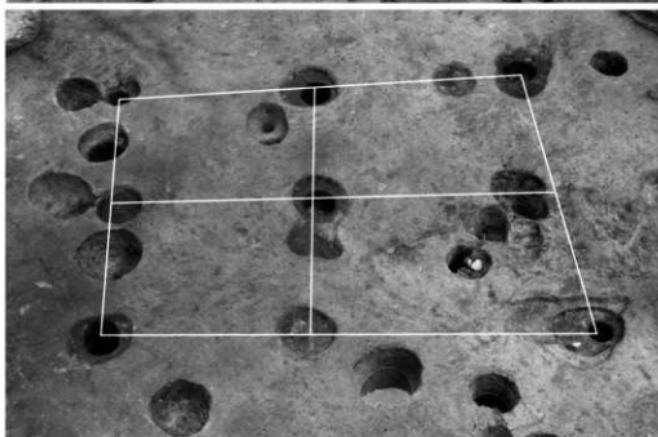


3. 23号竪穴建物カマド
(南から)

図版 12



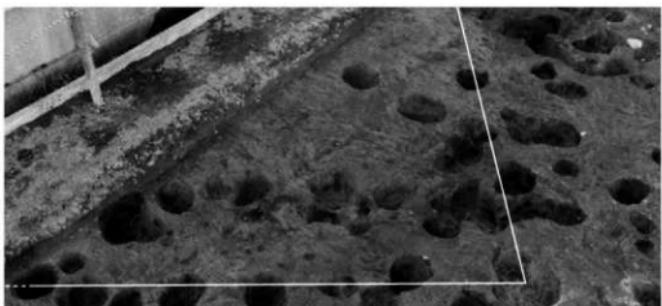
1. 24号竪穴建物
(南から)



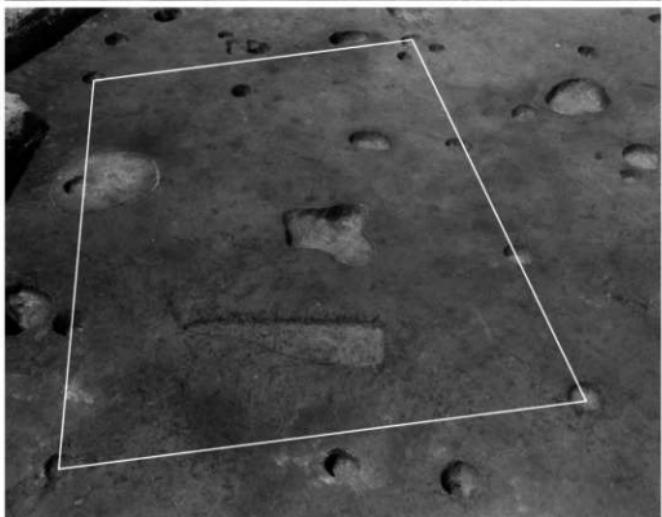
2. 1号掘立柱建物
(西から)



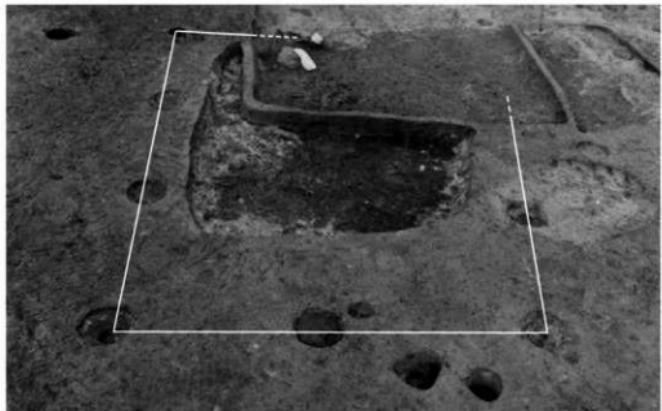
3. 2号掘立柱建物
(西から)



1. 3号掘立柱建物
(東から)

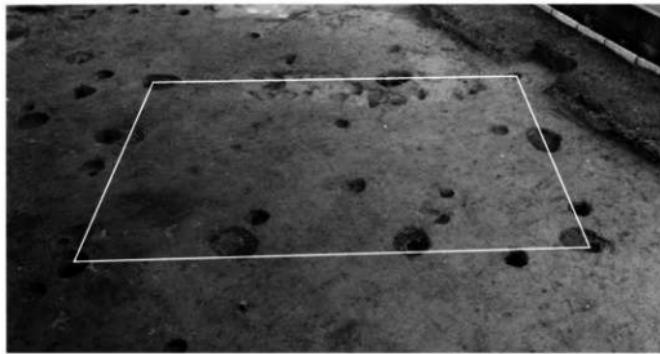


2. 4号掘立柱建物
(南から)

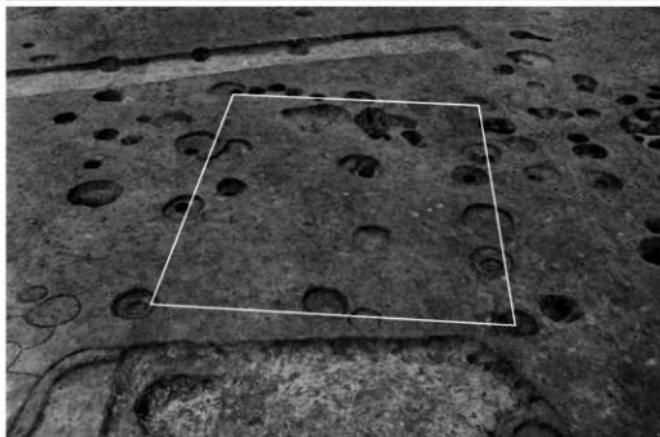


3. 5号掘立柱建物
(南から)

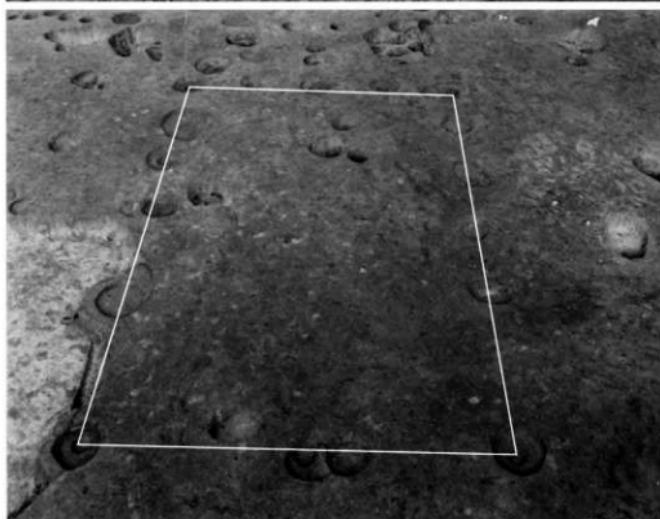
図版 14



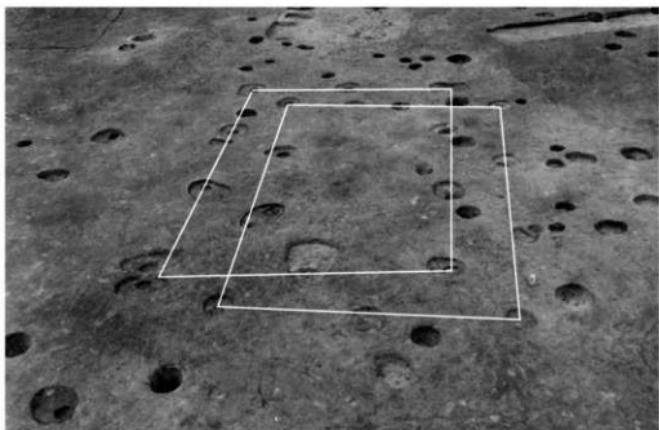
1. 6号掘立柱建物
(西から)



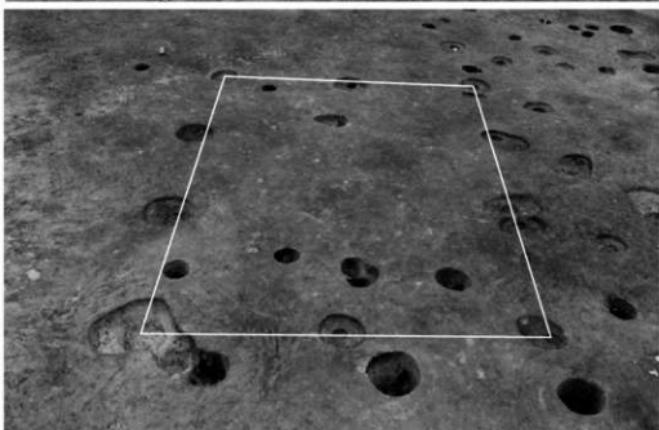
2. 7号掘立柱建物
(南西から)



3. 8号掘立柱建物
(南西から)



1. 10・11号掘立柱建物
(西から)



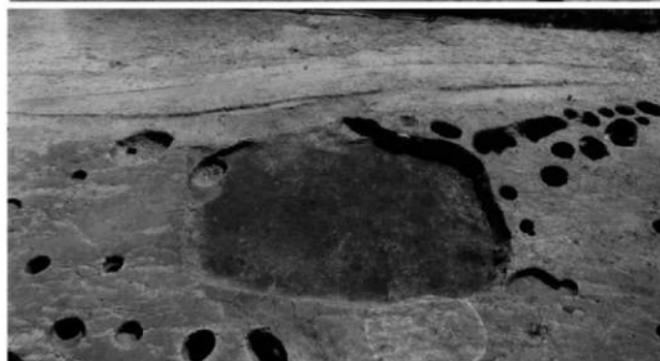
2. 12号掘立柱建物
(南から)



3. 9号竪穴 (西から)



1. 18・19号堅穴
(北から)



2. 21号堅穴 (北から)



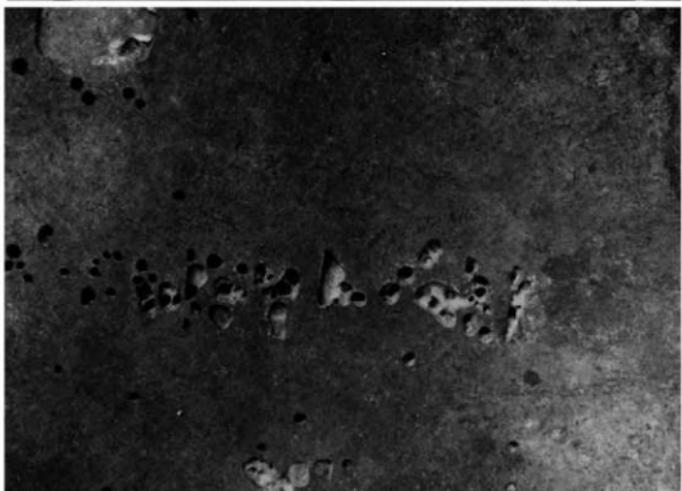
3. 1号土坑 (北から)



1. 2号土坑（南から）



2. 3号土坑（北から）



3. ピット列
(上空から)

図版 18



1. ピット列（北から）



2. 南側段落ち
(東から)



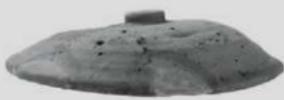
3. ピット遺物出土
状態（西から）



壹 2-10



壹 15-22



壹 5-1



壹 22-5



壹 6-17



壹 22-7



壹 12-1



壹 12-3



ピット -31



壹 12-7



ピット -48



1. 第2次調査区遠景
(北東上空から)



2. 第2次調査区 A 区
全景 (上空から)



1. 第2次調査区B区
全景（上空から）



2. 第2次調査区B区
北半全景（上空から）

図版 22



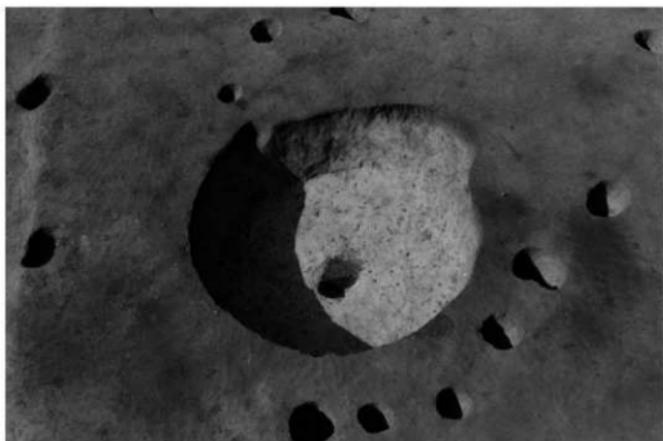
1. 第2次調査区C区
全景（東から）

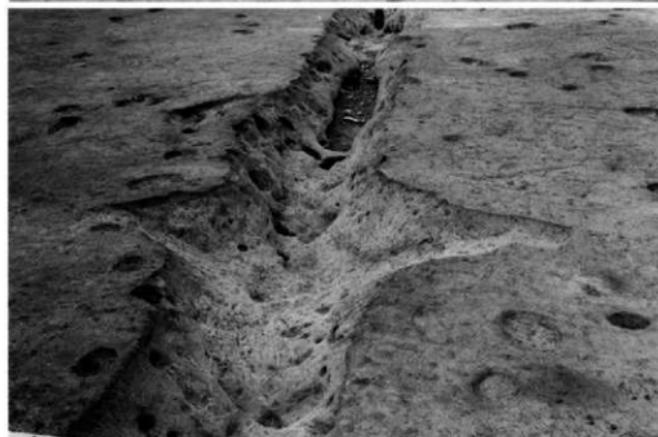


2. 第1トレンチ（南東から）



3. 第2トレンチ（北東から）







1. 1号溝南半部（南から）



2. 2号溝（南から）



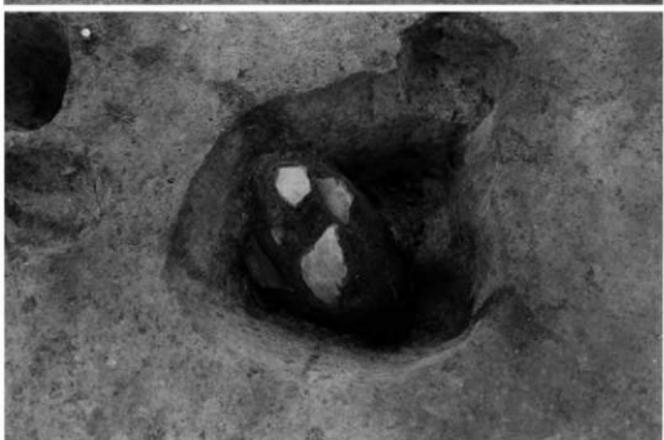
1. 1・3～6号溝
(北東から)

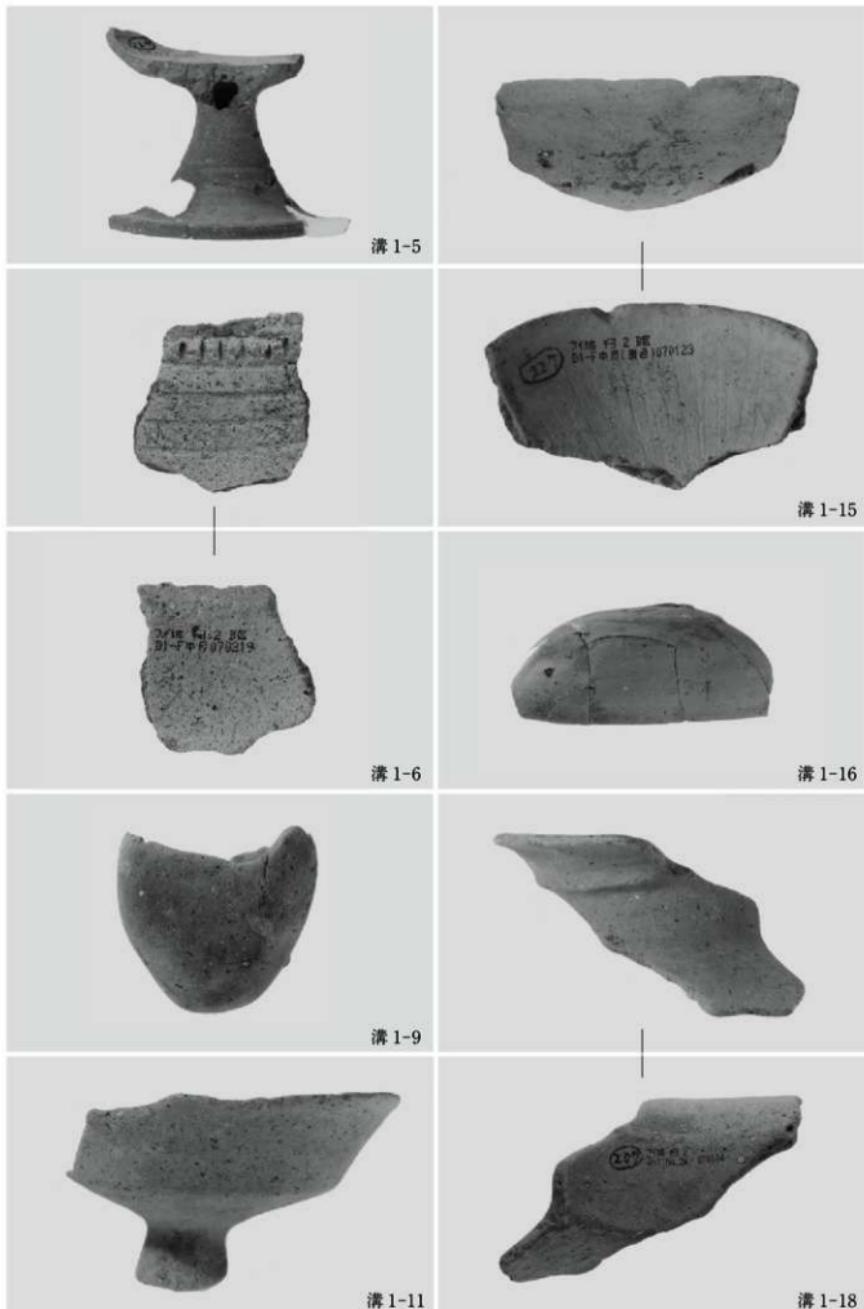


2. 3～5号溝 (北西から)

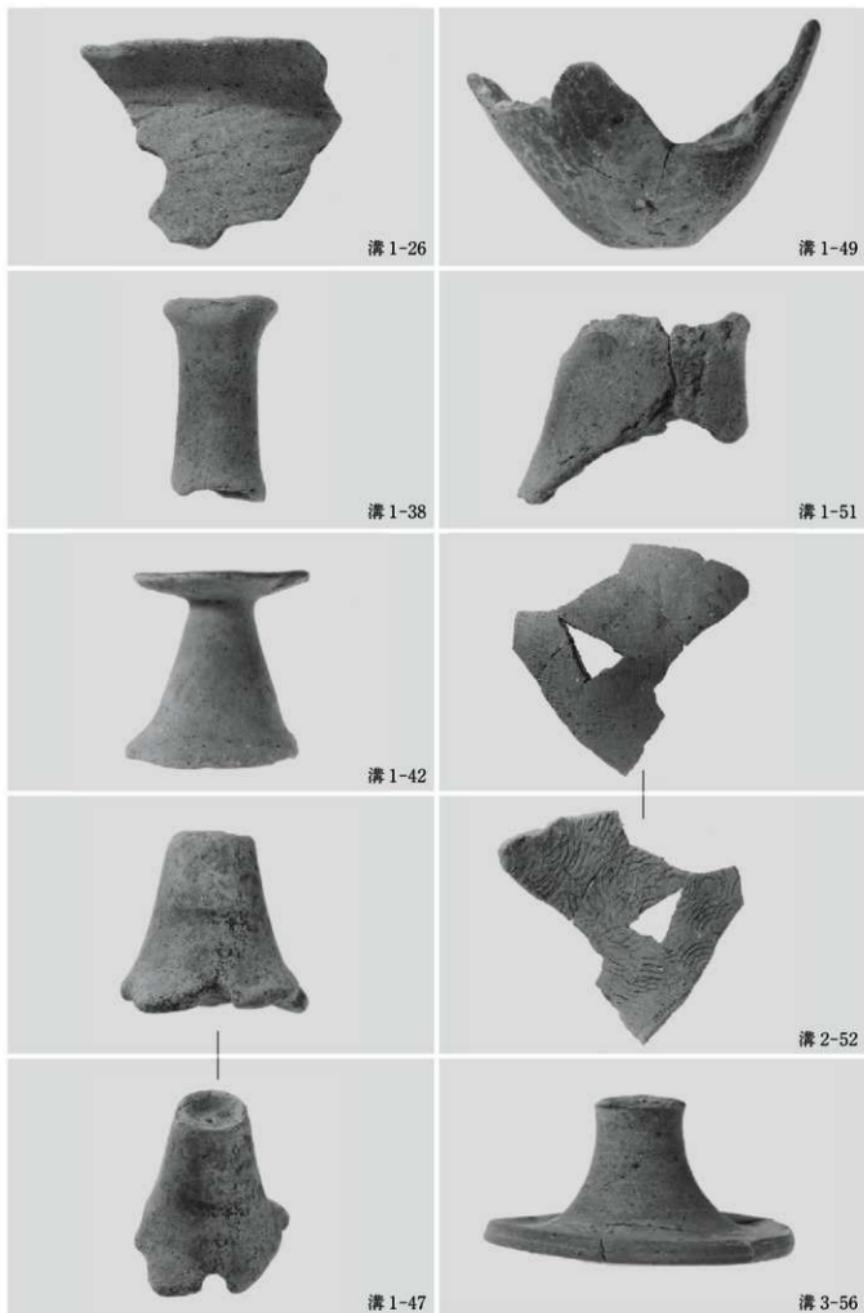


3. 3～5号溝土層
(北から)



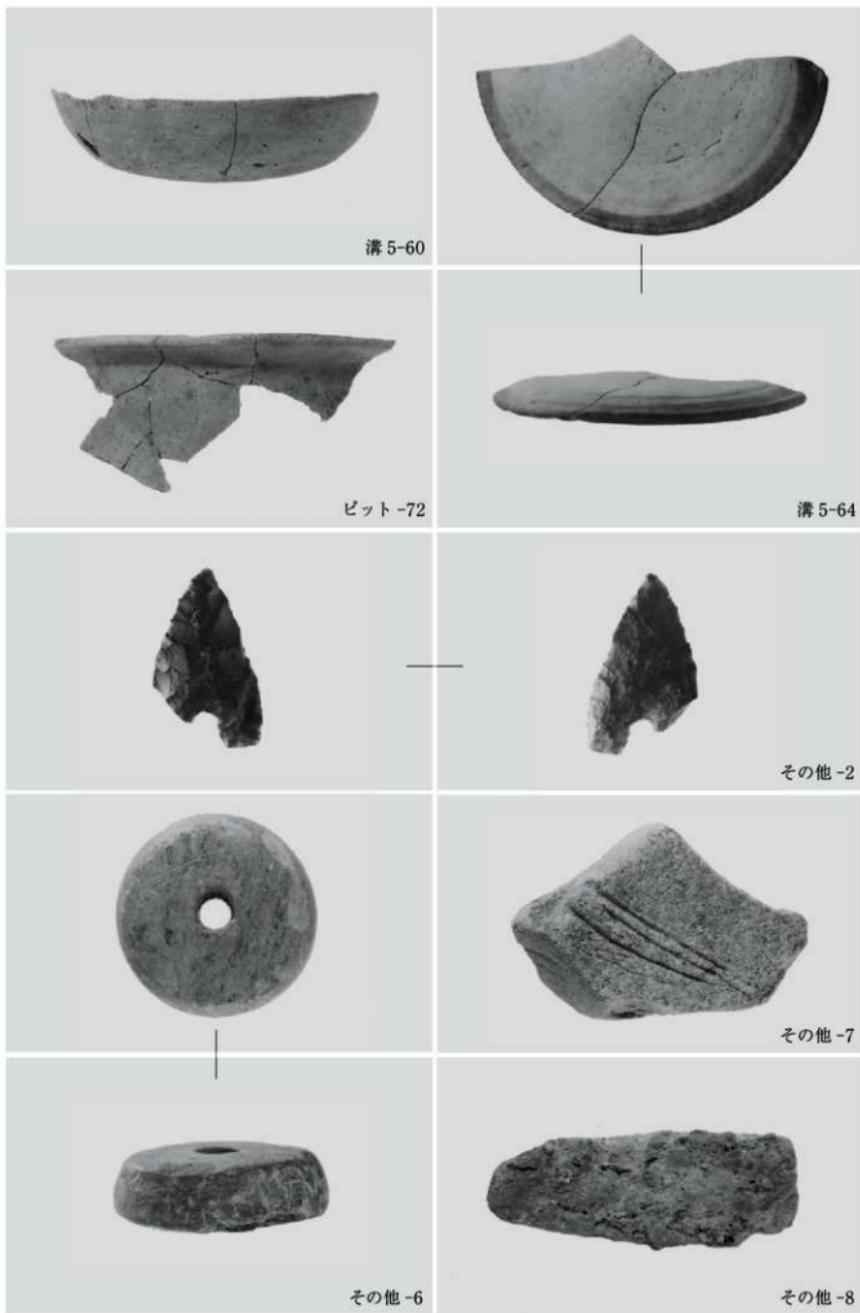


第2次調査区出土遺物①



第2次調査区出土遺物②

図版 30



第2次調査区出土遺物③



1. 第3次調査区遠景
(南西上空から)



2. 第3次調査区全景
(北西上空から)



1. 1区全景
(上空から)



2. 2区全景
(上空から)



2. 2区南壁、1号溝土層
(北東から)



3. 1号溝土層 (北から)



1. 2号溝（南西から）



2. 2号溝北端断面土層
(西から)



3. 1号土坑断面土層
(東から)



1. 第4次調査区
東半部
(西から)



2. 第4次調査区
東半部
(北から)



1. 1号溝（南から）



2. 2・5号溝（北から）



3. 2号溝南端部（北から）



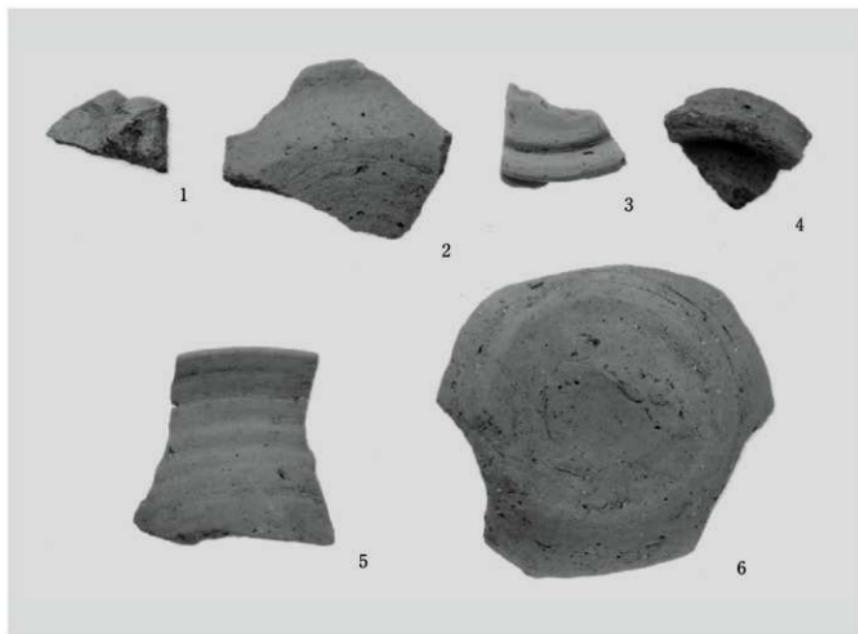
1. 1号溝断面土層（南から）



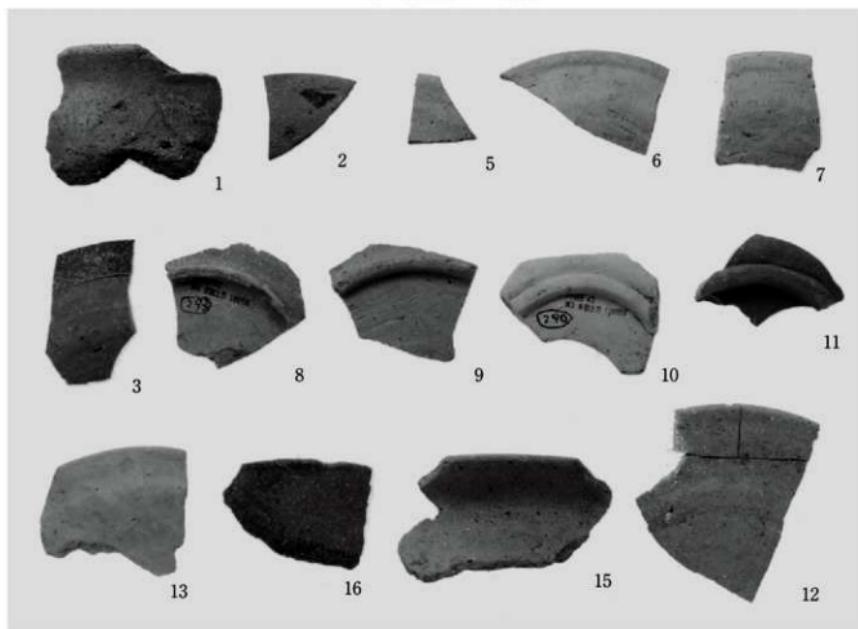
2. 3号溝断面土層（北から）



3. 1号溝断面土層（北から）



1. 第3次調査区出土遺物



2. 第4次調査区出土遺物

報 告 書 抄 錄

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 23	登録番号 0008

築城千代遺跡

福岡県文化財調査報告書 第234集

平成24年3月31日

発行 九州歴史資料館

福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷 秀巧社印刷株式会社

福岡市南区向野 2-13-29